

変態宗科史

全

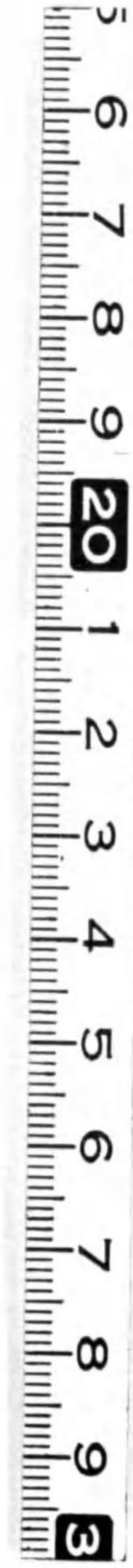
特500

特500-634



1200800284308

634



始





中乙ノ27

函
風 86
號
永久保存

變態宗祧史

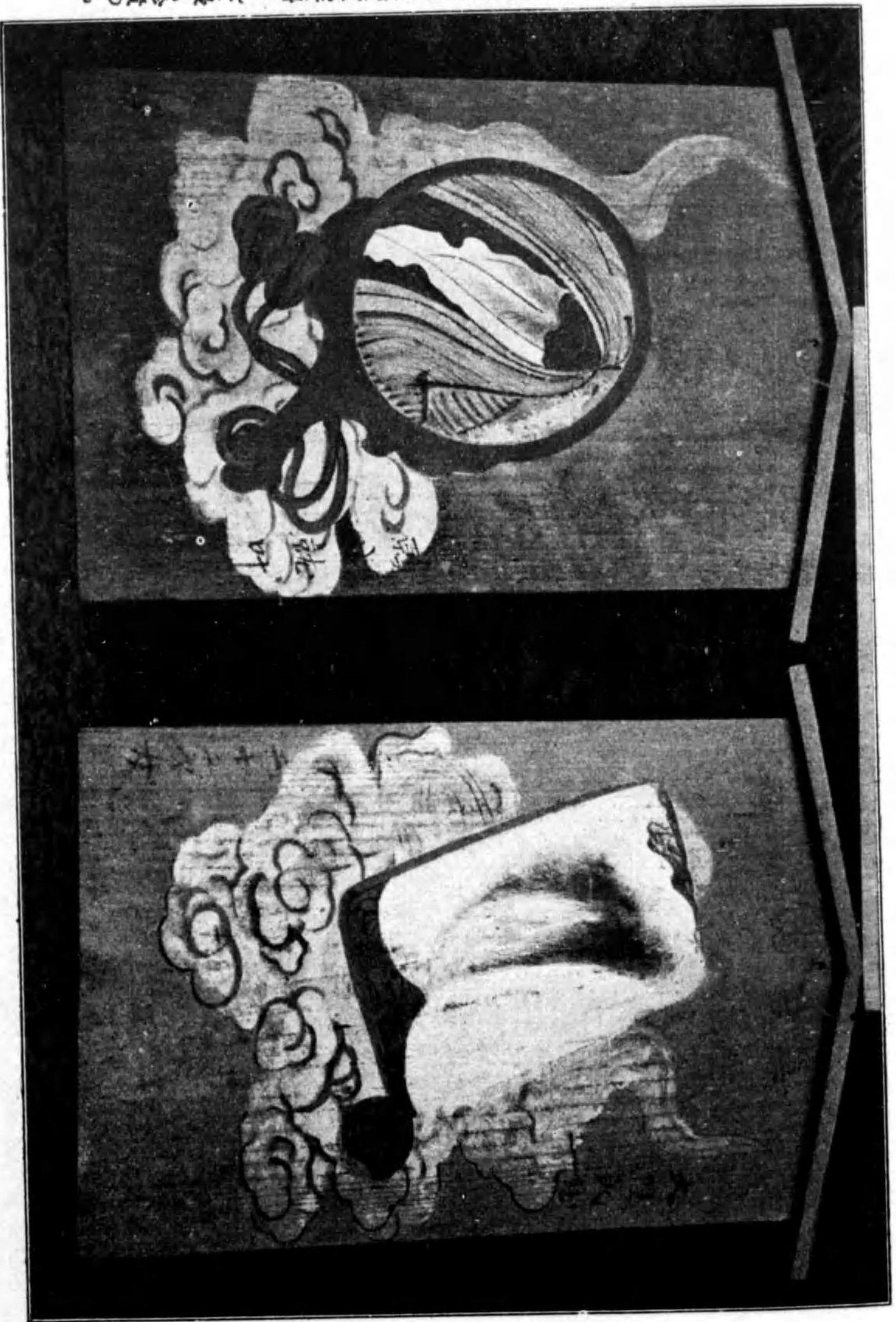
二為存口口三茗

變態十二史
第九卷

全

發行所 文藝資料研究會

信濃上田在女石祠の奉納繪馬。性神研究資料として最も珍貴のも
ので女性を鏡面に現はし五色の雲上に描けるもの。——自寫——



外來の性神



上圖 中央 聖天像。右 朝鮮兩性大將軍。
左 西藏ラマ佛(著者藏)
下圖 ラマ抱合佛(牛の下は女人)

この崇拜及び信仰は、今てこそ一部迷信家の利己的な祈願になつてゐるが、性器そのものは原始民間に於ける兩性觀に、輕重のなかつたらうと思はれる時代の、唯一の享樂的歡喜であり、平等的唯一の結合惠澤であり、唯一の分婉即生殖上の不可思議な驚異であつた所に崇拜を誘起し來つたので、それが漸次性器の障害治療、子を得る爲に信仰するに至つた宗教であつたと思ふ。それが今日の智的宗教に進化するまでには、その間に幾千年の距離が在つたかは想像も出來ない、頗る漠然たるものである。そこに研究の興味もあり、艱難もあるるので、自分は隠れたこの研究家の飛躍と教示を期待してゐるものである。

本書の實況の寫眞は相當に豊富にして貰ふ豫定であるが、それも公刊上許される範圍で我慢せねばならないが、これ等多數の資料は同志、頑愚洞、砂山岳紅、稻垣豆人、青山長橋諸兄の應援に因るもので、心から感謝の意を表するものである。

大正十五年十二月一日

著 者 巖

目 次

第一章 緒 説	一
第二章 性器崇拜の研究者とその書目	七
第三章 性崇拜の變遷と文献	九
第四章 性崇拜の實況	二一
第一節 大岩石に現はれたもの	二一
第二節 自然石	二二
第三節 石棒崇拜	二六
第四節 近世人工の神	二八
第五節 樹木による崇拜	四一
第六節 動物による崇拜	四七
第七節 その他による崇拜	五九
第八節 佛家に於ける性崇拜	六〇
第九節 復活を表象した墓碑	六〇
第十節 名所名園と性の關係	六三
第十一節 傳説、附會より來た崇拜その他	六四
第十二節 性神祭事	六五
第十三節 率納物	六六

第五章 現在に遺る信仰と世俗行事

第六章 性崇拜及び信仰を離れた遺風

第七章 將來の研究を要する問題

目 次 終り

挿繪目次

- 繪 (原色刷) 淺草慶の市
- 〃 信濃上田在女石祠の奉納繪馬
- 〃 外來の性神(四種)
- 〃 性神を遊戯的に描いた一種
- 三賢一致書」の挿繪の一種陰陽成形圖
- 淡路オノコロ島
- 日向岩瀬川の陰陽石
- 美濃大井の傘岩
- 東京南無寺のお客神
- 相摸延合寺虎御石
- 和歌山新堀町神明社の子持石
- 岩代信夫郡女形石
- 陸中小山田村菊池喜代次方の石神
- 尾張熱田の道祖神
- 三河猿投山の磯神
- 京都三島神社の鯉繪馬
- 東京深川八幡社の三猿
- 尾張熱田の地藏
- 駿河清水江尻町東泉寺の日限地藏
- 加賀金澤兼六公園のせきれい島

- 信濃木會上松の女天岩
- 山神と婚した橋本左内
- 尾張のテナコ祭及び腰部の大根を擴大せるもの
- 信濃上田在男石祠の奉納物
- 卷堀神社の奉納物
- 福島地方の道祖神奉物
- 阿波のお花権現の奉納物
- 奉納物として性に關する小繪馬
- 性に關する御影札
- 蘇民將來三種
- 卯 杖
- こけし 遣子
- 木ノ葉 猿
- 大阪十日戎の縁起物
- 伊勢二見のお福
- 山形の桃太郎
- 琉球の獅子頭
- 松本の木獨樂
- 金澤の女だるま
- 正月の手遊び「奥奉公出世双六」

變態崇拜史

新編 三卷

第一章 緒 説

本書は題して「變態崇拜史」といふが、主眼とする所は自然崇拜から來た原始宗教的、生殖器崇拜史の
大要である。

この生殖器崇拜が淨化され進化されたものが、今日の智的宗教であるとすれば、吾人に變態崇拜教とされ
る古代宗教は、吾々の遠祖から見たら却つて今日の宗教が變態的宗教であるに相違ない。

大正十年に自分は幼稚な研究を「性的神の三千年」として公刊して以來、早や茲に五ヶ年を経過した。
のち徐に彼の書を顧るに、考その他に於て頗る愚劣且つ獨斷的なものもあつたので、その後根本的に調べ
直してゐるうちに大震災を食つて、折角撮影した寫眞やスケッチは悉く烏有に歸して了つた。それでも機
會ある毎に研究は怠らぬ心算でゐた所へ、今度の「變態十二史」の一篇にといふ話になつて、取敢へず手
廻りの資料で、概要を發表することにしたが、専門的、部分的の研究は他日の「日本に於ける生殖器崇拜

史」に詳細を盡すとして、茲ではその起源と、今日に至るまでの道程及び變遷を略述し、主としては現代に遺されてゐる崇拜の狀態や變遷化した世俗を探り、代表的事實を披瀝して見たいと思ふ。それはやがて吾々の生活と性器崇拜との交渉が、どの程度まで傳承され來つてゐるかを知る方便でもある。

昨今のやうに萬事が文化を口頭にして變化して行く世相に在つては、性器崇拜の研究も今が終りにちかいかも知れない。それは五年前に現存した社祠が、昨今では全く廢滅してゐる所も在るし、

内務省は豫算八千圓でヘンな神様の身もと調べをやる、何でも全國に二千五百餘の淫祠がある。かういふのを片ツ端しから撲滅するのださうな。神様もウカ／＼してゐるとライオンに食ひつかれる世の中になつたのである。

などと、本年八月二十日の「東京日日新聞」の雜報にまで、記事がのるやうになつてゐるから、今のうち出来る丈の實査と發表も必要だと思ふ。

佛教を代表する万字も、基督教を表徴する十字も、共に佛教や基督教の出現前に廣く使用されてゐたといふ事實は、文様として原始民族間に、洋の東西をとはず共に偶然的に試みられてゐた事が、幾多の文献に明かな如く、生殖器の崇拜はそれ等の時代よりも更に舊く遠く、全世界的に行はれてゐた事實に就ても歐米諸學者は等しく證明してゐる所であるが、藝術も亦第一步を性器の讚美から出發し來つた事實は、専門家も既に肯定してゐる所である。然るに現代の宗教及び宗教家は、宗教の根元が性器崇拜に在ることを一種の瀆辱として、努めて否認し若しくは言を避ける如き態度に居るのは頗る卑劣な話で、自己の存在を

知つて、両親の存在を否定するやうな者である。この罪は宗教家許りではない、一般世人も亦看過一顧せぬものが多いのは遺憾である。

「生殖器崇拜」を言ふものがあるならば、我等は必ず唇邊に冷やかなる輕き笑を寄せて、「野蠻人の遺迹」と嘲り去る。然れども我等の祖先が拜むだ信仰の内容と、今の我等が輕蔑する智識の意味との間には、千里の距離が横つて、殆ど絶縁無交渉の狀態だ。祖先が拜んだのは「生殖器」だ。而して我等が赤面するのは「淫具」である。我等は先づ此の淫心を離れて考えるでなければ、到底我が祖先、即ち我等が輕蔑する蠻人の心に宿つた宗教藝術道德の、莊嚴雄美なる大觀を理解することは出来ない。(木下尙江「創造」一頁)

蠻人たる吾等の祖先が、荒涼たる原野に投げ出されて在つた時、彼等の眼に觸れた驚異は實に輝く太陽であつたらう。内にして考ふるものは摩訶不思議な人間の生殖であつたらう。この二つの事實は自然を創造する源泉として原始民族には解し難い謎であつた。それがやがて信仰ともなつた。太陽と生殖、それは何れが先に彼等の信仰となつたかは判らないが、動物の進化した一類の人間として、彼等は食ふことと性慾のみが、生きる唯一の存在であり事業であつたに相違ない。天然界に生成發育してゐる獸類その他の植物魚貝の類は彼等の食食に充分であつたらう。是等の發育に就ては彼等とても太陽の恩恵を思ひ、食足つて次で來るものは性慾生活であつたに違ひなからう。そこに彼等に解し難い神秘的な生殖器があつたのだ。それは蠻人として驚歎に價する者であつた。勢ひ彼等は健全な生殖器と、同類の生殖を希求するの餘り、彼等にはその謎が、人間の形狀感情を標本とする生物が外界にもあり、そこに生氣靈魂の含蓄も有ると信

超越者の崇拜

じ、神の部分的表現としての山や、生殖器に類似の岩窟が崇拜の標目となつたのではあるまいか。或は生殖生活は原始人類の全生活、全事業であつたかも知れないが、もしそうすれば、生殖器は彼等の最も眞摯に、最も敬虔的に保護し崇拜せねばならぬ唯一の信仰的對照となつたものであらねばならぬ。パツクレーはいふ「生殖器崇拜は自然崇拜の一面で、其宇宙觀は自然崇拜のそれと同じく超越せる者、靈又は神が、天然と人工の區別なく、其形が動物の生殖器に類似する物體に現はるゝを認む。これは自然に生殖器に類似する物體が、人工品よりも尊重せらるゝこと多く、又自然に存在せしが爲に神の眞正なる機關と信ぜらるゝことを思つたからである。神秘主義は何物に對しても此種の見解を下して、總ての困難を掩ひ去るを常とする。太古の人は必要の生ぜし場合に、超越者即ち日本にて所謂カミに祈るのである。而して特に各自の必要の範圍を支配する超越者に祈ることは自然に行はれたのである。此故に生殖器に對する崇拜も、太陽又は火の崇拜の如く、自然にして適當なる正しき崇拜となつたもので、之を以て醜行と關係あるが如く考ふるのは、同情的歴史的の想像力を缺き、強て道學者ぶらんと愆する者の屢々する所であるが、これは大に誤解である。總て古代の人々にとつては、表象は神秘的な自然の活力を表はすに、最も自然で顯著な方法である。」(「人類學雜誌」三十四ノ二號)

現在の性神の區別

現に角この原始民族の崇拜事實に就ては、吾々は單に想像を持ち寄るのみであるが、世界を代表する歴史的三大民族の祖先が、共通的にこれ等の崇拜事實を遺してゐる事は、既に専門家によつて證明されてゐるから、吾々は文献に據り得る程度で、この攻究を進めて置くことが、最も賢い方法であらうと信ずる。扱、現在に遺されてゐる我が國の性器崇拜に關する神々は、前記の如く天然の對照物から崇拜に至つたものと人工的のものに依つたものと、人工的の内にも太古に於ける石棒崇拜と、新たに寫實的に製作されたものがあり、その他樹木並に動物に依るもの、山容、岩窟に因るもの、土製陶製による等を神體としたものがそれに次ぐ多數の大體であつて、神體は性的物件でなくして、單に傳説上に由來するもの、又は奉納物に於て性的なもの、及び性的祭事を舉行するもの等の區別があり、更には緣起物としての頒布物による遺風も少くない。而して以上の諸神祠は堂々たる社殿を構えて居るものと、野祠と露出のまゝに在るものとの別もあるが、茲に特に大書すべきは道祖神の信仰である。

傳説を現實化した道祖神

道祖神は實に我が國建國以來の神話的存在であつて、傳説や神話をそのまま實現化した神であり、最も廣く、民衆化された唯一の神であつて、或る意味に於ては恐らく世界的に最古の信仰を持つ所の神であるかも知れないが、一面には最も冷遇されてゐる存在である。自分は常にこの神に同情をもつ一人であるが近頃澤田四郎作氏もこの神の研究に奔走せられつゝ在るのは意を強うする次第である。

現在の數

然らば以上の性的祠神は現在に於て如何程の存在を見るかといふに、寡聞な自分が知り得た丈でも既に五百個所弱に垂んとしてゐるから、克明に調査したら或は新聞記事の如く二千餘個所の多數に及ぶかも知れない。

宗教としての性神

以上十餘種に區別せらるゝ性神は、之を宗教上から分類すれば何派に屬すべきかといふに、神社として格式を保つものは無論神道に屬すべきであるが、然らざるものは神名を有するのみで佛に習合してゐるものと、佛名にて神に習合してゐるものと、全く佛名に於て佛教に屬すものと、その何れにも屬せぬものと六種に分つことが出來やうと思ふ。これ等の實際的例證に就ては後章に於て、各地の存在事實の代表的

なものを列挙して見るつもりである。

性神の研究家

研究家は専門外

研究書目

第二章 性器崇拜の研究とその書目

性器崇拜の研究は由來人類學、考古學、宗教、歴史學上特に密接な關係を有するもので、以上諸學科の發達に伴つて、變化し來つた思想と文化を知る上に於て、當然着手せらるべき一科目であるのに、從來手を下すものゝ極めて稀であつた許りでなく、偶々私かに研究するものも、世の誤解を怖れて敢て公表せざる如きは誠に遺憾である。然しこの誤解は獨り我が國諸學者の弊風許りでなく、この研究は獨逸に於ても多くは醫學者に於て先鞭を著けられてゐたといふが、我が國では舊くは國學者平田篤胤や宮負定雄位であつたが、之を徹底的に研究し初めたのは頗る晩近の事で、それも専門外の特志家によつて發表されたものであつた。

我が國の性崇拜に就ての研究は明治の開國と共に、直ちに歐米人の着手を見たのであつたが、これが邦文として現はされたものは、大正八年二月の「人類學雜誌」第三十四卷第二號に於て、エドモンド、パツクレーによつて明治二十八年に著はされた、「日本に於ける生殖器崇拜」を出口米吉氏が譯出して紹介されたのが、完結した研究の初めであつたかも知れないが、全く邦人の踏査によつて單行として發表せられたものでは、明治三十二年の八濱督郎氏の編した「迷信の日本」等が早い方かと思ふ。次で、明治四十三年に柳田國男氏の「石神問答」が出版されたが、専門的研究として現はれたのは大正期以降で、上田恭輔氏の「生殖器崇拜教の話」は大正四年頃の發表であつたと思ふが、一般的の賣品とされたのは九年であつた。續いて出口米吉氏の「日本生殖器崇拜略説」(九年)、拙著「性的神の三千年」、石川三四郎氏の「古事

記神話の新研究』横山君の『淫神邪教と迷信』『生殖器神研究』(以上十年)、出口氏『性の崇拜』(十一年)、久保盛丸氏の『生殖器崇拜話集成』、水原堯榮氏の『邪教立川流の研究』(以上十二年)、澤田四郎作氏の『日本生殖器崇拜概論』(十一年)及び『ファルス・クルツス』(十三年—十五年)、田中縁紅氏の『性的神寫真集』、光成信男氏の『宗教と性的迷信の研究』(以上十三年)、久保氏『大生殖器』加藤玄智博士の英文にて亞細亞協會雜誌の別冊として『日本の性崇拜』(以上十四年)等が主なもので、このうち専門的の學者としては加藤博士のみで他は上田、出口兩先輩を初め、澤田醫學士にしても全くの別業になつた研究であつたのは外國の例と一致する所である。思ふに加藤博士は専門中の専門家であるから、學界の爲には今少し徹底的な發表があつてほしいと、常に遺憾とする者である。以上の外に雜誌として、特に「性崇拜號」を出したものは大正十年の「新布教」と十一年の「性」「郷土趣味」及び十二年「土の香」位であつたが、尙、この問題に觸れてゐるものには、和田氏の『淫祠と邪神』(七年)、日下部氏の『二人行脚』(八年)、西村氏の『大和時代』(十一年)、咄堂氏の『民間信仰史』(十四年)、中山氏の『土俗私考』『日本民俗志』、大野氏の『日本先住民の研究』、松岡氏の『太平洋民族誌』(以上十五年)があり、明治に遡つては加藤咄堂氏の『日本風俗誌』、外骨氏の『猥褻風俗史』、幸徳氏の『基督抹消論』等舉げ来れば中々に豊富である。而して日本の博物館にして性崇拜に關する資料の蒐集保管はどうかと云ふに、他の目的で石器部類に蒐集されて居る以外は、先づ皆無であらうか。最も京都の博物館には曩年三四の西藏抱合佛は出展されてゐたが、原始宗教的のものは殆どなかつたやうであつた。

第三章 性崇拜の變遷と文獻

自分の研究は未だ外國の崇拜にまで及んでゐないから、彼地との比較例證は省くとして、我が國の神話傳説方面から先づこの崇拜説話と文獻を拾つて見る。

性器に對する我等の祖先が嚴肅な態度には、是を批判する吾等も亦不純であつてはならない。もし不謹慎な者があつて、これ等の研究に接するにせば、我が國最古の神話たる『古事記』の類に接することも危険である。

もし、天照大御神に於て假りに太陽崇拜の變形又は一端を窺うことが出来るとすれば、その祖伊弉諾尊伊弉冉尊に於ては性器崇拜の存在が窺へ、國史的には性崇拜が太陽崇拜に先んじてゐたことも考へられる。兎に角、西歐の人祖と傳へられてゐるアダム、イヴの虚色粉裝の傳説に比較して、戀は萬物を産む源泉なりとして、日本の古代史に於ては到る所に耦生神の性的關係を赤裸に大膽に、描出してゐるのは痛快でもあり、敬虔の念をも與へてくれるものである。

今現代語に全譯せる『古事記』(福原武)から、國土創造の一節を抜いて見る。

天つ神には、伊邪那岐、伊邪那美の兩神に、「漂へる國を、作り固めよ。」と、仰せになつて、天の沼矛を賜うた。

伊邪那岐、伊邪那美の兩神は、おほせのまゝに、立ち出でよその途すがら天の浮橋に立ち、沼矛をさし下して、漂つてゐるものを掻き廻されると、その物は次第にかたまつて、矛を引き上げたときには、

その尖端から滴り落つた雫は積み重つて、一つの島となつた。おのころ島である。

兩神は、この島に天降られて、天の御柱を立て、八尋殿——立派な御殿を建て、こゝに始めて、夫婦の道を行はれることになつた。

で、先づ、天の御柱を右からお廻りになつた伊邪那美の神が、同じく天の御柱を左からお廻りになつた伊邪那岐の神に先立つて、「あゝ、美しの少男よ。」と、聲をかけられ、續いて、伊邪那岐の神も「あゝ、美しの少女よ。」と仰せになつた。

しかし、伊邪那岐の神は「婦人が男子に先立つて聲をかけたのは、よろしくないことである。」と、お考へになつたが、先づ／＼といふので、お産所を設けられたが、成る程良い子は産れずに、水蛭子が産れた。(この御子は、葦船に入れて流し棄てた。)淡島が産れたりした。

男女の二元性を明かに説明したものは實にこの時からであつて、兩神の凹凸の會話、鶴鶴が交道の暗示を與へた等の説も世人の周知の物語である。當時もし性器崇拜の事實がなかつたとすれば何等問題はないが、仔細に味讀すれば、行文の至る所に性器崇拜の痕跡は裏書されてゐる。茲で將來の研究にまつものは「天の御柱」「天の瓊矛」の類は、果して柱狀の男形と解すべや否。現今、地方の結婚式の席上に、男女の陰具を飾り若しくは間々それに類した俗習のあるのは、岐、美兩神の柱廻りの古事に由來し、又は因縁するものも含まれて居るものであらうか。

その後伊邪那美の女神に迦具土の神のお産の時、みほとを焼かれてなくなつた。男神は思慕の餘り死の黄泉國まで追はれたが、腐爛した女神の死體に肝をつぶして逃げ出されたので、女神は部下をして追跡さ

天の御柱
天の瓊矛

二元性

桃の實と防魔の
關係

岐神

塞神

岐塞兩神は陰陽
石崇拜の始め

舶來神との習合

猿田彦

せられた。そこで男神は逃げながら防禦的に色々の物を投げられた。その一種に桃の實があつたことは、性神研究の上に見遁せぬ一例證である。又『日本書紀』に、其の杖を投ぐ、是を岐神と謂ふとある。岐神はフナド又はクナドと讀むもので、來る勿れと、根の國よりの邪鬼を禦いだものであつて、更に幽明の通路を塞壊された大石を泉門塞大神とある。之は同じく邪鬼の通路を塞いだ神、即ちオサへの神で、この二者を同一神として道反の大神と稱したのであるが、一は柱狀の神であり、一は圓石の神であり、『記傳』に於ても道俣神としてヒコ、ヒメと兩性神に分け、地方によつては陰陽石の前身として塞神として併祀され共通的な職能の結果は、いつか又混淆されて、フナドの音は船戸神に轉じ、塞の神は災の神、精の神、齊の神、幸の神ともなり、(音讀して幸は荒となり荒神から庚申にもなつたらしい。)妻の神、産の神となつては婦女子の神となり、産は蠶に、蠶は又山の神に變じ、岐神と合して衢の神となり、支那文化の輸入と共に彼地の類似神、道祖神と呼ぶに至つて道陸神から道六、道行、道鑿に轉じ、道鏡に變じては益々性的化し、道ふさげの石の神なるより石神と稱したのが、音讀のシヤグジンから山護神となり、山神となり塞神に戻つたのと、作神となつて畑神に變じたものや、杓子神として各戸に祭らるゝ杓子の崇拜となり咳の神となる等、地方及び呼稱の變化轉訛によつて二百有餘の分神となり、連綿として今日に至つてゐるのでこの二百有餘の職能を稱名と地方的崇拜とから研究する丈でも、實に尨大な一資料をなすものである。それが後には、天孫降臨の東道役を承つた猿田彦太神に混同し、猿田彦も亦道路守護の岐神となり、神名の猿は申に轉じて庚申と同一視され、佛教との習合をも見たのであるが、猿田はサダ即ちミサキ(岬)で、突起の意味から性器にも解したものか。鼻と性器とは密接の關係を有してゐることは古來から云ひ傳へられ

天狗とおかめ

てゐるし、その妻の神、天鈿女命は神代期中の花形で、ほどを露出しての舞踊に、七尺有餘の猿田彦を笑殺した魅力は、説は鬼もあれ性神と見なすべきで、天狗とおかめの表徴は今に至るまで道祖神に次ぐ俗間の傳統的崇拜である。

須佐之男命

劍と玉

性器と農作物

性器と妊娠

この他、性崇拜に多くの交渉を有する熊野神社、祇園明神、午頭天王等の如きはいづれも、破壊の神であり而して創造の父である須佐之男命の祭神名で、同神が姉命と和睦の際に、女神に劍を與へ、男神は勾玉を受けられた傳説も含味すべきであらうと思ふ。要するに兩性器の表徴たる桃果及び杖が、惡鬼退散の威力ありとされた思想は、『古語拾遺』に於ける蝗の害に對する男莖の效力、及び大氣津比賣の神のほとから生れた麥の説話となり、性器崇拜と農作物との關係に進化してゐる。それが更に三輪の大神の丹塗矢となつて愛人のほとを突いた傳説では、性器と妊娠の關係までに進んで來て居り、三段の進化史を説明するものである。

佛教の侵入

地藏の出現

有史以後に至つて佛教の傳來までは、始ど文献の遺されなかつた原因もあり、信仰上の異端者もなかつたのであるが、それ文何等犯さるゝこともない泰平無事な信仰が持續されてゐたものとも思はれる。然し一度佛教の傳來を見るや、忽ち一部知識階級では佛の信仰に入ると共に、大に宣傳にも努めたいのであつたが、當時の民衆的信仰は在來の祖先崇拜や、岐神——性器崇拜が根強く扶植されてゐたので、中々一朝一夕に傳統の信仰を變化させることは不可能だつたらしい。そこで、佛家では類神の地藏を習合させる方便をとつて、地藏も岐神も同體のものであると説き、漸次に信仰を轉化させたものであると思はれる。今に於て我が國の地藏に是れ亦數百種の稱名を冠する地藏の遺され、その一部には道祖神と同體と化した

聖天の俗化

類神續田の盛況

性神と朝廷との關係

ものや、性崇拜の適當なる表徴體を現はすに至つたので、立像をそのまま男形に則れるもの、船形の上に立たせて印度のアルバ(ヨニの中のリング)と同じく兩性を表象したもの、寫實的に變化したものである。遠州金谷洞善院に於ける道樂地藏の如く、抱擁佛として浮彫にし、各地に見る兩性神併立の道祖神と接近せしめた如き類があつた。茲に至つて性崇拜は事實上更に廣義の信仰を生み、範圍もぐつと擴張されたのであつて、佛家は各派とも盛に利用に努めて本地垂迹説に附會した許りでなく、山王權現、摩多羅神を佛法の護法神として混和したり、支那、西藏、印度の性的神佛は殆ど拾出されたのであつた。

『三代實錄』七によると貞觀五年(清和朝)五月、神泉苑で御靈會を修せられ、勅使を差向けられたことが詳記してあるが、これはその頃流行した疫病は御靈の祟りであると、人心は恐怖してゐたので、民衆の力は朝廷を動かして祭祀をとり行はせられたのだ。この儀は天慶年間、づつと降つては正元(後深草朝)元年、更に降つて明應七年(後土御門朝)にも公に行はれたことは『百練抄』十七、『親長卿記』その他にも見えてゐる。この御靈とは岐神の別稱で、矢張り性器を崇拜した行事である。かゝる祭事が朝廷を動かすまでに至つたのは、この崇拜が、佛教に對する反動も多少は思はれるが、又如何に根強い信仰が當時の一般社會に普及されてゐたかを知る一考證である。最もこの御靈に就てはネブスキー氏は「道祖神に就ては、色々の方面から研究したが、どうも變死者——御靈——を祭つたものだと思ふ。この想像が本當とすれば、右の理由を以て、道祖神を生殖器で祭るのは、一番適當な方法だと思ふ。」「性(一ノ七)と云つてゐる。

天慶二年(朱雀朝)の御靈に關しては、「近日東西の兩京大小の路衢、木を刻みて神と作し相對して安置す、凡そ其體像丈夫に髣髴す、頭上に冠を加へ鬢邊に櫻を垂る。丹を以て身に塗り緋衫の色を爲す、起居

立川流の出現

淫神取締の始め

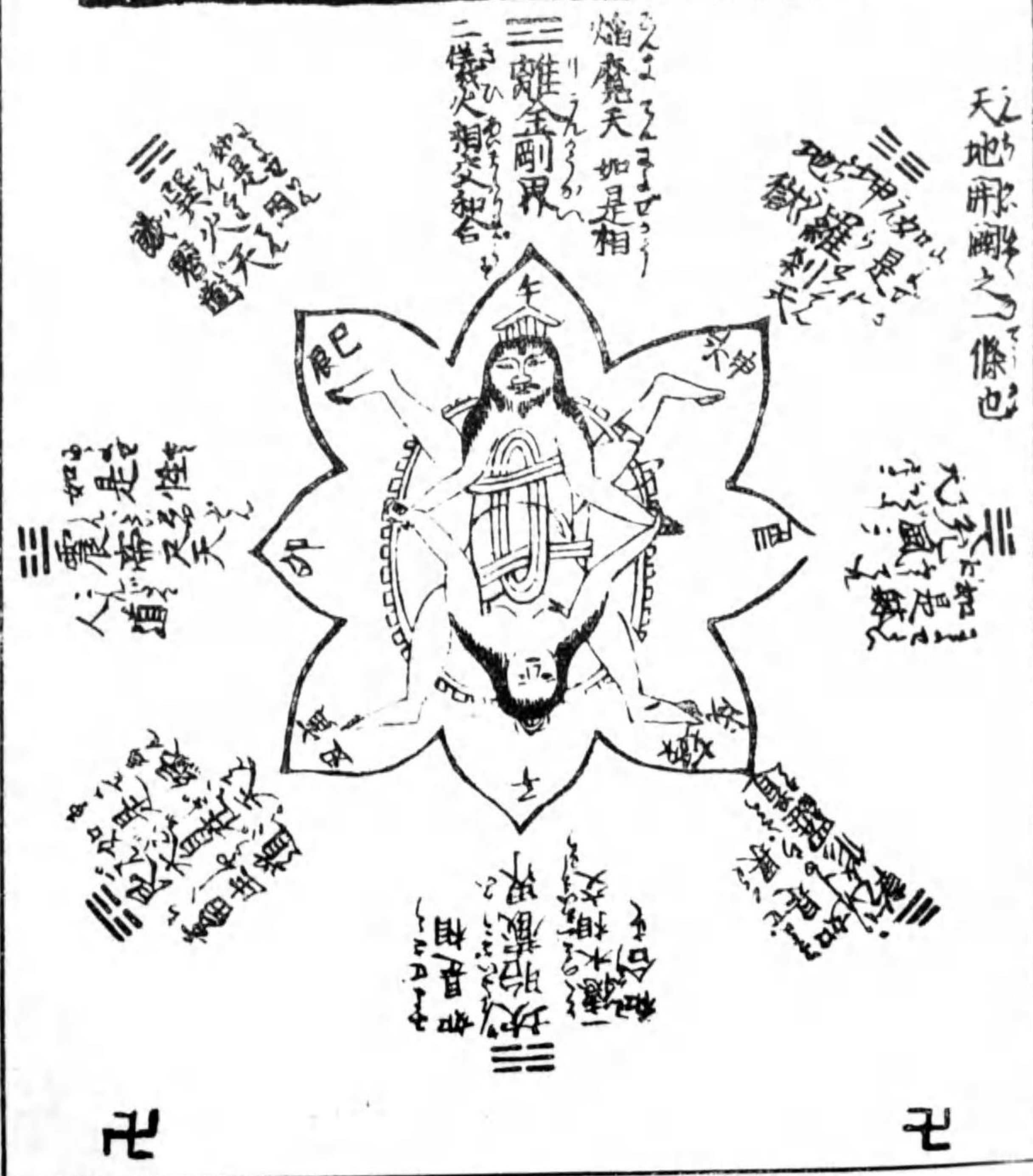
結婚の神出雲路の道祖神
出雲大社は誤傳

同じからず通に各其貌を異にす。或所にては女形を作し丈夫に對して立つ、膺下腰底陰陽を刻み繪がく、兒童猥雜拜禮慳懃なり、幣帛を捧げ或は香花を供ふ、號して岐神と曰ひ又は御靈と稱す(扶桑略記)とあつて、佛教渡來後未だ三百五十年の帝都の信仰程度は眼前に髣髴して來るやうである。當時は専ら縁結び、安産の神としても祭られてゐたのであつた。

そこで佛教側殊に眞言宗に於ては、任寛、文觀の如き傑僧が、空海以來の秘法を、人生の最勝樂を如實に味はしめんとして、立川流なるものを創成し、是を神道側の性器崇拜に對抗せしめて布教したのであつたが、多くは誤解に陥つて、後終に教典一齊は燒却すべき嚴命が下されたのであつた。この教旨の創成されたのは白河から堀河の朝にかけての頃であつたらう。それは鬼に角眞言一派に於ては性的若しくは相對的に解せらるべき信仰は、他宗に比して決して少くないやうである。それから文保元年(花園朝、立川流の流行した後醍醐朝の前)には、儒釋道を一に歸した「三賢一致書」の如きが現はれて、總てを性的に解決してゐた所は痛快であつた。これに類したものに、「新猿樂記」の一節に年老いた妻が、夫の歡心を求めんとして聖天やら道祖神やらの混淆した神前に、滑稽な祈願をするシーンなどのあるのも注意すべきである。但し白河朝の應徳年間に、檢非違使に勅して淫祠を毀たしめられたこともあつたが、是等は果して性神方面であつたものや否。

京都五條及び出雲路の道祖神は、伏見の稻荷と共に鬼に角この崇拜の代表神で、大正の今日まで結婚の司神と云へば出雲の大神を思はず如く、其の起源は實に出雲路の地名に由來したものである。「源平盛衰記」にも「都の加茂の河原の西、一條の北の邊におはする出雲路の道祖神」とあり、「山城名勝記」にも

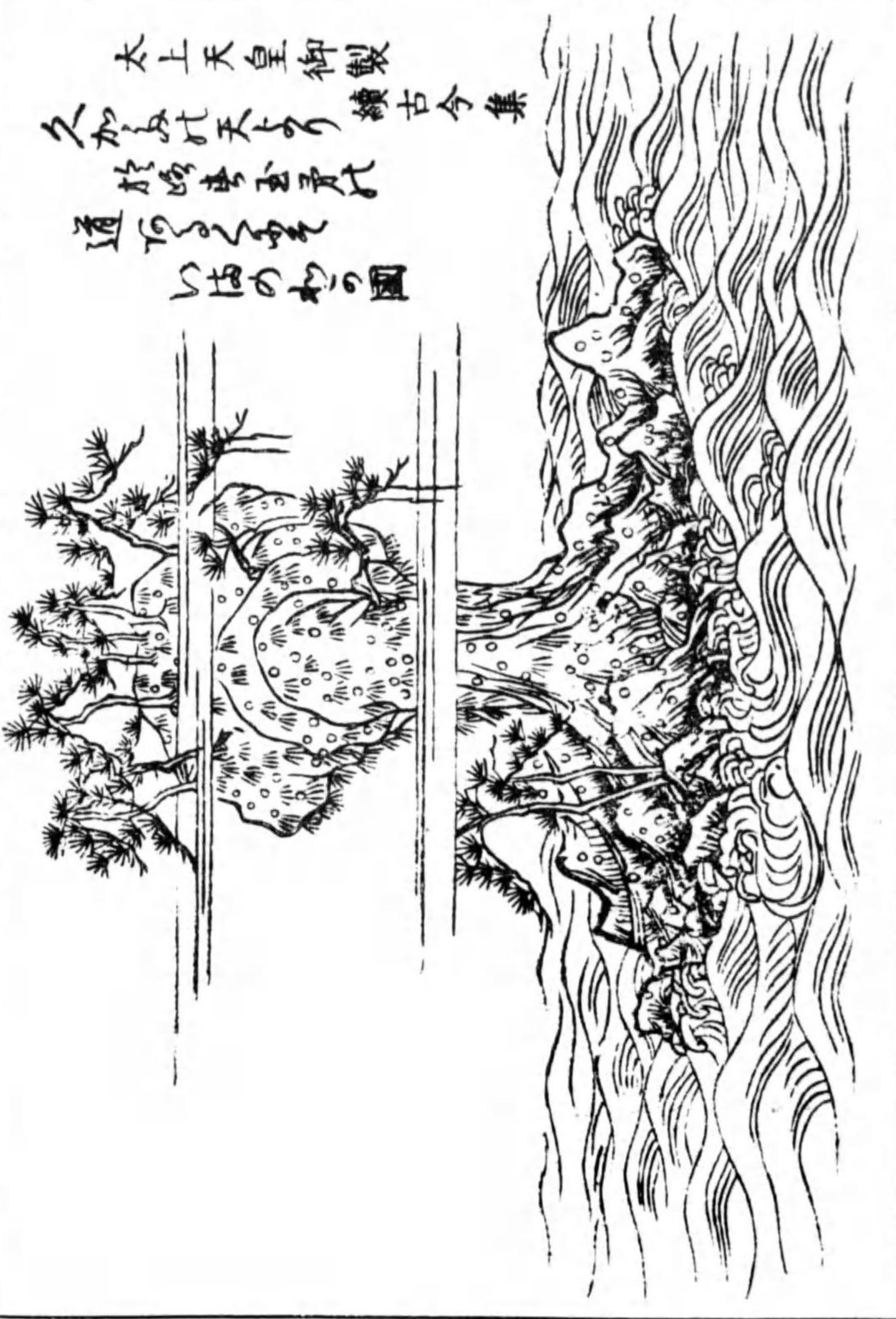
陰陽形成圖



(照參頁四十)

種一の繪挿の「書致一賢三」

太上天皇御製
 續古今集
 久かふは天より
 於此まをすは
 道にふみか
 くはのわの國



淡路オノノロ島——「神に圖」より——(二十一頁參照)

笠島の道祖神

「今出川北二丁、京極西二丁、幸神町におはする出雲路の道祖神は是なり、舊地京極敷」とあり、今の寺町今出川上ル西入幸神町の道祖神は夫れである。この道祖神の流行を裏書きしたものは仙臺の少し南の、名取郡笠島の道祖神で、『源平盛衰記』には「之は都の加茂の西、一條北におはする出雲路の道祖神の女なりけるをいつきかしづきて、よき夫にあはせんとしけるを、商人に嫁ぎて親に勤當せられて此の國に追ひ下され給へりけるを、國人之を崇敬て神事崇拜す、上下男女所願ある時は、陰相を造りて神前に懸けかざり奉りて、是を祈り申すに叶はずといふ事なし」とあるが、祭神は男根石であるらしい。後年神官穴戸氏傳説の神徳を穢さん事を憤り縁起を制し、享保十七年神位を請ひ(笠島道祖神記)、次で陰相を掛くるを禁じたところがあるが、實方中將は下品の神なりとしてこの神の前を下馬せず打通つたので、神罰によつて落馬し云々と(觀跡聞老志)あつて、諸書にも著名の神であり、右の傳説の眞偽は別として兎に角、今に東北に於ける道祖神の研究資料としては捨て難い信仰と奉納物は繼續せられてゐるのである。それに奥州の藤原氏は金勢神として六十六體の男形を領内に分祀した説も傳へられてゐるので、それかあらぬか頼朝の東夷征討の際、陸中の一ノ關で道祖神に參詣したことは『吾妻鏡』にも見えてゐる。

藤原氏と金勢神

信長の浴衣

幸田露伴翁の「潮待ち草」を見ると、湯帷子の記事の中に、織田信長が陰形の模様を染めた浴衣を着用した記事があるが、一代の將ともあるものが好奇心で着たものとも思へぬ。これには何か神經質らしい信長のことであるから、打ちくつろぐ間にも劍難魔除け等の意味で用いたものでもあらうか。徳川期に至つてのこれ等文献は『白石先生神書』その他なほ國學者方面に求むれば大分あるが、一般に知られてゐるもので挙げれば、橋南溪の『東遊記』で、これによれば兩羽地方の崇拜状態を察し得られる

許りでなく、この風は實に現在に於ても決して少いとは云へぬのである。これに就ては姉崎博士の「中奥の民間信仰」(迷信の日本)を参照すれば得る所は多いと思ふ。「東遊記」の一節は次の通りである。

「出羽國榎美(飽海?)の驛のあたりの街道の兩方に岩の聳えたる所には幾所ともなく必ず岩より岩にしま繩をはり、そのしめ繩のもとに、木にて細工よく陰莖の形を作り、道の方へ向けて出しあり、其陰莖甚大にして長さ七八尺ばかり、ふとさ三四尺周りも有るべし。あまりけしからぬもの故所の人に尋ねれば、是は往古より致し來れる事にてさいの神と名付けて、毎年正月十五日に新らしく作りあらたむるなり。所の神のことなればなかく、龜略にはせず、たとひ御巡檢使又は御目付等の通行の節も此まゝにて若きもの、戯れなどにあらずといふ。また其しめ繩に紙を結びて多くつけたり、これはいかなる故と問へば、此あたりの女よき男を祈りてひそかに紙を結ぶ事なりといふ。誠に邊國古風の事なり。京都の今出川の上にある所のさいの神といふは、いかなる神にましますや、すべて田舎にいろくの名は替れども、陰莖の形の石、陰門の形の石を神佛として所の氏神などにはひ祭りて、たふとびかしづく所多し、日本の古風にや。神代の巻にいふ所或は鶴鶴の古事などふるく言ひ傳ふる事多ければ、神道の秘事にはかゝることもあるべしとぞおもふ。」

性神の稱號

こゝで一寸説明して置かねばならぬことは、性神に對する地方々々の呼稱の相違である。廣義には道祖神、岐神、精の神、庚申、石神、金勢神、熊野神社、駒形、地藏、大黒の如きも、神性を同じふしながら呼稱に特有なものである。例へば東北の「金勢」「駒形」「ソウゼン」「鹽竈」、越後の「裸石」、甲斐の「こ(靈)神」「ハタケ太神」、上下總の「石神」、東京灣沿岸の「吾妻」、三河の「磯神」、岡山邊の「金丸」、薩摩大

現在信仰を有する範圍

明治の取神

隅地方の「田ノ神」の如きがある。金勢はコンセイと讀み、金精とも金性とも又塊清と書いてゐる所もあるし、東京在に子の權現と稱し植を奉納する寺があるが、此處なども子聖ともかくのはコンセイにちかひものか。金精明神はその神體は八九分までは男根像を祭るもので、「コンセイ様」とは、サイの神のことなり。サイの神は幸の神とかく。男女を幸し、婚を結ぶ神なり。」と、「和訓栞」にあるもので、無論道祖神の一種である。現今は主として俗にいふ水商賣の家、料理店、藝娼妓、席亭、藝人等に祭られてゐる。そこで、いよ／＼明治五年三月になつて、太政官令で取締令が發布された。

「從來遊女屋其ノ他各宿等ニ祭リアル金精明神儀風俗ニ害アルヲ以テ、自今早々取捨テ踏潰スベシ。」所謂淫祠の名目の下に大鐵槌を下されて、當時、東京では日本橋から河中に投ぜられた物は水面を埋めたと傳へられてゐるし、同年四月八日の「東京日日新聞」は實に次の如き記事を載せてゐた。

頃日兩國柳橋の絃妓等是まで神棚に鎮座ましませし金勢大明神の稱を削りて玩物に下し、同所の川岸より悉く流したり。然るに件の陽物は底に土の重みある故、皆水面に〇頭を顯し陸續として浮み流れしが、其小なるは金色を帯び、其大なるは丹色を帯び實に一笑に堪へざる光景なり。(第四十四號)

これは單に東京のみの叙景であるが、全國的には如何に此の崇拜及び信仰が、廣く瀰漫してゐたかを推するに餘りあるものである。然しこの大打撃はこの時が初めてではなく、既に徳川光圀も水戸領内の淫祠三千八十八個を毀つたといふ逸話も遺つてゐるから、當事者としては時々取締つては來たものであらう。これ等の信仰はいづれも原始當初の崇拜に次ぐ病氣全癒や子授けを祈願した許りでなく、近世になるに従つて配偶者を希求するは純眞な部で、多くは利慾上の祈願も加つて來てゐるので、商賣の不況、生活苦の

水戸領の取神

祈願の目的

表象化

餘波の結果を持ち込むといふ次第に、いつか迷信の方面に轉化して來たのである。それでも山間僻地の信仰には未だ純朴な態度は見られるのであるが、都市のは却つて素朴な所がないし、地方に原始そのままの崇拜も、都市のものは所謂進歩と稱すべきか、信仰状態が表象化されて、餘程専門的に攻察せぬ限りは、それが生殖神の變形であることを氣付き得ぬまでに變化し來つてゐる。最も有り觸れたものとしては縁起物の達磨、お福、招き猫、小判、撫牛、繭玉、恵比壽、大黒、大入袋の類である。

性神の行事

扱、これ等の祭事は幾日に行はるゝかと云ふに、多くは月の初め年の初めに於てである。都人が一日十五日等を社寺に參詣して、縁起物をさけて戻るのもこの類であるが、道祖神祭の多き、多くは年の初めの一月十四、五日頃に行ふことも研究すべきで、これ等は勿論月や年の初めに、將來の禍誤のないやう祈つて安心を求める次第であつて、曆のない時代は月を標準とするより他に方法もなかつた所から、満月の十五日を基準としたものかと思はれる。それ故正月の行事の大半はこの意味が含まれて居り、縁起物も正月の用意として開かれる淺草觀音の歳の市には、縁起店で四寸内外の張り子の陽形を賣つたことは著名で、今日でも客の種類によつては三四片の金箔を附着させたものを櫻紙のやうなものに包んで賣つてくれる。これは獨り東京のみではなく、大阪の有名な一月十日戎の祭日でも、土製の陽形を賣つてゐることは實見してゐる。又花柳界の者には特に紙入や鏡臺内に秘藏されるやうに小形に造られてゐるし、飛騨の高山では有名な一刀彫に、木肌の紅白を利用して兩性器を刻んだ簪を鬘いでゐる。

現今に於て崇拜及び信仰さるゝ性器神は大體以上の通りである外に、神體そのものは何等性器に關係なきもので、名稱の上から信仰を來たしたと思はるゝものに、天神、淡島、蠶神の如きもあるが、淡島は多

淺草の年の市

大阪の十日戎

一刀彫の簪

天神と花柳病

前當り

少の理由もあるとして、天神に至つては全く不明である。或は天神と梅樹の關係から、梅毒類の花柳病を天神に受けて貰ふ即ち納めるといふ、この種迷信者一流の附會から來してゐるものか。遊女の職名に天神などある所からであらうか。蠶神は子神にも通じての性化されたもので、地方に依つては思春期の子女を解放して、繭當る(前あたる)として歡び、養蠶の増收に附會してゐる所もある。

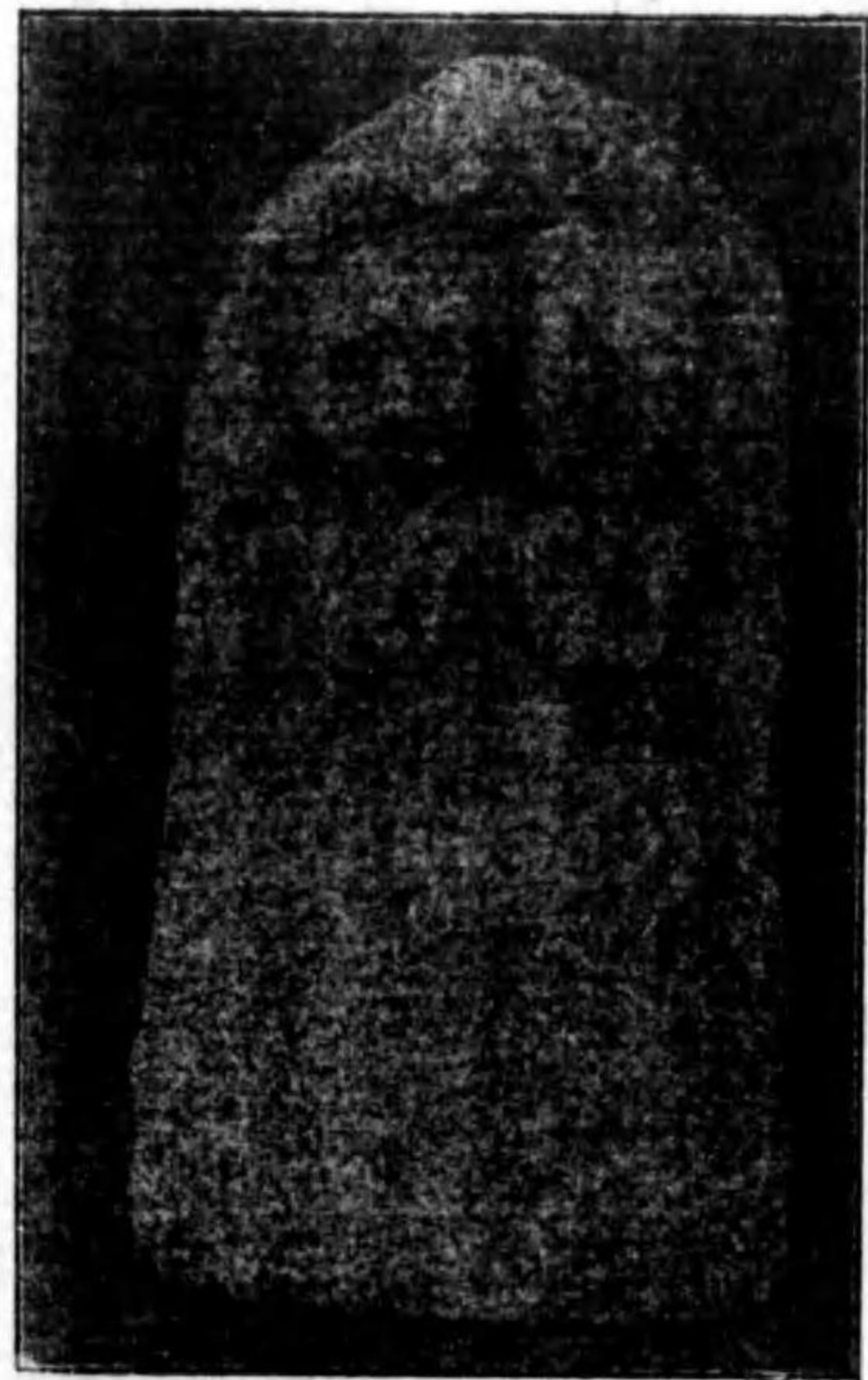


信濃地方の道祖神にして、改造された一般的のもの。
高さ約三尺。

— 岳紅氏寫 —

上野高崎附近の道祖神にして、二體列のもの。
徳川期の建立ならんか。
高さ約一尺五寸。

— 自寫 —



第四章 性崇拜の實況

崇拜の増減

崇拜の變遷に就ては既述の通り、當局の取締りもあり近年青年團の自覺的奔走もあつて、漸次減少はして居るのであるが、又一方には表象化して迷信を誘引するものも出来、信仰者の頭數から云つたら減少するものか増加してゐるものか判らない。

だが、この種の崇拜や信仰が、如何なる方法と存在によつて續けられてゐるかを説かねば、眞に架空談と看過する者もあらうと思はれるので、各崇拜様式の異なるものを二三宛參考までに拾つて見やう。

第一節 大岩石に現れたもの

大自然岩石

オノコロ島

自然的に現れてゐるが爲に神秘の念を興へて崇拜するに至つたもので、最も古く傳はつてゐるのはオノコロ島であらう。天保三年に出板した「陰陽神石圖」にも掲げてあるのは淡路の西北にある俗稱胞島で、海中にあつて潮波に随つて上下自在、地震あるも動かさず、島中奇石磊落、多くの兩性の狀を現はし云々と説明してゐるのは、古傳説に富む淡路だけに奇形にも考へられたのであらうが、同州には未だオノコロ島なるものが他にもある。同じ神石圖に載すもので同じ海中にあるものは備前大島の陰陽石で、陽石は其島の東北にあつて高さ二丈餘、周約三丈、陰石は東南にあつて陽を去る十町餘とある。二者祈願様式に就ては詳細が不明である。

日向の岩瀬川の中流にある小林町在の陰陽石は、天然とは云へ其の形眞に迫つたものである。陽石は河

陰陽石は外に、
沖繩長島、筑前
深江村、安藝
島、備後高須村、
京都岩上神社、
下野日光山等、
頗る多い。

常陸郡龍ヶ崎町にも皇産靈大明神なる性神がある。

笠岩

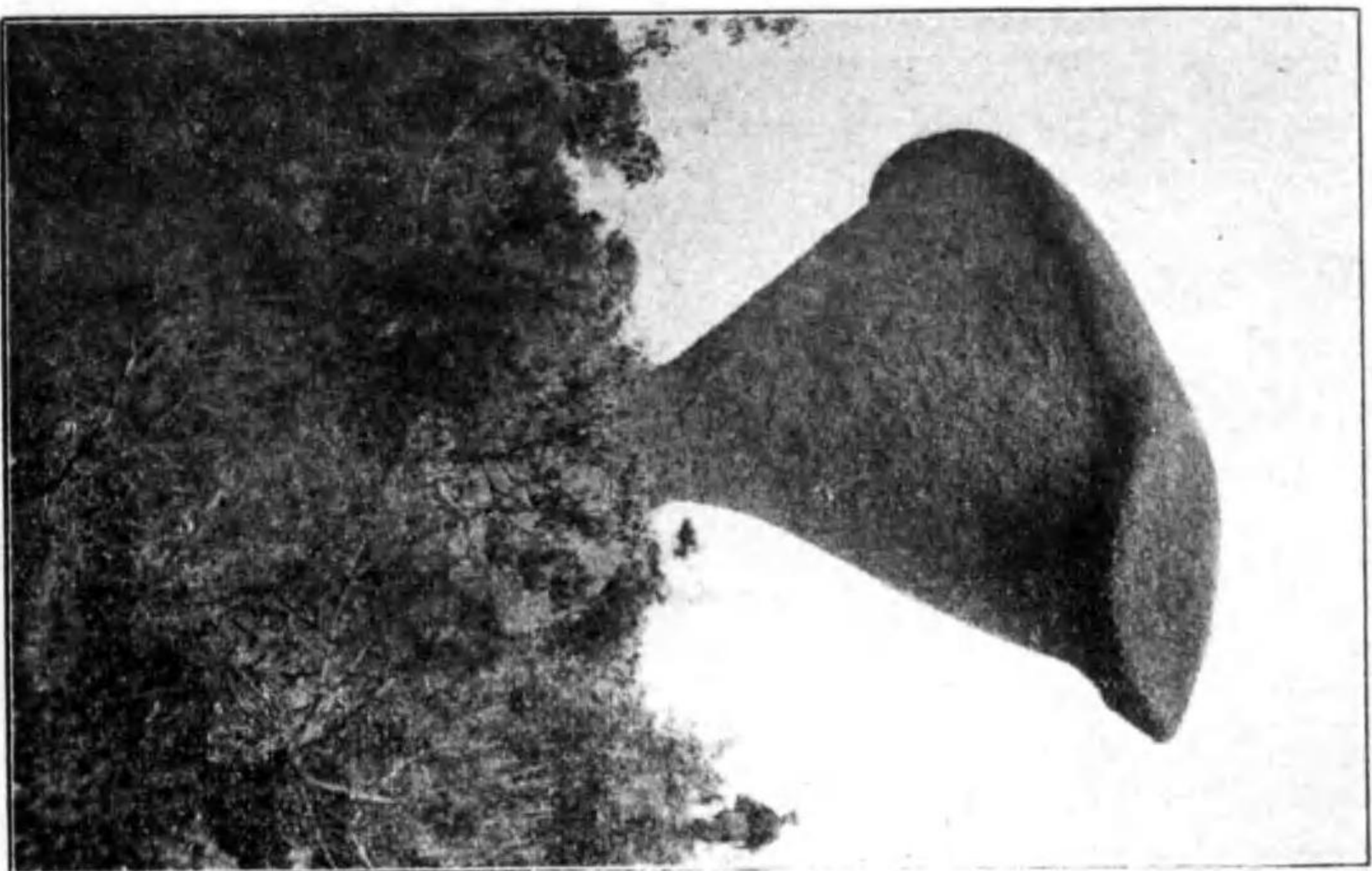
身に突兀と立ち、高さ二丈四尺周圍九間、其の岩裾に斜に陰石があつて、傍に皇産靈幸魂社の祠がある。高皇産靈、神皇産靈の精神を祀るもので、婦人病や子なき者祈れば效驗ありと傳へて居る。外に夫婦石と稱するものも、木曾福島の上松を初め、全國至る所にある。

信濃小縣郡根津村の根津大明神なる自然的配偶狀の陰陽石も著名であるが、同郡鹿教温泉の笠岩様も有名である。

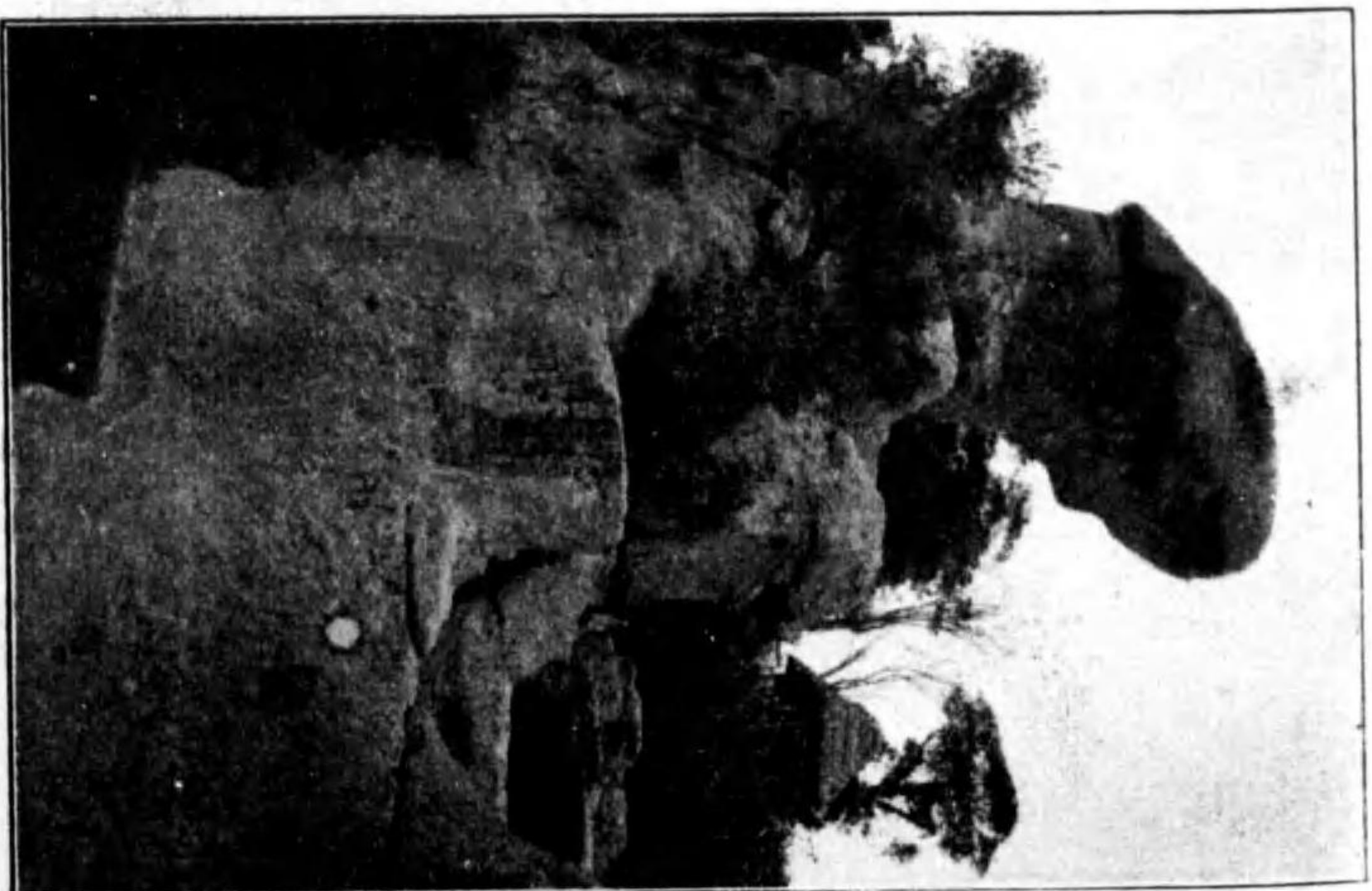
大正八年八月谷川磐雄氏の調査によれば、温泉場から西へ十數町行つた所に笠岩様といふ神社がある。その御神體は巨大な岩石でかなり遠くからも望む事か出来る。笠岩とはその形狀が笠に似てゐる所から名付けられたもので、勿論太陽物を意味するのである。高さ數間、頂上笠の直徑約四五尺、その笠に近い部分に一條の太い繩を廻らしてある。その右方巖續きに女岩といふのがある、これは中央に不規則な細長い孔があいてゐる。又その奇岩のすぐ傍に小祠がある。これが笠岩様のほこらで、中には木製の陽形の神體が納めてある。高さ一尺五六寸、頂部直徑七八寸である。その附近には信仰者の奉納したと思はるゝ木製陽物及び笠岩大明神と署した小旗が澤山さしてある。

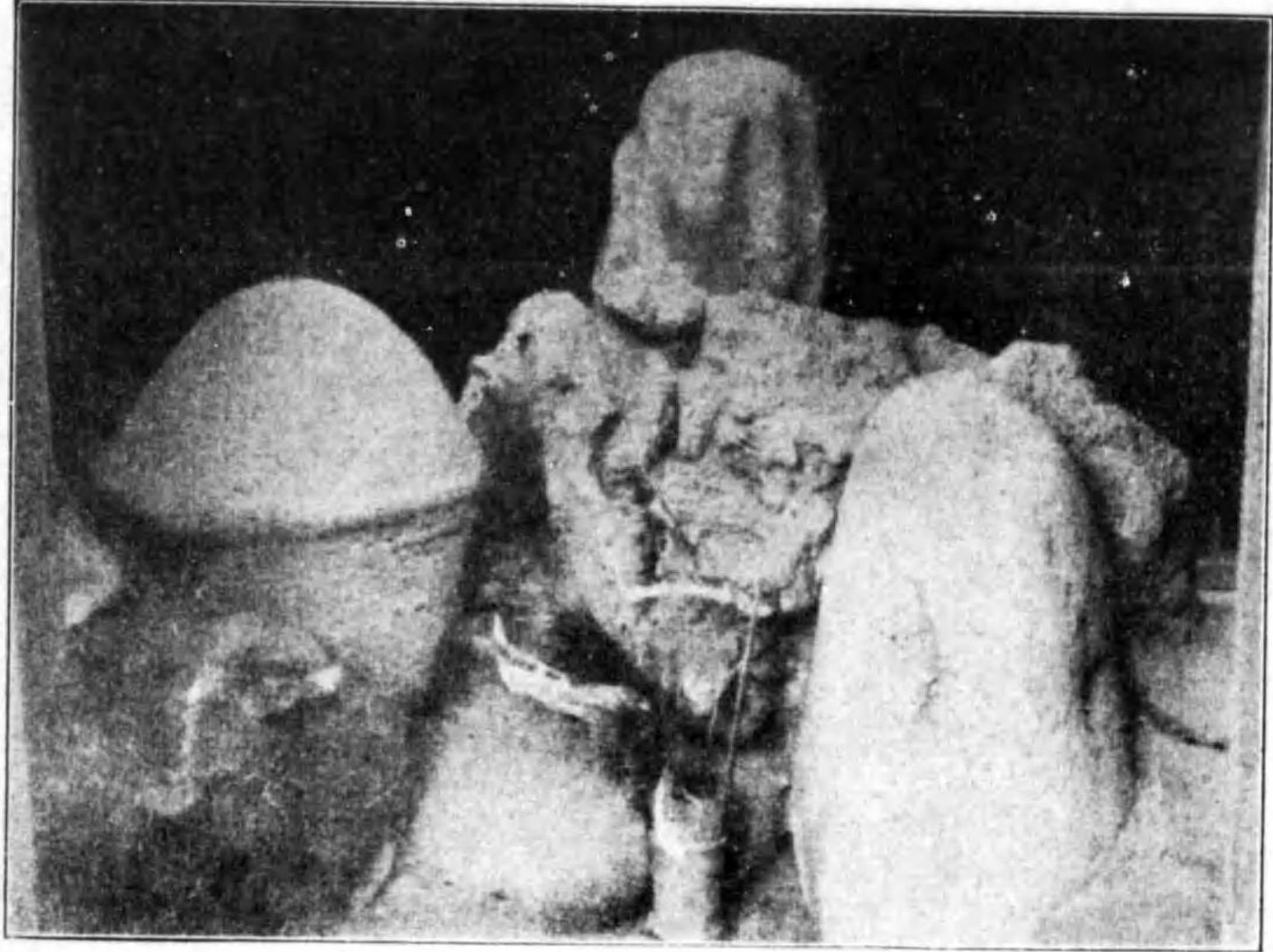
この信仰に就て土地の人からきくと、今でも村民はこれに敬虔な信仰を有して、下の病に效ある神としてあがめてゐる。又女岩の方はその孔を三度くぐれば、子なき婦人は孕むといはれてゐる。この祭禮は毎年十月五日でその行事としては、その岩にめぐらされてある太い繩をとりかへる事が主である。それにはその村民の各家から藁を相互に出し、太い繩になつて持参し、頂上に乗つてとり代へるのだといふ。又この岩は雨乞の效があるので、雨乞の場合はこゝへ御輿をかついで行き祈願するといふ。

美濃大井の金岩——繪葉書より——(二十三頁参照)

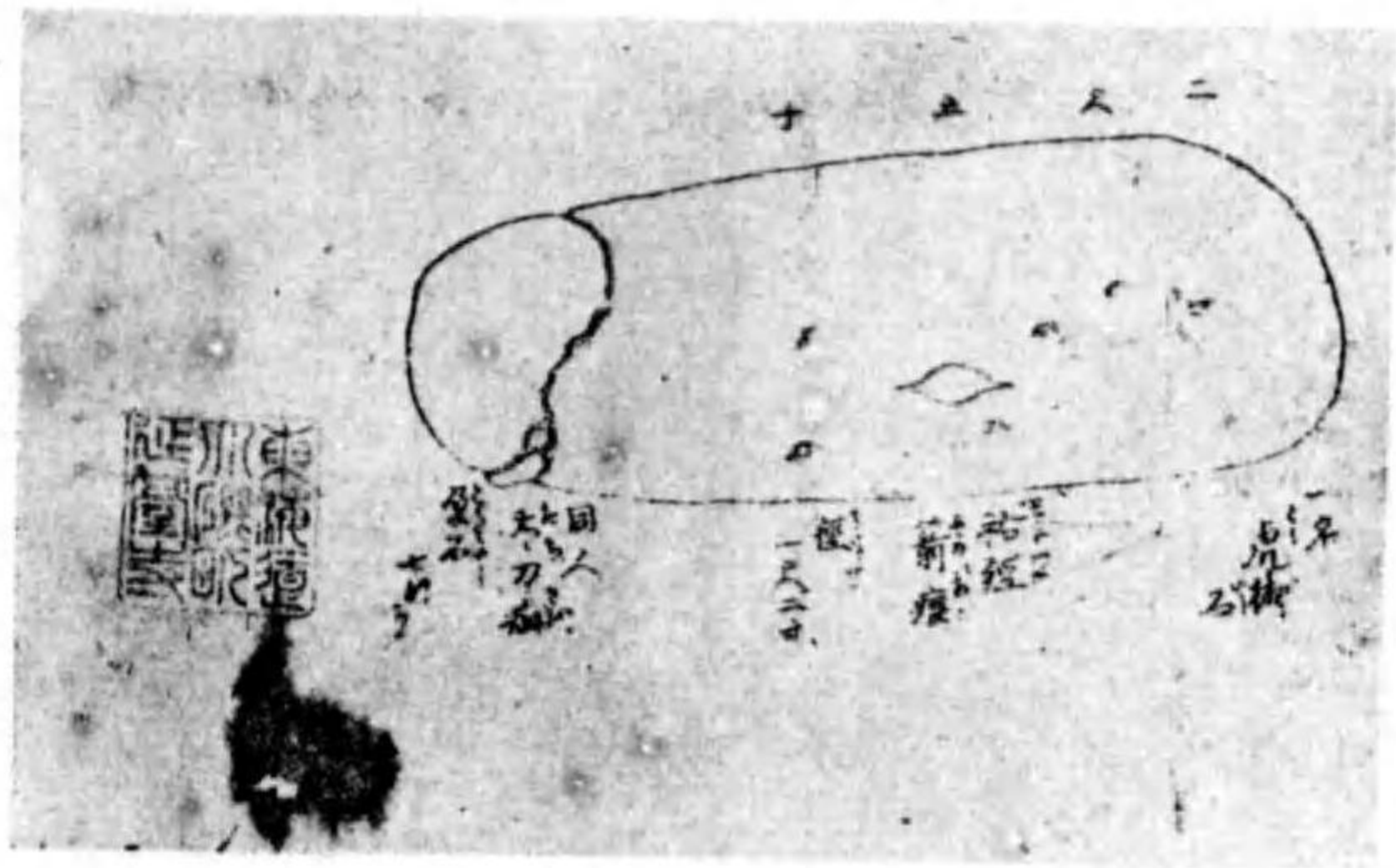


日向岩瀬川の陰陽石——繪葉書より——(十二頁参照)





東京下谷南禅寺のお客神——自寫——(二十九頁参照)



相模大磯延台寺虎御石——加藤玄智博士の著書より——(三十一頁参照)

奈良三笠山、東京の笠森寺、美濃大井(挿繪)等に笠字を用ふる所に性神を祀るもの三四ある。(四)
出口氏「性の崇拜」附註を參照。
東京府下羽根田稻荷赤鳥居のトソネルは好例の一であらう。(六)
雨乞と性神

開山の名も陽岩から来たもの

水符を發行する起源に就ては開

これに就て思ひ出さるゝ事は先づその名稱である。笠といふのはその形状から名づけたもので、各地にその例が多い。又女岩に於てその孔をくゞる風習も各地にある。これは種々な形式で表現されてゐる。私(五)が小さい時分に連れられてお鳥居を幾つかくゞつた事がある。勿論その目的は身の幸福を祈るところからなしたのであるが、やはり茲に掲げた孔を通る風習と密接な關係があると思ふ。次に雨乞の事であるが、生殖(六)と雨乞といふものは非常に深い關係を有してゐる。内地の各所に雨乞の場合陽物を出すところがある又外國に於てもその例がある。これは研究して興味ある問題である。(十二年「土の香」第四號)
茲に今一つ似た例で雄大でもあり、全山悉く陽形の岩を以て競ひ立つものは、筑後八女郡笠原村の靈岩寺境内である。

靈岩寺の名稱も無論この陽石の群衆から来たものであらうが、この寺は應永十三年(約五頁三十年前)の開山で、臨濟宗に屬してゐる。開祖瑞石上人は山上で日日座禪の行を續けてゐたが、山に飲用水が湧かないので、いつも必要に應じては山麓に降つて行つたものゝ、それでは修行の支障になるといふので、水印象の法で座禪石の傍に岩を砕いて水を誘ひ出したといふ。その跡は今に遺つて大さ方二尺位、堆へた水は雨天にも増さず、早拔にも乾れぬ靈池とされ、その形は全く女陰の容になつてゐる。子なき婦人はこの水に腰部を浸して、前方に聳ゆる陽石に向つて祈禱すれば必ず子を授かると傳へてゐる。陽石は十五呎乃至二百呎の高さのもの四個が特に自然的の形をなし、その巨岩の麓に散在する掌大の石も悉く亦陽形をなしてゐるといふ。瑞石上人は山頂からこれ等の群像に對して座禪をしたもので、この寺の本尊は千手觀世音を祀り、舊藩時代は藩主の命令で、火防ぎの水符を三瀧、上瀧、下瀧の三郡に配布してゐたといふ。昨今

き漏したが、火防と性器との關係を説く一例である。

ではこれ等の信仰も大分薄らいで、土地の者は巨岩に對して「どんべえ岩」と稱してゐるといふが、どんべえは雄大な陽形の土語であるとか。但し水の御符は現在でも三面大黒の御影と共に當寺から發行してゐる。右は本年九月森住辭介君を煩はした踏査報告の概要である。

土佐國長岡郡介良村朝峰神社の祭禮は正殿木花咲耶姫、相殿夫神彦火瓊々杵命、父神大山祇命、延喜式内土佐二十一社の一で、貞觀八年從四位上を贈られてゐる。長曾我部元親尊崇厚く神田五十餘町を寄せ、後山内家でも祈願所として崇拝した。安全又は子を祈る者多く參拜し安全の守を出す。神殿の背後に大きな岩がある。高さ五間餘、内部深く暗黒で泉水が流出して旱魃にも涸渴することがないといふ。岩上に石萬の如き草又は一つ葉など生茂り、形狀産だ女陰にちかい。又酒の神として酒造家は厚く之を崇拝してゐるといふ(日本生殖器崇拜略説)。これは前の笠岩に對する女性表徴の神で、この外女性的なものに、鳥取市外丸山の奇岩として著名なものもある、が丸山に就ては未だ探究が屆いてゐない。

相對的山形

俗談、鮑の戀の片思ひから來たものか。

播磨國明石郡神出村に在る神出山は、明石港の北方明石川を溯る四里の所にあつて、二つの山から成つてゐる。一を雄丘山他を雌丘山といふ。其の雄丘の山頂の光孝天皇の御社は神出七郷の氏神で、山上の樹木は神前があると云つてかつて伐らず、社殿の裏手の袖道を一二丁降つた所に小祠があり、内に陽形の神體がある。附近にも陽石や陰石は散在してゐる。世人は之をライセキサンと稱してゐる。青年男女間に思ひ事があつて叶はぬ時は、鮑(八)の貝殻に自分の年齢や干支、又相手の判つてゐる時は其の人の年齢や干支を書いて祈願すれば必ず成就するといふ。男女の下病に效があるといふので、春三四月から秋にかけて參詣する者が多い。神體の陽石なるものは赤味のある石で、太柱を地中に埋没したやうになり、周圍四五尺位

高さ一間許りである。又陰石は半町許り離れた所にあつて、三個の石で凹字形になつてゐる。山中には古來カタコの花なる莖に似た草花が、陰陽石の周邊數十間の所に限つて生へ、他には決してないので、煎じて飲めば如何なる難病も治癒すると傳へてゐる。「お前見たかよカタコの花を……」と、ひな節に唄ひ乍ら探してゐる者もあるとか(九十九豊勝氏報並に「大阪毎日新聞」第八九八七號大意)。

大和に天道羅石山あり、山上に一丈餘の男根石あり、山麓に一間許りの女陰石あり、傍に小池あり、此の池水毎月十五日に血色に變ず。(「骨董雜誌」二ノ五)

この外、山や丘をそのまま神體視したものは常陸の筑波山の如きは、崇拜許りでなく詩歌の上にも著名で、男體女體と相對山になつて居り、附會的にも性的化されて、女子の使用した不淨紙を納めるといふ説のある月水神社の存在は餘りに徹底して居る。その他信濃の男石祠や、盛岡市外の智和伎神社の神體である大陽岩が、山麓又は地中から突起してゐるのを祭祀した實況に就ては、自分の舊稿やその他に發表して置いたから茲には略した。

第二節 自然石

前項に擧げた例は不動體なもののみであつたが、茲に擧げやうと思ふものは動かし得る程度の神體と、小は掌中にも入る自然生の石を神としたものに就て調べて見やう。但し性崇拜の上から云へば、この部類に屬する神が最も數に於て多いことと思はれるが、ほんの二三例として他は割愛する。

先づ、その内の大きいものから云へば、春日と云へば直ちに三笠山を思ふ、その三笠山の麓に、春日の

小自然石

女夫の異容な大黒の御影で知られてゐるし、拘子奉納するの性大黒に就ては和氏に「淫祠と邪神」に詳

宮に寄つた所に熊野社といふ小祠の在ることは、實見者は勿論、あの美しい繪葉書面でも知られてゐる。その熊野祠の傍に在る大牛の臥したやうな石こそ陰石であつて、或は熊野神社の神體でないかと思はれるが、この事に就ては案内記などには殆ど見えてゐないから知る人は少い。春日神社ではそれよりも著名になつてゐるのは女夫大黒社(手水舎大黒社)とこれは加工の部に屬するが水谷神社とがある。この水谷は本殿と拜殿との間が春日日本社の參詣道になつてゐる位であるから大した宮ではないが、承平四年に圓如上人の勸請で水谷神樂や水谷能は著名である。元は道祖神とも稱し縁結びの神だといふが、祭神は須佐之男命である。本殿の床下は中央に寄せ石で、専門的に見ればそれと思へる程度の陽形が造られ、その他は混漚土で固められてゐる。拜殿の方は丁度參詣者が賽銭箱に向つて三尺も隔り得る正面の位置の軒下に、これも三個の寄せ石で陰石が構成されて居り、この石に跨いで祈願すれば孕むといふので、夜陰に詣づる女もあるといふ。俗にオサネ石といふ。

右に似た屬神の一に伊勢宇治山田の内宮内に陰石と陽石を並列して祀られてあつたのがある。バックレ一の著によれば「内宮の西北隅外側に於て、大山祇命の祠と富士山を守る木花咲耶姬の祠との間に小祠のあるのがそれで、前面には奉納の小形の鳥居推積し、この二神を隱蔽してゐるので、不注意に通過すれば看過がす恐がある。此の祠の中には地方民の奉納した陰陽形存在し、子供、配偶、性病平癒を祈る者は之を持ち去り持ち来る」とあり、その後は撤去されたやうな説もあつたが、本年元旦参りに行つた友人關口玩虎洞氏の同地よりの通信に據れば、「外宮即ち豐受大神宮の手洗盤の横に、竹の矢來高さ二尺、方四尺位の圍ひあり、其の中央に高さ八寸位の石が三個(○)形にあり、○の一個を驗するに宛然陽石らしく見受けた

が、何か是に關し問合せたことはないか」といふのであつた。自分は未だ神宮へは參詣してゐないが、一方は内宮とあり一方は外宮とあるといふので、無論相異なる祠とは思はれるが、附屬社の一として山の神のやうなものが在つたものかとも察してゐる。最も内宮の山の神に就ては長井民政氏も「今も果して之れがあるや否やは知りませんが、確か明治二十八年頃頃の參詣の時に、不圖此の小祠を發見して一驚を喫したのです。之れが他にあるなら別に何とも思ひませんが、至上の神聖視して居る内宮の宮域に接して、嚴然と文にも違せん許りの陽石が起つて、其の周圍には同形の岩が幾百千とあるので、チョット異様の感が起らずには居られません。之れと一間許り隔て、左側に陰石が、之れも同じ大きさのと又幾百千の小さき陰石がすらりとあるので、(「出口米吉氏宛書翰の一節」とあるから、外宮のものとは勿論別のものであるが、参考までに双方を記して置く。

べ氏はかつて日本に於ける性器崇拜分布の普遍的でない一例として、東海道の如き公道には存在を見ぬこと、「延喜式」に其の祭儀を記せざることの二つを擧げてゐるが、この説は二つとも肯定出来ない。延喜式の社に於て性崇拜の祭儀若しくは存在の事實は、曩の朝峰神社の例もあり、その他にも決して少くないし、東海道に於ても見ぬ所ではない。一寸數へても品川、川崎、大磯、箱根、沼津、江尻、金谷、岡崎、熱田と忽ち十指に餘る。美濃笠松町の塊清大明神もその一部と稱せられる。塊清は東海道線木曾川の堤上に在るもので、岐阜市からは電車で行ける。元は露出されてゐたものらしいが、今は方一間許りの屋形内に收められてゐる。長さ約三尺徑一尺強の陽石で、罌丸やうの二個の石が添えてある。何年頃からの崇拜か不明であるが、今のは二十餘年前に東海道線建設の折に改築して移されたもので、當時鐵道工夫が戯れ

本街遺筋の性神

(十) 性器と丹色の關係は他にもある例であるから惡戯の結果とのみいはれない。
(十一) 地蔵尊としての崇拜を見たることもあるにや。地蔵も性崇拜に關係あれば後章を参照のこと。
陽形のお札

お客明神

に工専用の丹殻を神體に塗布した所、一夜の内に大熱病に罹り頻死に及んだが、惡戯した結果と判つて謝罪したら平癒したと云はれてゐる。それかどうか今でも神體の一節には未だ丹殻が落ち切れずに残つてゐる。この神は早魃の折に效驗があると傳へられてゐる。その祈願には新たに禰を造つて一度女に着させた後、之を其の御神體に巻けば必ず雨が降ると稱し、附近の農民も尊崇してゐる。下の病は勿論好運の神として水商賣の女の信仰も多いが、奉納物には他所のやうに性的のものはなく、髪の毛や子供のよだれ掛が多いらしい。昔時木曾川から出現したものかと思ふ。(須知峽風氏報)

お札で奇抜だづたのは周防富田村の川崎觀音が陽形を懐いたのと、下野足利町の饒阿寺の陽形との二種であつたらう。周防のは十三年目毎の開帳といふから、平年は發行するかどうか判らぬが、饒阿寺のは明治初年に停止してつたやうで、餘程好事家でもないといふに保存してゐる人はない。この足利のお札は寶物の自然石の陽形を刷つたもので、その上部へ金勢大明神と大事し、その右左に「足利左馬頭源義氏公變成男子密法、伊豆國理眞上人渡良瀬川水上向、大日如來奉祈文治五乙酉年三月廿日陽石出現、義氏公御誕生依之開運神奉稱」故に諸人愛敬を守らせ給ふとあつて、所謂佛家の手製の神佛混合神として宣傳されたものだ。これと似たものに八王子市の立川の普濟寺の陽石も、傍流多摩川の出現で寺寶となつて祀られ居るが、不幸に附會して宣傳するほどの佛縁の者がなかつたので、この方は餘り知る人もない。

例の「神石圖」に、吉原の遊女等が祭りの料を奉つた御客大明神は葛西澁井村に在るとあるも、今は何處へ行つたか行衛不明であるが、下谷の谷中に在る南禅寺門内のお客明神は、或はそれを移したものであるまいか。吉原には近し、今に參詣者は一寸いゝあるらしいが、未だ住職に就ては調べて見ない。此

(十二) 加波山神社のお札は天狗面であるの存在も、金勢石に値する。研究

(十三) 水勢に成つた自然石。

の神石といふのは四體からなつて居り、中央は兩性的な形に見えるが、左は陽形の頭部、右は陰石二個でいづれも一抱え位の太い自然石である。屋形に納めて格子扉になつてゐるが余りに整つた形容であつた所に崇拜が初つたものかと思はれる。笠森寺もこの近くであるから、次手に調べられる所である。

筑波山と併稱される加波山は余り登る人も少いが、頂上には加波山神社がある。講社の類も出来てゐて春秋に登山する信者もある。この山頂の末社に金勢石といふがある。方二尺計りの平石で、石面の中央に自然的に陽形が浮き出てゐる。下の病に靈驗があるといふので、木製のリングや小繪馬が奉納されてゐたが、山頂の霧で白く晒されてゐた。神石の傍には樺の古木が根元がヨコの洞をなして、金勢石と並んで縄が張られてあつた。

日光廟開山堂の側の産宮では將棋の駒形を奉納するので知られてゐるが、それに似たものが下總の小高にもある。少し長いが書いて見やう。

香取郡飯高村に小高といふ字がある。近頃鬼熊で知られた多古町から八日市場へ通じてゐる街道に面して、道の傍にもリングのころくしてゐる八坂神社といふ村社がある。一般には小高の天王様と云つた方が通りがよい。又さいのかみとも云ふが、八坂といふから祭神は須佐之男命であらうが、いつか道祖神とも混淆して仕舞つたものであらう。

祭祀の始めは、往昔九十九里濱邊の海中から出た約一寸大の陽石を、小高村民の一人が夢枕に立つたといふので勸請したものと傳へて、腰部の疾病や子授け安産、子供の健康を主として祈願してゐる。

道路に沿つて直ぐに鳥居がある。鳥居から拜殿まで約二十間、この間に文化と寛政年間に奉納された常

夜燈が、兩側に對に建てゝある。

拜殿は四間に二間、本殿は奥行五間半の板塀に圍まれて、方一間の精巧な建築で、厚い刈萱ぶきの壯麗なものである。塀の左右には六尺宛の木戸が設けられて、參詣者や奉納物を納めよいやうになつてゐる。

将棋の駒と陽形との關係

この本殿には新しい桐製の陽物も奉納されてゐるが、将棋の駒形若しくは紙熨斗式な五角形の、高さ五寸内外の石に「八坂大神」と刻んだものが多く奉納されてゐる。これが日光の産宮と共通の形となつたもので、日光のは飛車と書いて向ふこと速かなるの謂だと傳へられてゐるが、茲のは石の頭部の△形(十四)を利用して、八坂大神としたのは、頂邊の山形と八坂の八によつて陽形を象徴化したかのやうに見える。これは舊くは盛んに陽石を奉納した事實から推して、この駒形を引き延した物に變化したことは、少し研究的に視れば誰にも諒解出来る所であらう。

鳥居に並んで左手に古井戸があり、年々舊六月十日に井戸開の神事がある。この水で正月の寒行も行はれるのである。右手に 廣さ一坪半位の塚があつて、道祖神と刻んだ方三四寸の角石が積まれてゐるが、中には五六寸大の石製の陽形も四五本立てゝある。この塚の内側に間口九尺奥行一間の小屋が在つて、四面から板を張つて内部は見えぬやうにしてあるが、集つた陽形の始末場といふ事は一見して想像される。拜殿を狐格子から覗くと、薄暗い裡に陽形を描いた扁額も多少見える。この拜殿の裏側は寺院風の不調

和な格子になつてゐて、男女縁結びの紙で一杯になつてゐる。

神社を圍らす森は、多くは杉の木立である所から、幾分の湯氣があるので苔草が蜜生してゐる。この苔草の裡から所々に石の丸い肌が見える。往年奉納された陽形の名残りである。拜殿の左手側の木立の中に

自然石に僅かに人工を加へた大陽石がころがしてある。起して建てゝ見ると、曲尺で約二尺三寸もあつて、中央に「奉納午頭天王」とあり、右側に「寛政亥春」、左側に「願主中村氏、二十五貫目」と刻書きにしてある。

祭典は舊六月十五日で、二十余年前までは二た抱へもある松材を陽形に刻んで、樽奥式に村内を練り廻つたものであると云ふが、近年は速慮させられて單に神燈をかゝげ合ふ丈の、至つて淋しい祭になつて了つた。但し舊一月十四日(一般に道祖神を祭る日)の寒中に、村内の消防組に列してゐる壯者丈で、裸體祭(十五)に例の井戸水を浴る行事は行はれてゐるが、女はこの行事に列せぬが、單獨で裸詣りをする者は今でもある。この寒中行事は大低夜半の十二時前後に終了する。

明治初年頃までは陽形を描いた額や、木石の陽形を盛んに奉納したものであるが、當時當局の注意に依つて、石は悉く森の一部に埋め、額と木製陽形は焼却したそうで、其の焼却の任に當つた者は間もなく發病して死んだと、近所の信仰者の一人らしい婦人は説明してくれた。この女は、これ程の顯著な神徳のある神であるから、交通便利の土地に移したなら、折角難症に苦しむ人も救はれやうにと云つてゐた。勿論當人も一度裸體詣りをして神徳に沿した一人で、この氏子には難産の女は一人も未だないと自慢してゐた。然し、密かに近接の部落と比較して觀るに、文化程度の極めて遅れて居る、生活程度も頗る低い事は直感出来る。それ丈この村民は素朴で、陽形を見ても風俗上猥褻視することはなく、吾々と會談の上にもキカイ(十六)と稱してゐた。こゝ等は一轍單純な鬼熊の風手などが代表的人物とも思へる。

相模大磯の延臺寺に古來有名な虎御石なる靈石を傳へてゐる。長さ約二尺、三十五六貫ある。加藤玄智

嚴肅な裸體祭の一種であらう。

人間を造るキカイ

大磯の虎石

鎌倉の政子石

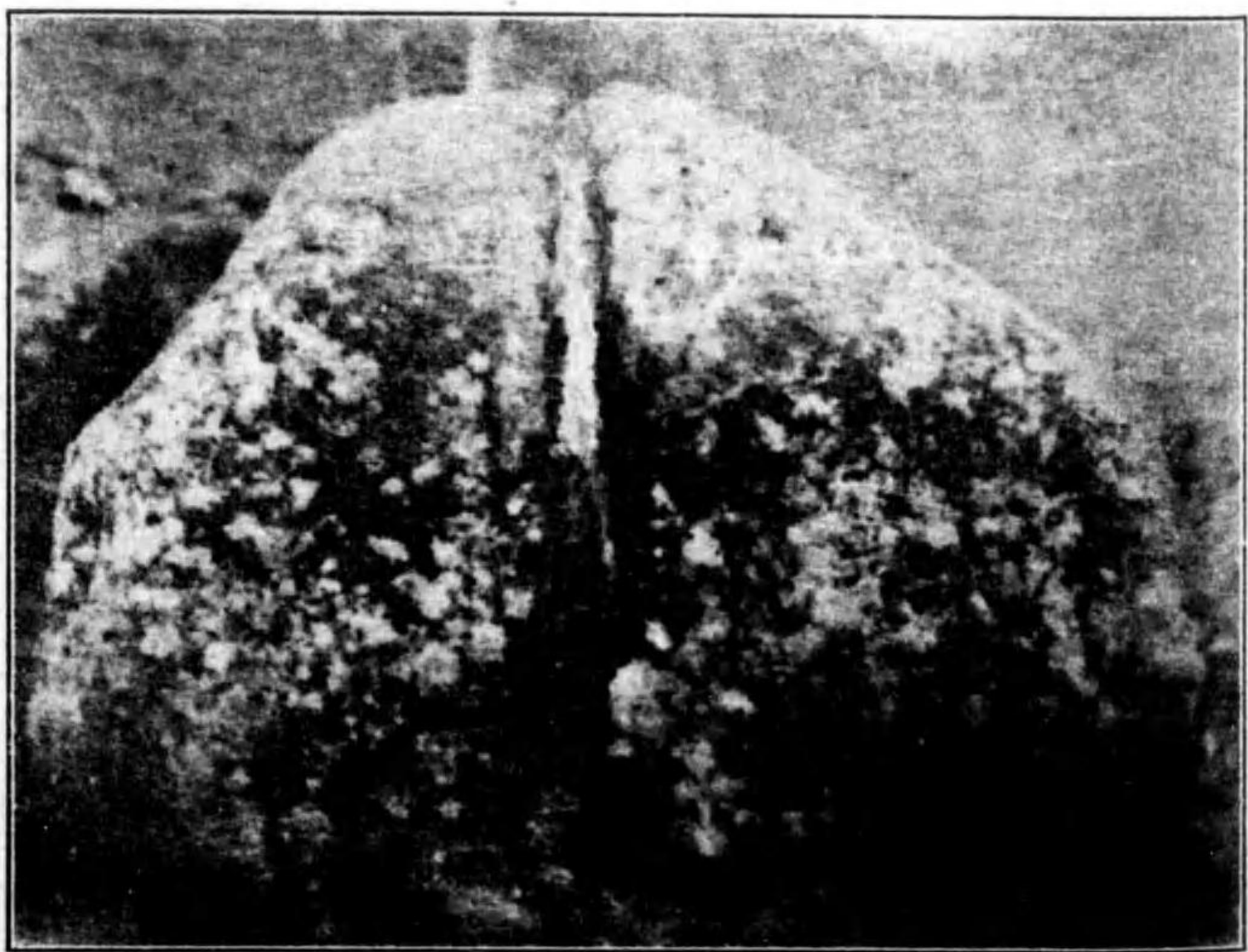
子種石

博士は人工的のものゝやうに説明(十一年「性」五ノ一)されてゐたが、自然石である所に靈石として崇拜は保たれたものと自分は思ふ。この石は十郎の身代石といふので、一名を望夫石とも云ふとかで、遊女虎が愛したといふ傳説がある。自然的な陽形で、胴廻りに七個の凹みがあるのを一般には女陰と見てゐる。即二根を兼有した所に神格化されてゐるのだ。昔工藤祐經が夜隠に曾我十郎を射殺せうとした時、この靈石が身代になつた。女陰といふのはその筋痕だとも傳へてゐる。延壽寺では堂を別にして尊崇してゐるが、昨今ではこの石の刷り物を出さぬことにしてゐるのは、矢張り當局へ對する遠慮でもあらうか。この虎御石と時代を同じくするものに鎌倉八幡宮の政子石がある。この石は鎌倉の案内記等にも載すもので、一種の女陰石である。色々の傳説もあるらしいが、一般には子無き婦人の子を祈願するやうに崇拜されてゐる。筆の次手に子種石の例を少し拾つて見る。甲州吉田の社家大雁丸家で、子種石なる長八寸許りの自然石が、村民間に轉々されてゐることは既に先年報告してあるので茲には略すが、この種のものより、ぐつと偉大な子種石を擧げるなら、東北で有名な五色温泉の浴槽の中にある抱石と、福島の少し手前の松川村(信夫郡)字石合の女泣石及び和歌山市神明神社の子孕石であらう。

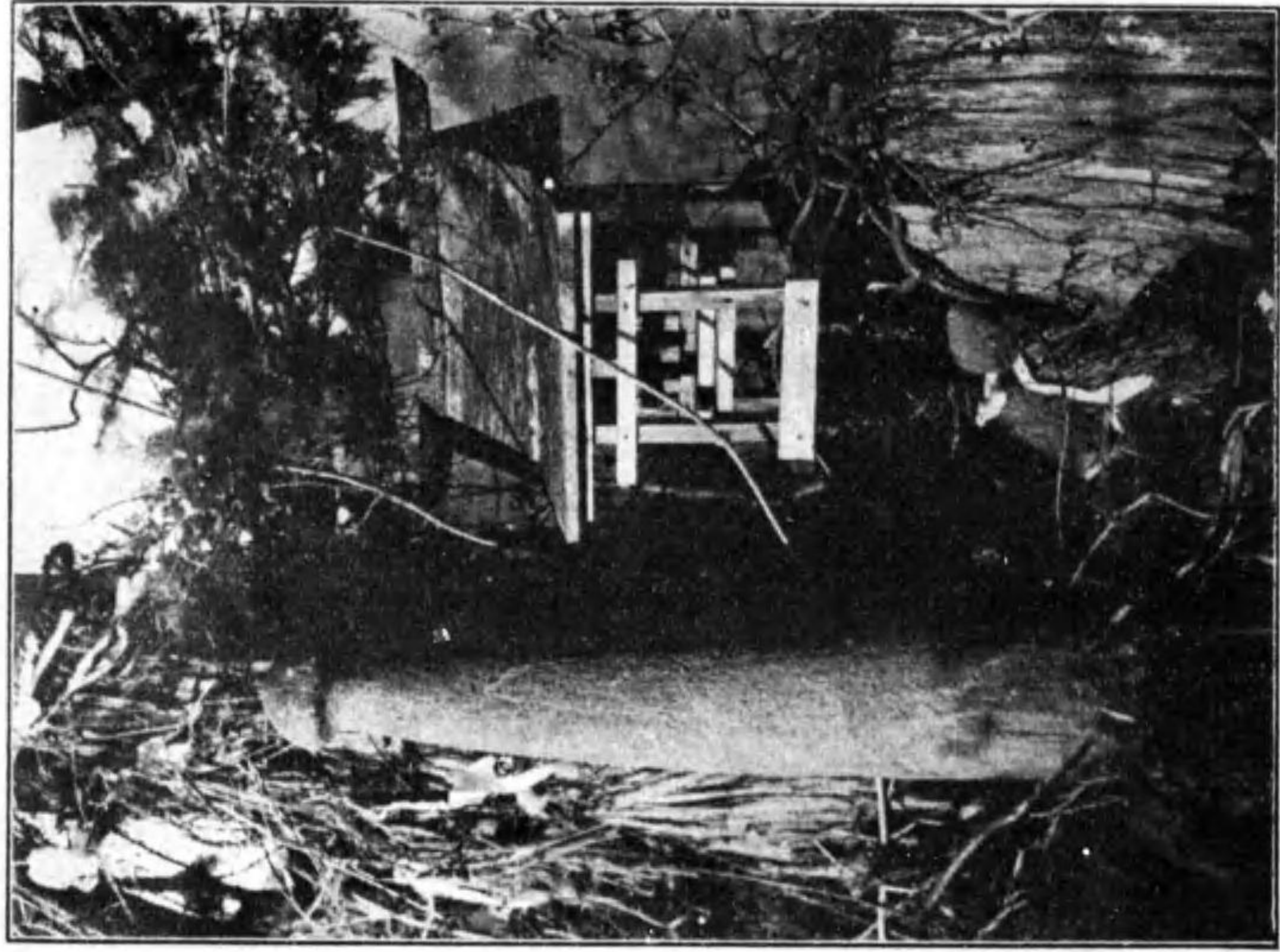
女泣石は字名の依つて來る所で、太さは優に二タ抱へもあり、地上に突兀としてゐる分丈でも七尺余の雄根で、懐胎を望む婦人は自分の肌をこの石の一部に抱着して、その體温で石の肌が被温を感じるまで、念々祈願抱擁すれば、必ず靈感あつて受胎するといふことであるが、何分桑畑と水田の間の巨石で、白晝之に抱付く程の念求者は近來見かけぬといふことであるが、祈念に參拜する者は相當にあるらしい。この靈石の他と異なる特長は、祈願成就して出産しても何等の御禮詣りをせぬことで、鳥居も奉納物もなく神石



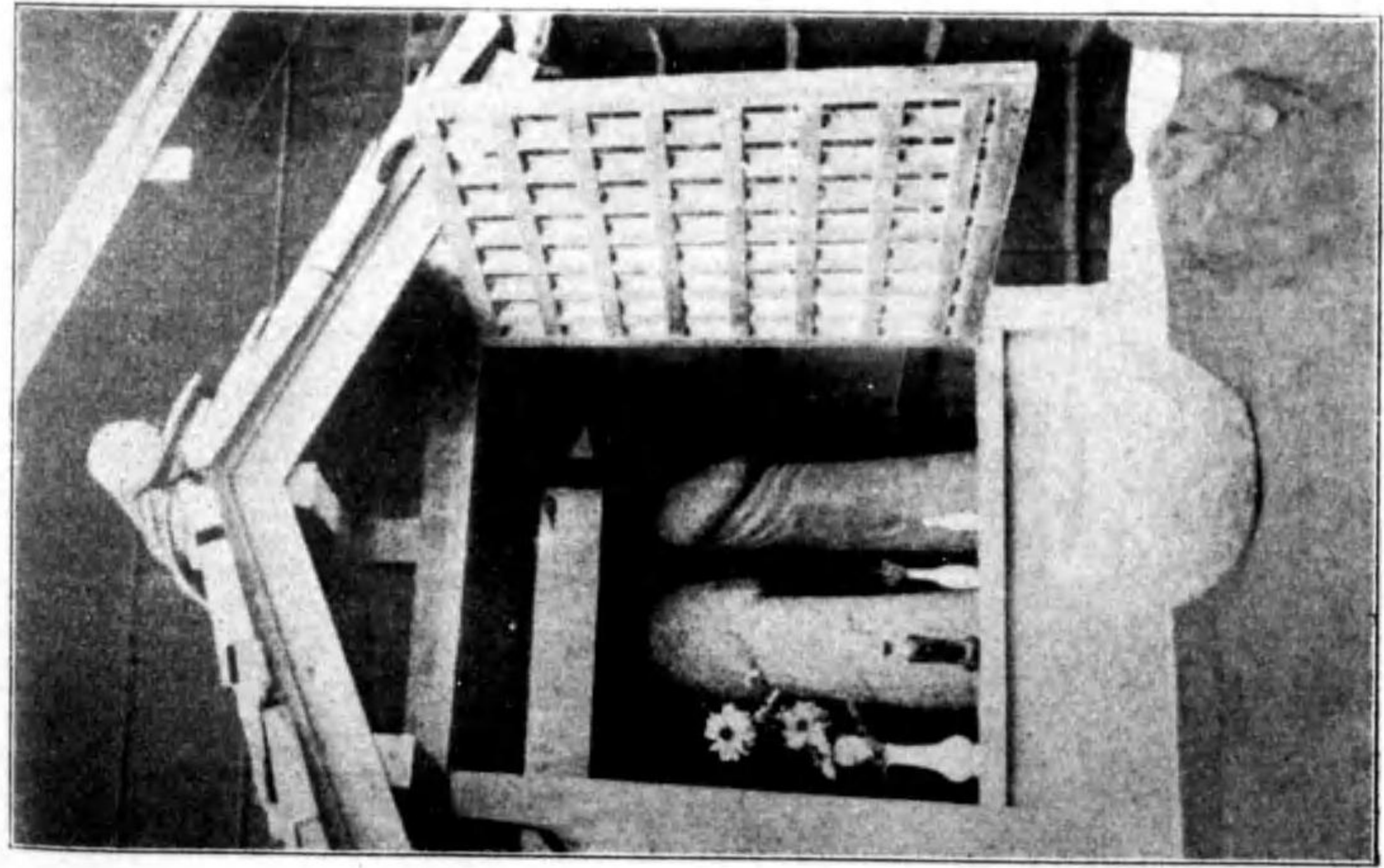
和歌山新堀町神明の子持石——古傳三郎氏——(三十三頁參照)



岩代信大前女形石——放江庵氏寫——(二十頁參照)



自寫——石神——方水代池菊田小山中山 (三十八頁參照)



豆人氏寫——祖道神——田熱熱張尾 (八五神)

のみが舞臺中に嚴然と聳えてゐる。(富士崎放江氏報)

五色温泉は鳴子温泉と共に子供の出来る温泉として聞えてゐるが、殊に浴槽の中の抱石は自然的で、松川の田圃中のも程露骨にも感ぜられない。

和歌山市のは新堀八丁目の神明社内にあるもので、高さ二尺三寸、頭部周三尺四寸、胴四尺八寸、不妊婦が參詣するので著名であるが、土地の人には忘れて、却つて和歌の浦や紀三井寺附近の參詣者が多いといふことである。

この石は古への吹上の丘の老松の根に鎮座する陽形自然石で、頭部は小石を吹き出すといふので子持石と稱する薄黒色を帯びてゐるが、胴體は普通の軟質の石で、徑一寸五分の凹みが二ヶ所あるのは、一時放棄されてゐた折の傷でもあらうかと思はれる。文政年間の『紀伊名所圖繪』には載せてあるから、それ以前から存したものであらう。崇拜のみで奉納物は皆無である。(吉備慶三郎氏報)

福島を去る東に約一里、信夫郡岡山村大字山口字女形の縣道の傍に女形石といふのが安置されてゐる。この石は六七年前までは同所の下鈴木半四郎氏の屋敷に轉けてあつたといふのが、通行の男女が恰度足休めに好い所なので、疲れたまゝ掛けたりなどと、不思議にもその者は屹度怪我をしたり下の病氣に罹つたりした。兎に角字名にもなる名石を、放任して置くことはよろしくあるまいといふので、村の青年團有志の手もかりて現在の所へ移したものだといふ。石の高さは僅か二尺位で、幅は二尺七八寸の横に廣く、その形状は丁度桃の實の断面を見るやうに、頂點から一尺二寸程割れがあり、肌は荒い花崗石で苔が生へて居る。それを大正十一年十一月十五日に、村の老神職山口道智翁が天鈿女命として御鎮魂を施行し

復活した石神

たので、この日を年々の祭日と決定したとか。天鈿女命とは奇抜であつた。爾來女の病氣なら何んでも祈念して平癒せぬことはない(放江氏報)といふ。浦和在の氷川神社の性崇拜は、青年團の協力で絶滅したといふに、これは又青年團の力で復興してゐるのは皮肉である。然し『信夫一國志』に地形からとつて、山口村女形としたと書いてあると云へば、相當に古い存在であつたことは認められる。

これらの外に下總佐倉在の太田権現や、信濃長野在の若槻の蚊里田や、越後の石地の羅石明神や自然石による崇拜範囲は頗る廣く久しいので、中々擧げ盡せないが、祭祀の起源や祈願の要點や、奇蹟的な神罰等は、始ど同一連続に出たものかと思はれる程相似てゐる。

第三節 石棒崇拜

加工された性崇拜の對照物は、その殆どが陽性である。これは崇拜する原始民が好んで一元性にしたのでなくして、表現方法に窮して陰性の屬性を男性に兼せしただけで、自然的なものに於ては多く二元性と、萬一元的存在の場合は、強いて女性を搜しても崇拜した傾向もあるので、決して女性を無視した結果とは思はれない。それと今一の理由は、男性は動的であり立體的であつた、そこに神としての表現方法も容易であつたらうと思はれる。表現に至難な平面的な女性を男性程容易に表現し得なかつたのも原始人らしい所がありはせなかつたらうか、人工的に遺されたものは考古的に見て、しか解釋されるのであるが、神話傳説としては多くの神々には殆んど相對的に説明されてゐるのを見ても、原始人は二元性崇拜であつたことは想像出来るやうである。

石棒崇拜

加工された性器神のうち石棒以外は比較的近世の作で頗る寫實的であるのに對し、石棒は有史以前幾何の年代を経てゐるものか判斷に苦むものであるが、本章第一、二節に於て自然的出現のものを崇拜するに至つたのは、一面傳説的色彩のあるのに對し、この人工的のうちの石棒期のもものは考古的研究を要するもので、自然的出現のものに比較的新たなものも含まれて居る點から推察して、石棒崇拜時代の方が古い崇拜に屬するかも知れないといふ事も思はれる。

石棒崇拜の頒布

この石棒崇拜の現在は、自然形の普遍的であつた崇拜に比しずつと偏傾化してゐる。九州や四國に極めて稀で、東北に進むに従つて濃密に散在してゐるのは、現代文化の邊境を知る上に於ても參考とならう。明治維新後早々に神佛を分離し、社祠の神體に就ては上申書を徴したり調査したりしたのであつたが、石を神體とするものゝ多くは石棒ではなかつたかと思はれ、又現在に於ても小祠は石棒類の多いことも、この研究上には記憶すべき價があると思ふ。

本年五月、東北本線花巻驛(陸中)に下軍した自分は、そこから輕便鐵道によつて東に走り、土澤に下車して和賀郡小山田村に未見の友菅原氏を訪ねた。その折村内には石棒を祀ることの極めて豊富な話から、一日石棒行脚をしたので、その記録は『いも蔓』誌に載せて置いたが、今茲に抜萃して見やう。

土俗學方面から色々の資料を提供されてゐる遠野の町は、この土澤から更に二時間餘を走らねばならぬ山の奥である。

小山田の村は名をそのまゝの山腹の田を開いた土地で、水清く、生活も豊かに、四時雨戸を締ることなしに安眠出來ると云ふ泰平の村落で、それ丈交通には不便で車は通ぜず、自轉車の影もないが、所謂南部

馬は毎戸に飼はれて、唯一の生活機關に預つてゐる。こうした素朴な僻村に花柳病者もなからうと思ふのにどうして性神が多く祀られてゐるのかと、初めは大に不思議に思はれたのであつたが、それは中には病氣平癒を祈る者もあるが、その多くは山畑の神として傳統的に殆ど無關心に、祀られてゐるらしいのであつた。なぜといふに、それは他所のやうに近頃の俗悪な、寫實的人工のリングではなく大半が古代の石棒であること、その出土の数の餘りに多いことによつてそう思はれる。

初日に踏査したのは下小山田部落で、次の五ヶ所であつた。

▽村役場内石棒(三尺一寸)

▽菅原大次郎氏所有松林中の小祠

▽同氏神棚奉祀(約五寸)

▽輕井澤山麓金比羅末社(木製)

▽菅原慶夫氏裏山(約二尺五寸)

村役場のは元は同村幡矢附近の路傍にあつたものを、選野の伊能氏が役場に保管されたものであるが、菅原大次郎氏の松林中にあるものは胴體のみになつて、トップの部分は殆どない、今は稻荷社の傍に押付けられてゐるが、邸内のは珍しい小形の完全な石棒で、附近の小川から出たもので先々代時代には崇拜も盛んに、時には出張して尊拜されたこともあつたとか。同族慶夫氏の裏山のは山の入口に二三の石神と共に立てられてゐる古代石棒で、形も原形を大體保つて居るし、無意識ながらも山神としての任務を備へられたかに祀つてある。

只、輕井澤の金比羅堂の下のは、木のささやかな祠の中に御幣を本體とし、六七本の木製リングと、二三の小さい自然石が奉納されてゐたが、棟札によつて、この神は彼の巻堀神社から勧請した分祀であつたことが説明されてゐた。兎に角この輕井澤山は、古來古金銀が埋没されてゐるといふ傳説もあり、山頂には三四の古墳も散在してゐる所を見れば、舊い話は澤山に傳へられてゐるやうに思はれる。

第二日は同村の東北端、石鳩岡部落を一順した。主なものは次の通りである。

▽幡矢神社前(大石棒三本。青石棒二本、約二尺五寸と三尺)

▽永根方八將神傍(一體)

▽畑中丘上、金勢大明神(石棒)

▽菊池一郎氏裏(石棒)

▽菊池喜代次氏裏(約三尺)

右は代表的に挙げたものであるが、中々これ許りではない。最初に、土地では舊い宮とされてゐる幡矢神社を拜して、社前に祀られてゐる大石棒を見た。何れも五六寸前後に破壊されたものを三本分と思はれる丈併置してあつたが、完全だつたとすれば、優に五六尺大の物であつたらうと思はれる。先年某博士が視察して、世界一の石棒と評したといふのは、左もあらうと思はれる。惜しいことには一つも完備してゐないが、附近の田の底からは未だ中々出て來るらしい、といふのはこの社の北側の某家では本年になつても石器土器を發掘したといふので、就て一見したが、土器には珍しく妊娠した容姿のなどもあつた。察するに小山田村は現今こそ交通至難の寒村であるが、古墳や城趾や、無盡蔵の石棒出土から見るときは、

古代は確に湖畔の地であつて、水上の利用によつて多くの巨石は運搬されたものと思はれる。それに出土の石棒類は決してこの土地の石質と同じでないといふのも、この想像はあてはめられると思ふ。

この幡矢から一丁許り北の農家永根方の庭にある八將神の傍の石棒は二個で、一本は二尺三四寸、一本は七寸許りで、この小さい方は丈の割り合に太く従来の石棒と稍形を異にしてゐた。茲から裏手の山田を隔て、小高い丘の上に金勢大明神が祀られてゐる。祠は方一間許り、本尊は大石棒の頭部のみの六寸許りのものであるが、奉納の木製リングは數十本あつた。腰の病む婦女子は參詣して、奉納してあるリングの一本を借りて、腰の周圍を三遍廻して納め、治れば新規に一本奉納する習慣があるといふ。この祠と金比羅社のものゝみが一般的に祀られてゐる神で、その他は全部個人の奉祀である。

次は矢張りこの附近の觀音堂の傍の、菊池喜代次氏の裏の小祠の側に立てられたものであるが、高さ約三尺、青石で製られて居り、最も完全無缺の石棒であつた。

この外戸別的に探つたら、未だくどの位存在するか判らないと思ふが、大體に於て、前掲二社は別として奉祀の盛んな割合に、信仰的崇拜は昨今案外稀薄であるらしく思ふ。その名稱もさいの神であつて、一般には地主の神といふやうな感念に解かれてゐる。

第四節 近世人工の神

第一節から第三節に説いた生殖神に就ては、敬虔から崇拜に至つたものと解せられるに對し、茲に例を採らうとする人工による性神の多くは、崇拜から墮した迷信に屬した傾向も見える所が近世的と云へるの

卷堀神社

かも知れない。最もこの内には道祖神の如き、舊い傳統を有しながら新たな製作になつたものも混在されてゐるが、大半は原始的崇拜から脱してゐるものと見てよからうか。

東北の性神としては陸前の笠島の道祖神と相並んで、陸中の卷堀神社は最も著聞されてゐる。卷堀の神體と起源に就ては次のやうなものがあつた。

卷堀村左のかた檜の大木八本あり、其所の民家に惣七金勢明神を祭る。此神いつの頃より祀れるといふことを知らず、神體は唐金を以て作れる男根にて、土俗傳へていふ此村の少女十三四歳になれば、一夜夢中におそはるゝ事あり、是金勢神の淫瀆なすが故なりといふ。中古一靈人この犯暴を惡みて鐵の鎖を以て繋ぎたりといへども、猶その淫瀆を止めず、時々遊行をなすといふ。

自分が親しく卷堀を訪ねたのは大正七年頃かと思ふ。盛岡の北、好摩驛で下車して線路から東北に二十餘丁を歩んで卷堀村に入つた。この邊は一帶に白樺の林で、木肌が白く露はれてゐた。歌壇の新人啄木の生れた瀧民村も右手に見えた。

卷堀神社は南部街道に面して、大きな御影石の鳥居が建つてゐる。今は三ヶ村の鎮守で村社である。參詣簿を繰つて見ると大正六年の九月、スタール博士の署名もしてある。

實際の御神體は左記縁起の次第で、維新の際に官渡になつたと傳へられてゐるが、現在の社殿は明治四十三年の改築であるから、從來から納められた貴重な性的の資料や、繪馬やその他の奉納物は全く近頃の有り合せものになつて了つた。只一つお福が松茸を負つてゐる額が偉彩を放つてゐた。とは云へ今も猶多少は自然石の形物も奉納されるといふことで附近の參詣者祈願者は常に絶え間がない。此所に奉納された

多くの紅白の幟旗の内に、奉納智和伎神社と染筆したのがあつたので、盛岡在の東中野のと同名である關係を神主にたゞしたが解らなかつた。唯村名を冠したのは維新後で、前は智和伎神と稱し又金勢大明神と呼んだりしたといふから、他のは茲の分靈であらうし、前述小山田村の例もあるし、兎に角この巻堀は性神としては東北に於ける最も古い歴史を持つてゐる。

巻堀の宿の半ばに間口二十餘間の二階建の農家がある。神主工藤氏の住ひで、昔は金勢講の講社宿もしたものかと思はれる。この二階には神殿が設けられて、唐金造りの高さ二尺もある男根を中心に、鐵造の奉納物が約十個も併列されてゐた。

巻堀神社縁起(社務所發行)大要

恭しく言ふ、夫れ神靈に形なし、人の敬ふが故に威を増す、例へば一輪の天に在つて、影光萬水に浮ぶが如し、亦石中に火ありと雖も、打たざれば出でず。天神地祇世界國土に普く座しませども、人は是を信ぜずんば争でか感應あらんや。人は神徳に依て運を添ふ。仰ぐべし。信すべし。

奥州南部岩手郡巻堀村當社金勢大明神と稱ひ奉るは、猿田彦大神にましくて、衢の神にて幸神、八岐神、道祖神とも申し奉るなり。

茲に人王三十六代天豐財重日足姫天皇(皇極天皇)と申し奉るは停中倉太球敷天皇(敏達天皇)の御曾孫弟停王の御女なり。息長足目廣額天皇(舒明天皇)の皇后にましく、廣額天皇十三年冬十月崩御し給ふ。依之元年春正月皇后御即位ありて、日足姫天皇と申し奉るなり。廣額天皇崩御の後、御別れを惜しみ深く悲み給ふ。或る夜、不思議の靈夢を見給へり。近臣に命じて尋ねさせ給ふに、御夢の如く美男に

逢ひて連れ來れり。天皇其故を問ひ給へば此男階下に憤で奏し奉るに、「某は東遠國の者にて御座候、吾は先祖日本武尊、天照太神よりの草薙の御劍を拜受し、勅宣を蒙り王威に隨はざる輩を誅罰の爲め、東國に降り玉ひて、猿田豐根彦が女垣生乙女に假の縁を結び給ふ。乙女孕體となりければ、日本武尊御懷中より玉作の鐵の男根を取出し、乙女に告げて曰く「汝が腹の子誕生せば是を形身に授けよ」とありて、本國に歸り給ふ。其子と生れて金勢の宿禰と名乗り申候」と應へ奉る。皇極帝、靈夢に依つて汝を見る事の嬉しさよと仰せ給ひ、夫より直ちに朝下に仕へしめ給ふ。

其頃入鹿大臣謀反を企て、朝廷を傾けんと慾す。金勢を惜しみつゝ東國に流し給ふ。時に皇極帝御位を天萬豐日天皇(孝德天皇)に譲り給ふ。神祇伯中臣鎌足の計事にて入鹿も亡び、鎌足には功を嘉して錦冠を給はり、内大臣と云ふ官を授け食祿を増加し、百官の上に居し天下の政治を任せられ、始て年號を建て、大化元年と云ふ。都を難波長柄の豊島に移して新に内裏を造る。大化二年、正月元日群臣朝拜の禮あり。始めて畿内並に國々に司を置き、關所並に驛傳を定め、里々に長を据えて民の家數人員を定め、年貢土産の品々武具馬具等の事まで勘へ定む。而して家數百有る所よりは采女一人宛奉らしむ。采女は其所より然るべき女を選びて宮仕せしむるを云ふ。孝德帝在位、大化五年、白雉五年合せて十年にして崩御、同六年皇極帝再び即位ありて帝位に復し齊明天皇と申す。是重祚の初めなり。其後金勢宿禰を御尊ね有りしに、東國にて死したる由聞し召し、勅ありて一社を造立し金勢神と祭り給ふ由。此謂を以て東國にては金勢神と祭り、日本武尊より傳りし玉作の男根を神體と崇め、今に至るまで他に異る神靈なり。此御神を信仰する輩は子孫繁榮、婚姻結縁、男女腰より下の煩ひ、婦人は安産赤白の帶下、寸白

男は疝氣、脚氣の類まで、諸願成就せずと云ふ事なし、是即ち神徳顯然たり。豊根が女、垣生乙女の腹より出でたる金勢宿禰は、殊に日本武尊の御胤なれば合せ祀りて共に猿田彦大神と申し奉りぬ。當社は長祿二年四月十六日の創立なり、御別號は伊勢にては内宮の末社與玉の神、江州の白髭、阿州の大麻彦、讃州の田村、薩州の牧聞社右の通り祀り來る。蓋し天照太神の分神の神なりと云ふ。尊可。貴可。

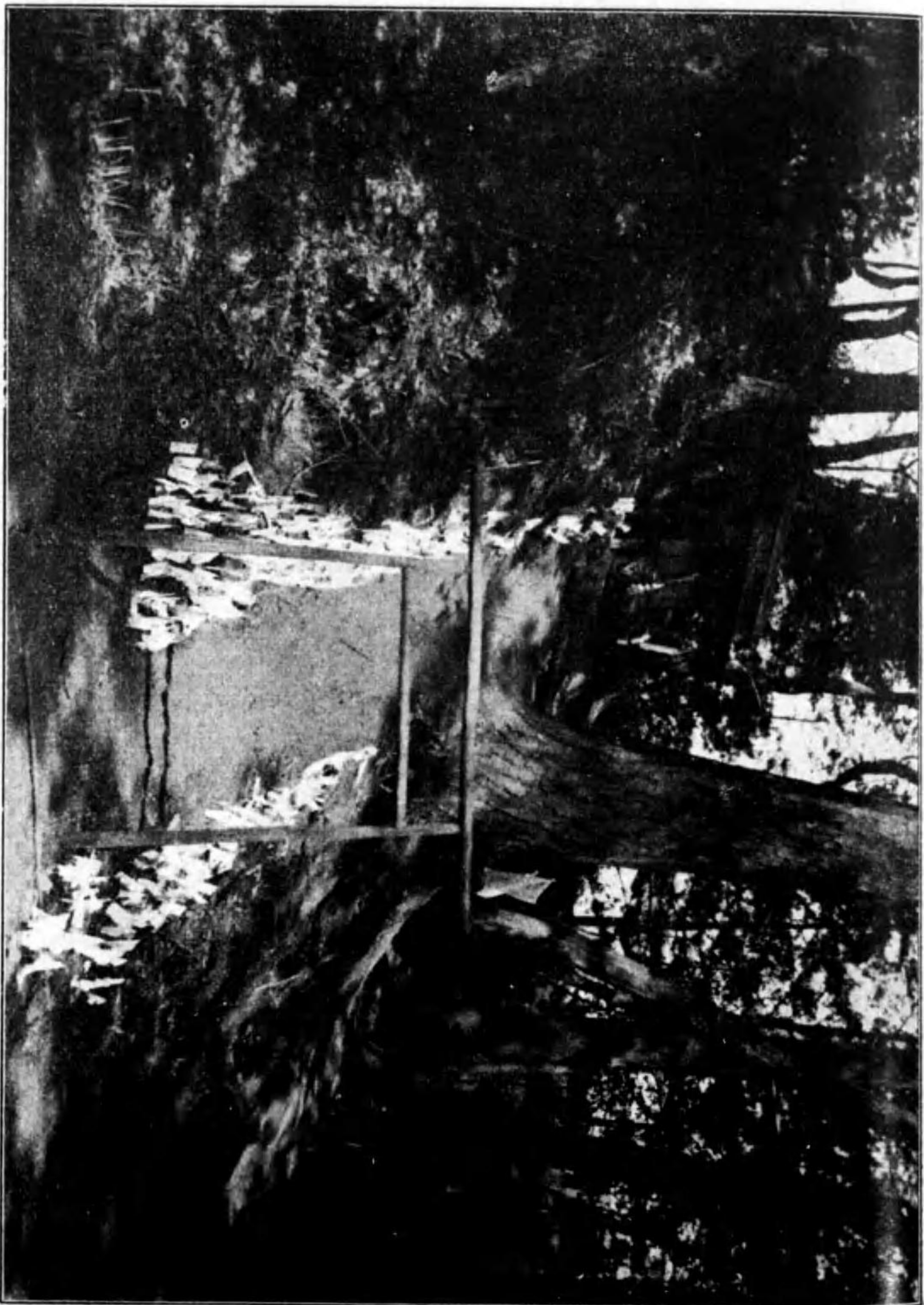
長祿三年辛巳正月吉日

右縁起書は長祿と云へば、勿論餘程後の足利期に作つたもので、ロジツクの合はぬ個所も見えるが、尙御神體及び土俗的傳説に就て、昨年佐々木喜善氏の報告が有つたので、参考までに掲げて見る。

遂この間卷堀の金精神(古記金玉董大明神)に參詣致しました。御神體の銅製の陽物をも寫眞にとつて參りました。此の神に就ては世間一般に色々と評判の高いので(地名辭書などで)すが、今度の旅行で聞いたことは、此の神の氏子の家の年頃の處女は夜飯時などに、不意に轉倒し夢中になつて、頻りに腰を動かして、歡に入ることがありますと、家族一同はソラ鎮守様の御來臨だと申して、食事を止して平伏合掌娘の正氣に戻るまでさうして居るのだと申します。其のことあつてからは娘は一人前の女になるのだそうですが、これは特に撰ばれた娘に限つたことであつたとも申されます。——即ち巫女になつたか——

陰齒を缺いたと謂ふ方の金勢大明神は、小鳥谷驛近くの民家にあるもので、之れは金網で柱に縛つて置いたと云ふことで、鎖鑰の環がはまつてあります。此の神と卷堀のところが混合されて、世間に傳つて居るやうで御座います。卷堀神の一番靈驗あらたかなるのは、役に立たぬことでありまして、それは往つ

思春期の神應り



三河袋投山の磯神——豆人氏寫——(四十五頁參照)



京都三島神社の蛇の繪馬——自寫——（四十九頁參照）



東京深川八幡社の三猿で中央は女陰を現はす
——本山桂川氏寫——（四十八頁參照）

て拜した夜から充分の驗があるさうです。これには人々皆不思議がりつゝ少しも疑ひません。今時流行の性的誇大廣告にある藥劑などよりは、眞實効驗著しくありますさうです。勿論一の賣藥と神とを一緒にするやうな譯ではありません。神威は無限際がありがたく在すのですから……（大正十四年十月二十日）

自然的に山麓に突起してゐる信州上田在の男石祠に就ては、舊著に詳述して置いたから茲には省略するが、萬事二元的に歸納する信仰者は、男石に對して女石祠を奉配し信仰してゐるのは、聊か御丁寧に過ぎる話だが、舊い里人は正直にも男石祠の西方に一丁程の畑を隔て、鹽竈神社（村社）を勧請して配神とした。然しそれでもと神意の在る所を推し量つて、別に軟質の岩の堅一尺幅五寸許りのものを加工して女形に模し、女石祠として祀つたのが現に男石祠と併ぶ祠で、近代人から觀ては頗る滑稽的ではあるが、山深い地方人の純朴さを語る一面でもあると思へば、誠に愛すべき情味の存することも考へられる。

武藏浦和の中學の前から與野に通ずる畑道の左側に、俗にお聖さまと稱する人工的な石の一抱大の陽石が祀られてゐる。高さ二尺、周二尺六寸でトタン屋根の祠の裡に祀られて居り、大きな鳥居も建てられて居る。賽錢や繪馬小帳なども納めてある。畑の所有主武井氏の説によると、創立は全く不明であるがかなり舊くから在つたもので、一時は縁日商人の出た時代もあつたと傳へられて居り、現在の御神體は一度盗まれて、二十餘年前に再建したものであるといふ。陽石をおひじりさまと稱するは他に殆ど例がないが、日知りの説もあるが静岡地方では祈願は豫め日限を豫定して祈るので、日限地藏と云つた名稱が多い。このひじりも、ひじりの何さまと云つたのが、ひじりさまからひじりさまに轉じたものかとも思はれる。

獨身神への同情

おひじりさま

人工的な近世の陽形神は、現在に於ける最も廣汎な頒布で、卷堀や女石や浦和はその一例に過ぎないが、スタール氏の『山陽行脚』にある備中倉敷の金山神社を始め、各地に散在する道祖神の類は、いづれもこの部に屬する神々で、到底列擧に遑のない大多數に及んでゐるものである。

第五節 樹木による崇拜

草木の成生發育及び成果の現象は、原始人に性崇拜の感念を與へた一原因をもなしてゐるが、近世の植物崇拜は實にその一部に現れた形狀に因る崇拜とは云へ、原始人の崇拜に比較しては却つて低下した信仰と云はねばならぬ。

最も卑近の例から擧げると、東京市外千駄ヶ谷の榎坂のあまん〇榎である。婦人病及び齒痛に功驗ありとして、お禮には房楊子か飴を奉納する風習がある。

昔四谷邊の大工某が、仕事の歸りに此の榎の根方に休息した所、不圖見るとその樹瘤が女陰に似て居たので、好奇心の動くに任せて、有り合せの道具で更に加工して格好を直して歸つて來た。すると女房が俄の子宮病に苦しんで居たので、大に驚き占つて貰つたりした結果、靈榎の祟りと解り、さてはと思ひ當つて早速榎坂へ祠を造るやら鳥居を奉納するやらして漸く女房の病氣も治つた。この風説がいつか花柳界の信仰ともなつたので、一説には寛永時代に徳川家の妻妾おまんの方も參詣したと傳へられ、舊くは古郷神社と稱したとも云つてゐる。今も附近に房楊子や小旗が奉納されて居り木の洞に納めた飴が木の水氣に解けて流れ出してゐる態は、餘りにも寫實的で大工の惡戯を傳承してゐるやうである。

榎の洞

淺草の特乳山の聖天の境内にも、洞の女陰形になつたのを近年まで崇拜した事實があつたが、これは十二年の震災で多分焼けて、信仰も氓びて仕舞つたことと思ふ。

三河西加茂郡猿投山の猿投神社の背後二丁許りの山中に、大きい松の木の木根元が男機形に突起してゐるのを、この地方の通稱磯神として信仰するに至つたのである。近頃は餘り露骨に過るといふので、お宮を修繕して背に穴を明けて御神體を隠してしまつたが、參詣者は今も變ることなく、瀬戸と山一つ隔てゐる丈に瀬戸物のリンガの奉納もされてゐる。

近江には山の神を祀つてゐる處が頗る多い。そうして石塔ではなく皆お宮を立てゝゐる。特に蒲生郡には小字々々で一つ／＼山の神を祀り、木の股で男女神を作り、年々正月に山の神の御神體として、交接の狀を爲さしめて其の年の無事豐作を祈願する。その行事は各小字で皆異り、面白い風習を残し、年々繼續せられてゐる。八日市近くにも三四ヶ所あるが、同郡市邊村のは特に縁結びなども祈るものがある。(大正十三年「奇習と土俗」その二)

筑後三潯郡大善寺村宮本に一本松といひ、今は四五本の松の立つてゐる三つ辻の邊は今ほ畑となつてゐるが、昔は藪疊であつた。此の藪の中に一樹の椿があつて、之れをサヤンカミ(塞神)と稱へた。近年は四五町南の玉垂神社の境内に移され、玉垣の内に椿と櫻とを植えたが、椿は以前の木ではないやうである。その椿の根に二個の石を据え、一は頂の尖り、少し中凹の甯士形のもの、他は紡錘が半ば地から出でたやうな形をしてゐる。其の玉垣の中に男性の形に造つた木の椿三四十個ある。下の病の平癒を祈る爲めに捧げる物で、この神は殊に男精の養へた利くといふ。(「土俗と傳説」一ノ三)これ文の報告では椿が何の爲に

櫻の實はリンガとして歐洲にも性崇拜に關する植物の一種となつてゐる。

崇拜さるゝかゞ不明であるが、出雲八東郡大庭村の八重垣神社の御守は、表面に「連理椿愛敬御守」として内に一枚の玉椿の葉が入れてある例もあるから、陽木としての椿を崇拜した一遺風と見るべきであらうか椿の文字の音から来た崇拜としては餘りに穿ち過ぎて、理窟に陥らぬとも限らぬ。

子授けの神木
模範的神主

羽後境驛の近くに「境の唐松さま」として靈驗あらたかなお産の神がある。神功皇后を祀つたと傳へられてゐるが、安産祈願産後のお禮詣りは勿論、男の子女の子とその好む所を祈願するので、神社は毎日の大賑ひで母子健全の御神符、御護符は素より、乳の出る特製薬、安産の岩田帯まで、抜かりもなく整つてゐるが、更に境内には神木「抱き杉」と稱する靈木があり、この杉に抱きつけば、男女安産希望次第とあつて、婦女子が入り代り立ち代り眞剣に抱きつき、又杉の皮を煎じて飲むと安産するといふので、一般家庭に歡迎されてゐる。社司は物部家で代々おそひ、現主物部長元氏は神主丈に男女各六人合計十二人の子福長者であるといふ。

常陸下妻町から筑波街道を行くこと二十餘丁で、村の名も由来あり氣な高道祖村に入る、街道の北側には村名の因をなした道祖社が、今では他の小祠と合祀されてゐるが、そこには澤山の木製リングが奉納されて居り、手前の舊社地には一抱え大の石製リングが未だごろ／＼してゐる。この舊社地の反対側な道路の南に、三十坪許りの畔に圍はれた芦池がある。街道には小さな標札が建てゝあつて、「さやの池、片葉の芦」と書いてあつたと思ふ。さやは土音でさい即ち道祖である。この池は元は一町四方もあるものであつたが、追々稻田に化して、今は名のみ池になつた、この池に茂つてゐる芦は必ず片葉で畔から外のは普通の双葉の芦である所が、高道祖七不思議の一になつてゐる理由で、維新近くまではこの附近に大きい

靈泉宿が在つて、この池の芦を手幾束かに切つて煎じた風呂に、花柳病に類した男女が入浴して全治したといひ、現今でも時折地方の花柳病者がこの芦を持ち戻つて、自宅で煎湯にして浴すと不思議に治つてゐると、今も村老は云つてゐる。

この外、女夫松だの相生松だの乳を祈る公孫樹の如き種類は、地方々々に依つてかなり澤山にある。本年八月二十三日の「東京朝日新聞」にもこんな記事があつた。

農林省のお役人山崎某氏の細君、近頃夫婦の仲に子なきを憂へ、雜司ヶ谷鬼子母神に祈願をこめ、毎夜十二時頃参拜して同社境内にある、有名な子もらひ公孫樹の垂れ下つた大きな乳房に抱きついてゐた。

ところが、ある夜のこと「何卒子寶を授けたまへ」と公孫樹の乳房に念じて居ると、社頭の中から人臭ひ聲で「願ひは聞き届けてつかはすから、毎晩門前の雀焼を献上しろとの御託宣あり。細君願ひも忘れあをくなつて逃げ歸つた。高田署では不良の巢とにらんで居る。

第六節 動物に據る崇拜

植物に次で動物に關聯した性崇拜の事實も亦少くはない。陽性として馬や蛇を祀り、健康を祈るに犬を祀り、繁榮を祈るに大鷲を祀るの類はそれである。西藏に於ける抱合神と牛姦、聖天に於ける抱合の象頭天、佛教徒から來つた山王の猿等、現在の我が國に傳承されてゐる信仰も頗る多い。

猿に就て例を擧ぐれば、猿は申に通じ甲申又は庚申に關しての性的行事は、古來かなり文献上に豊富で

動物に表はれた
性崇拜

山王の曰く「山王のお猿さんが大赤いおべい、が大好き云々」が俗語で、女陰をべいといふ地方がある。

あるから省くとするが、深川八幡境内の三猿石像は、中央の一猿が女陰を露出して居り丹粉を塗つて祈つたことがあつたといふのは、丁度埼玉縣熊谷在の三ツ木神社の猿と同一轍のものである。代表的に三ツ木神社に就て少し詳細に述べて置こう。

三ツ木神社は熊谷の一つ南の吹上驛から東に一里程遣入つた所の村社で、本来は大山祇命を祀つた日枝神社であるが、お前立の山王猿が崇拜の眼目となつて主客を顛倒して仕舞つた。

神官の説によると、信長の時代比叡山炎上に際し、一人の山僧は境内の日枝神社の御神體を背負ふて關東に走り、この箕田村字三ツ木の里に留つて祀つたのが今の御本體で、故あつて日枝神社と公稱されず、一般に山王の宮と呼んで來た。三ツ木神社とは維新後の名稱である。

昨今は大分ヨク研究者が荒したので、女陰を丹塗りにした石猿は簡単に授けなくなつたが、五六年前までは猿像を刷つたお札に添へてよく授けたものだ。

茲の信仰は縁結び縁切りを初め、子授け、腰部の病氣に功驗ありとし、夢想で參詣に來たと云つた傳説はザラにある位だから、鴻巣町からは日々三回の直通馬車があり、社前には掛茶屋も三四軒あつて、神徳萬能である。祈願者は前述の猿のお姿を拜借し來つて、満願の節はお供として同じ形の一體を買ひ添へて返戻するか、略式には此所獨特の繪馬を奉納することになつてゐる。この繪馬といふのは猿を一匹畫いてあるが、女陰の表徴として桃を抱かしてある。拜殿に繪馬は山になつてゐるが、拜殿の左手には昔からの石猿が間口三間奥行九尺の小屋に充満して居り、何れも女陰を刻み、祈願した丹粉が股間に附着してゐる。その大きさは二三寸から一尺位で、一心祈禱の際に社前に備へてある丹粉を塗つたものである。先年鴻巣署

神罰をうけた警官

下帯を要する村

で、このお姿庫を破棄に出張した警部補が、神罰を蒙つて半身不隨者になつたと傳へてゐる。

それは兎に角、氏子の尊崇は非常なもので、今に風習上に遺つてゐる一二を挙げると、この山王の氏子の女は下の病がないので下帯を用ゐる必要がないといふ所から、農婦などは田植時に用ゐてゐなかつたのを見たこともある。又各戸の竈に火口廂がない、即ち鍋釜の据穴と焚口の境堺がないのは、神意として前は覆ふな、有りのまゝ開放主義であれといふに起因してゐるといふが、同村隣字の箕田は大江山四天王の一人渡邊綱の出生地といふので、羅生門の鬼を逸した故事から、綱の主神箕田八幡の氏子は、今に棟窓を造らぬ奇風があつて、三ツ木とは面白い傳説の對照をなしてゐる。

京都東馬町の三島神社は安産の神として由來の舊い神社であるが、神使である鰻を神聖視して氏子又は祈願者は鰻を禁食してゐる。鰻と安産を併べて考へる時、鰻を神聖視することが必ずしも卑俗な附會觀念からと許りは思へない。

第七節 その他による崇拜

子安貝

お産の際、産婦に子安貝を握らせて安産を祈念する風習も未だ各地に實行されてゐる。

南方翁の著にも「貝子は今も土耳其、アラビア、ヌビア等にて廣く邪視を避るに用ひられ、吾國にても子安貝と稱し、産婦に握らせて其難を防ぐ（男色大鑑卷四第一章）、是れ古希臘人が之を女神アフロヂテの印しとせし如く、其の形甚だ女陰に似たる故、最も人と鬼の邪視を避るに效ありとせるに基くならん。」（南方隨筆）と云つてゐるが、初めは邪視防難から來つたもので、後人はその子安貝の名稱から安産に附會

櫛子木

したものであらう。但し防難の效あるより、或は子安貝と稱したものかも知れない。
三河豊橋市に正林寺といふお寺がある。茲の本堂には四尺許りの櫛木が釣り下げられてゐて、懷妊を希ふ婦人はこのスリコギを削つて貰つて煎腹すれば必ず子が出来ると傳へてゐる。この櫛木を「おじよちうさま」と稱してゐるが、その由來は不明である。

第八節 佛家に於ける性崇拜

佛教から土俗に習合した性崇拜や、佛教家の手に宣傳された性崇拜も亦頗る多い。その一二の特殊な例を擧げて見る。

縁起物やら土俗玩具やら由來する所のとんと判明せぬものに、静岡在服織村羽鳥の曹洞宗洞慶院から、七月二十日の御縁日に限り賣られる、「おかんざけ」なる若竹を敲いて造られた土俗品は著名である。

それは兎に角この洞慶院には、山門を這入ると直ぐ左側に本堂に到らぬうちに、五六個の連続した婦人用便所が併んで建てられてゐる。婦人病の者は參詣して、この便所を股いで何とか云ふ佛名を唱へて戻ると、奇妙に下の病は全治すると云つた信仰がある。

上野の不忍池畔の船形の地蔵は、ヨニとリングアの兩表徴佛として研究家の間に知られてゐるが、船に乗つた地蔵はこの他横濱の本牧から間門に出る右側の池田の寺にも併んでゐるし、神奈川の山下から原町田へ出る途中にも在るし、御殿場にもある。

洞慶院の便所

船と地蔵

役の行者

不忍池の聖天島の役の行者の石像が、東側から見ると陽石になつて居り、之れが前の地蔵と關聯して崇拜の一遺跡であることは、加藤玄智博士も度々説明してゐるが、之れと殆ど同型のもが駒込にも在ることを、長友鎮目桃泉君が発見して呉れたことがあつた。氏の報告によると、本郷駒込の電車終點から陸橋を渡つて、柴井の墓地へ行く通りの中程左側、杉森の下を往來から六間許り入り込んだ處で、有名なあまのじやくの石彫の近くで東面して建つてゐるといふ。但し不忍のは昔日の花柳界の中心點にあつたので崇拜の形跡もあつたのであるが、駒込のは同じ意味で果して崇拜したかどうかは不明である。

岡崎市から北東へ一里強に常盤村といふのがある。其所に三河の松平信光公の建立した萬松寺があつて門前右手の丘の間に、小さい五輪の塔七八基にとり圍れて中央に道祖神がある。全長向背より臺石迄一尺七寸、石面は僅に見分けうるリングアで、形の上から一寸珍しいものである。幾時頃からのものか記録もなく寺僧も知らぬらしいが、只三百年以上は経てゐるらしく、今は地蔵尊の名に於て崇拜されて居り、オコリの平癒を祈願するのに、左繩を以て此の像を縛し、癒れば其の繩を解くといふ。腰部以下の諸病に就て祈ることは勿論である。道祖神としての崇拜が後に地蔵に變化したといふ説が眞であるとすれば、習合神として貴重な資料である。(田中緑紅氏報)

島根縣簸川郡杵築町の玄光院に在る赤地蔵は、厨子に納つて軒下に安置されてゐるが、地蔵は石碑のやうなものに線だけで像が淺く彫つてあり、碑面は朱で眞赤に塗られてゐて見るもいやな感の湧く奇異のものであり、月經の故障のあるもの、朱を塗つて祈るといふ。

遠州金谷の洞善院の道樂地蔵も道祖神と、聖天像の習合で、二神抱擁の像であり、時宗藤澤の遊行寺の

光背の道祖神

全袖まで縛る所

参籠を初め、佛教行事の方面に於ても性に濫觴した行樂は未だ頗る多い。

第九節 復活を表象した墓碑

再生の祈念

古來墓塚に石を積むことは、死靈を怖れて防喝の意味で石を積むものと、一度は死しても必ず甦生すると信じ、その信念を生殖器によつて祈つたものとの二種があつた。性器は説明するまでもなく生氣再起を表徴するものといふ原始的思想に起源するもので、現在に遺つてゐるものには次のやうなのがある。

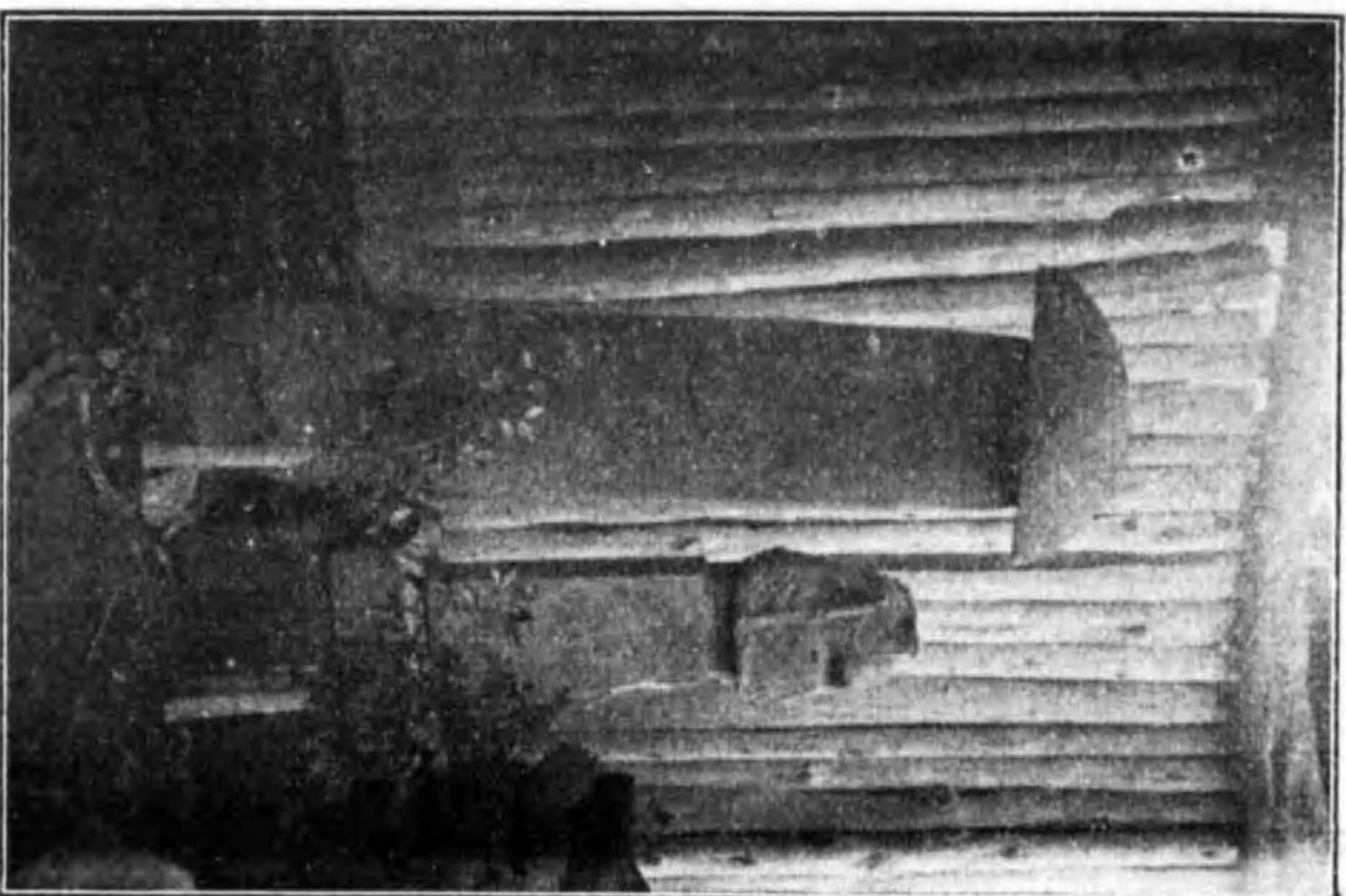
豊橋市正林寺の墓地にある金澤彌兵衛といふ左官職の、その妻女の墓といふのは丸石の陽形で、全長一尺五寸、周囲一尺七寸、トツプから四五寸下つた所に鉢巻式の線があり、一字も文字らしいものはない。三河足助町の十王堂の摩羅神なる性神が、墓標の間に介在して祀られてゐることは、明かに復活の祈願を偶しての祀りであるが、正林寺の由來に就ては全く揣摩憶測するより外はない。

紀伊和歌山市吹上寺の本居太平の墓も陽形を以て建てられ、研究家の間によく批評に上つてゐる。本所太平町の龍興院内にも一基ある。

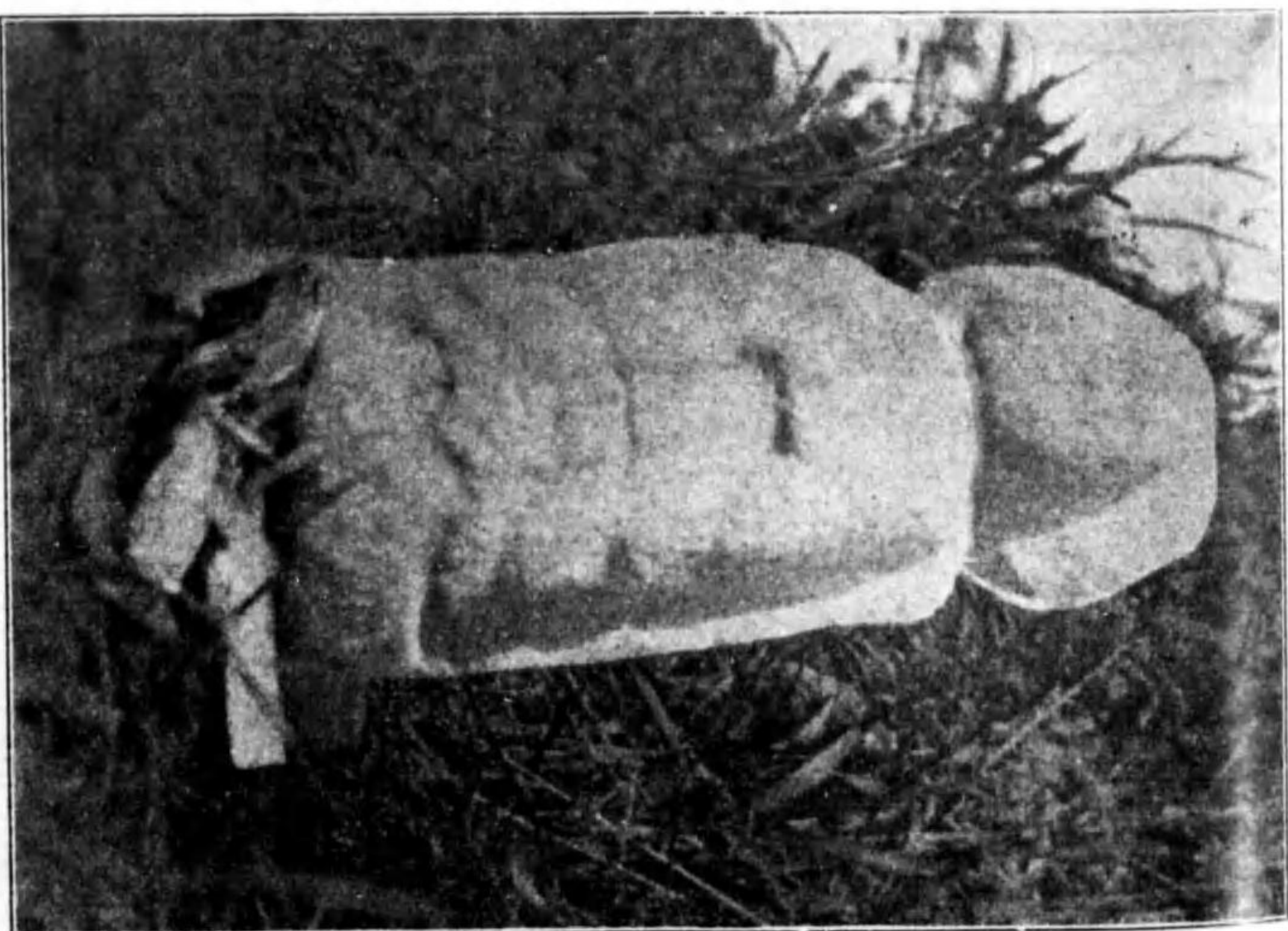
琉球では墓所に金をかけることは著名である。萬一窮乏して娘を賣つても墓は二の次といふ程大切にすゝる「墓の國」である。殊に本島では墓は母胎に歸るといふ意味で、女性のそれを型取つて築いてゐる。先年の「東京朝日」にも次の記事があつた。

先般の補缺選舉で初めて沖縄に渡つた代議士連、この墓を見て「成る程赤の他人ですら低徊去るに忍びない程だから、細君でも失つた者は、幾ら何でもその墓を抵當に入れる気にはなるまいよ」と感嘆し

墓の圖



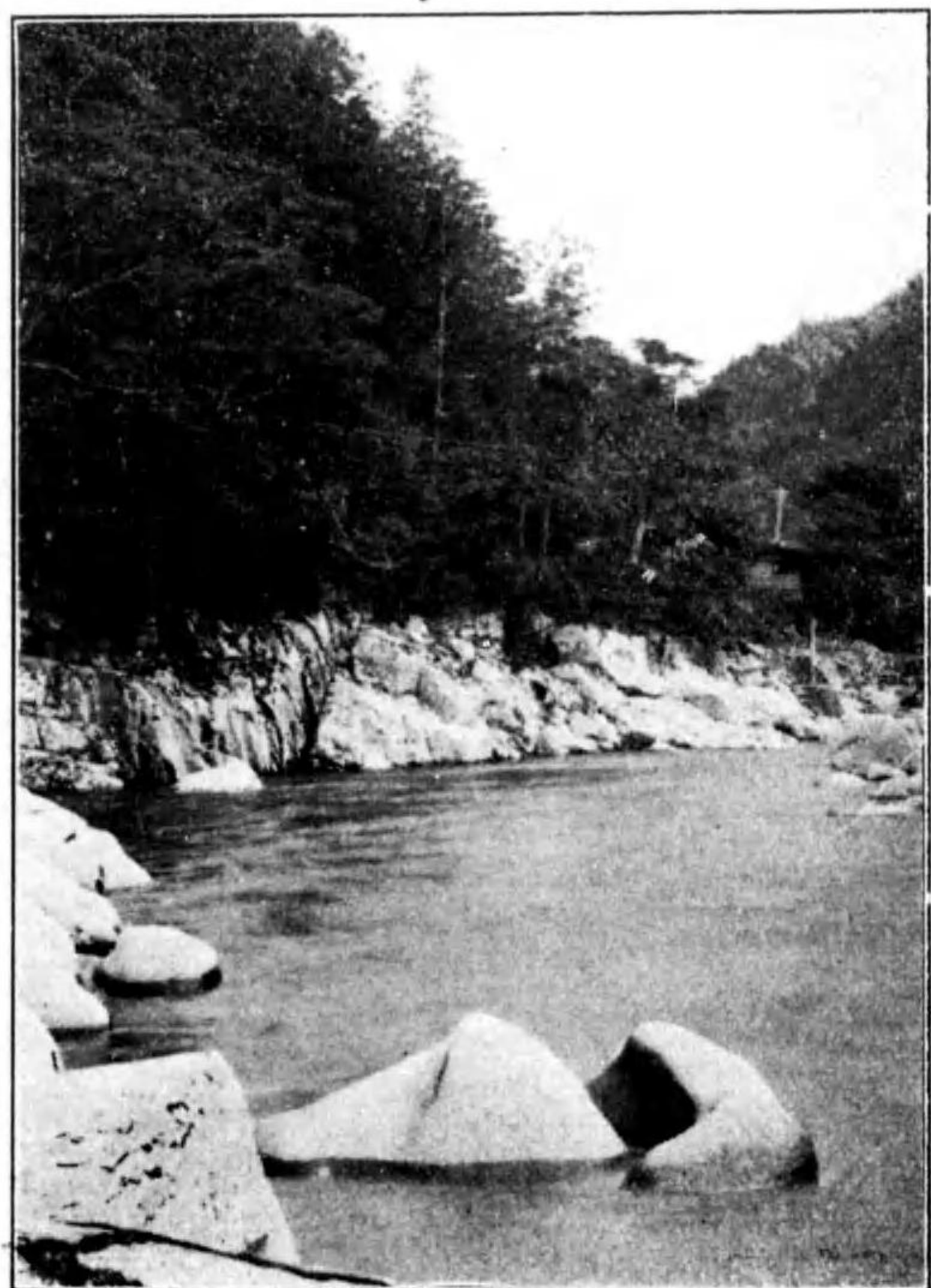
駿河清水江尻町水泉寺の日限地蔵——白痴——



尾張熱田の地蔵——豆人氏寫——



加賀金澤兼六公園のせきれい島
繪葉書より (五十三頁参照)



信濃木曾上松の女夫岩——自寫—— (五十三頁参照)

てみた。(大正十四年一月二十二日)

第十節 名所名園と性の關係

天下の名勝名所と呼べるゝ所には、必ず相生の松とか、女夫岩とか夫婦石なるものがあるのは、是等がなくば名勝としての資格に缺く所あるものにや。試みに探勝に際して注意すれば、木曾の溪流上ガ松に於ける夫婦岩を初め、存在なき所はないと云つても可なりだ。

又日本の名園と稱せらるゝ庭園にも必ず性神若しくはそれに類したものの存在は誠に不思議であるが、寡聞な自分等には解らぬが、何等か造庭上に必要とする理由の存するものであらうか。例へば岡山の後樂園に於ける陰陽石の如き、縁結びを祈願すると傳へられてゐるし(「奇習と土俗」その一)、加賀金澤の兼六公園のせきれい島にも陰陽石が祀られてゐる事は著名で、島には祠もあり、傍らには君徳讚美の詠歌まで刻んだ碑が建つてゐる。

この外、京橋築地の九代目園十郎遺愛の庭に、名石として傳へられてゐるものは、九代目が岐阜の名士の庭から譲りうけて、船で東京へ廻送したのは明治十六年で、初め名古屋材木町の伊丹幸の庭にあつた名石を所望して容れられず、より以上のものとして岐阜の選ばれたといふが、それは矢張り雄偉な陽形である。又、私園であつて公園以上の設備を施され且つ公開されてゐる、横濱本牧の名園三溪園の支那館の傍にも三抱えもあるものが先年人工ではあるが、如何にも自然的に造られ、近頃ではコケや藁が茂つて、山頂に異彩を放つてゐるし、大阪の長堀橋筋A家の庭の石燈籠の傍に置かれてゐる石も、高さ三尺強の陰

名園に性神

後樂園

兼六公園

九代目の愛石

石が殆ど氣付かれぬ程度に配置されてゐる等の例もある。但し石燈籠を陽形の變態と見る説もある。

第十一節 傳説、附會より來た崇拜其の他

元來性器崇拜は原始人の思想を傳承した結果の信仰、若しくはそれ等の變化であるが、中古からは間々史的人物に附會したり、國音の共通より迷信に入つたり、傳説を眞事に信じて誤れる者等は、一例を石神の項にも説いた通りであるが、尙一二の特色のある例を拾つて見るに、淺草觀音の仁王門の右手に在る久米の平内の信仰も、平内が自己の亡後はその屍をフミツケよと云つたのが、文付けに通じて戀の神となつたり、弓削道鏡が俗間の珍説から花柳界の神とされたり、幕末の志士、橋本左内が富士山頂の噴火口に向つて、女神と婚するは我一人のみと豪語して自慰をしたといふ(會我部一紅氏の説)史的逸聞を演じた如き例外もあり、一方には古來よりの陰毛崇拜を現代に繼承し來つて居る地方民もあり、岡山邊の如き各戸に備前燒の男形又は女形を祀る一廓もある。又同じ岡山縣下に於ても、兒島郡郷内村の熊野權現宮は拜殿の建築物の部分々々にまで陽形を彫刻しあるに(武田銳二氏報)至つては、純眞を去つて全く迷信既に、こうもうに入つた原始宗教の外道である。この他一般的のものに、お多福天狗の面は古くから傳へられ、ぐつと後世には補助の崇拜も起つたのである。

第十二節 性神祭事

賣春の濫觴が神祭に起源した如く、祭典祭事行事の多くは、長い年月に幾多の變化はあつたにしても、

祭典と性教育

その一端には幾分の性的行事が含まれてゐることは當然でもあり、自然でもある。殊に我が國は神國と稱する丈に國々地方々々によつて、相異つた遺風を傳へてゐる事は多大なもので、最近に亡び、又は亡びつゝあるもの、佛を存するもの、表象的に遺さるゝもの等研究的に擧げ來つたら中々に際限がないが、詳細は近く別に『性神祭漫談』に盡すとして、本篇には一二を擧げる。

備中後月郡明治村宇種部落では、少年期から青年期に移る年輩の若衆は、その氏神八幡天神の祭に際して、袴の下に約一尺位の張抜き男根を吊し、袴を少しく端折れば見ゆる程度に仕組んでねり歩き時に袴から之れを覗かせて戯言を弄しながら、片手で祭扇子を以て股間に風を送るやうに見せかけて、その實は男根を動かしながら練り廻るといふ。(橋本春陵君直話)

右と反對な方法で行はれる祭事が三河の熱池にあるが、左に稻垣豆人君の調査をかりやう。

大根で男根の形を造り、それをお尻の上にくゝり尻を振つて踊る祭があると云へば驚く方もあらう、それが數百年來の昔から傳つて數年前風俗上で差止められたが、古來の風習であるからと云ふので再び行はれる事になつた。これをテンテコ祭といふ。

三河國幡豆郡福地村大字熱池に村社八幡社がある。此の附近は悠紀齋田が古く定められた所で、『三代實錄』には清和天皇貞觀元年大嘗祭に當り、神祇官は三河國幡豆郡を悠紀齋田の地と定むとあるのは此の地方で、齋戸、野の宮等齋田に關する文字が残つてゐる。八幡社は譽田別尊、應神天皇の二柱を祀り例祭は十月十四日と、他にこのテンテコ祭がある。境内二百八十五坪、四坪の神殿と四坪五合の拜殿のある他天神社の末社がある丈である。氏子も僅かに四十二戸、元祿時代の鰐口が唯一の寶物である。

岡崎驛を起點として西の方へ向つて走る西尾線に乗り、八つ目の一色口驛に下車すると六七丁で此の八幡社へ到る。テンテコ祭は一に豊年祭と云ひ、毎年舊一月三日午後二時より始められる。西尾、一色間の街道より約九尺幅の道路を西へ一丁程入ると此の神社で、石の鳥居があり左右には神明形の石燈籠がある。東面の拜殿から渡り屋を経て神殿があり、左手前の天神社の前には此の祭に要する藁灰が山積されてゐる。境内の周圍は謂ゆる神田で、當日は此の鳥居の兩側に丈高い幟が二本建てられ、奉獻正八幡宮と大書し、下方に三寶に御酒壺一對が彩色入で書かれてあり、鳥居には注連を張り、松と竹が門松として立てられてゐる。

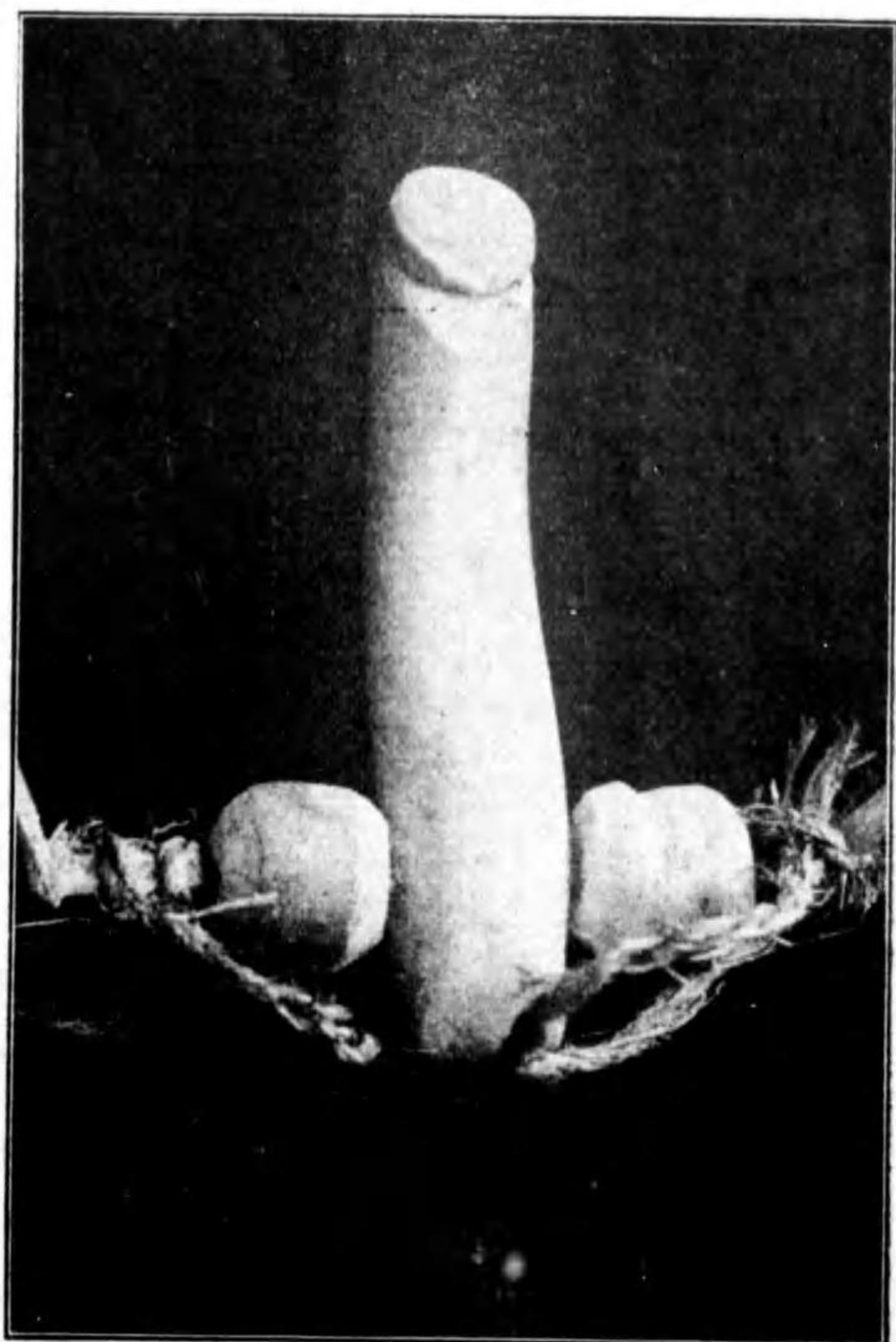
神社から二丁程距つた家で一切行列の準備をなし、先頭は水色の衣冠束帯の神官、次に區長、氏子總代次に此の年厄年に當る青年が唄子になる。唄子は三人で三人共赤色の袖付腰下までの着物を着、赤色の布で頬冠りをなし、腰の後ろのお尻の上部に大根で筋迄彫りあらはした男根、其の左右に同じ大根を圓丸形にしたものをつけ、割竹でこの三つを貫き通し、繩で結び帯となして付ける。三人目の男は男根形の尖に笹葉を付ける。三人の内一番目は縮太鼓を左の肩にし、右手にムチを持ち、二番目は赤色の布にて造る風呂敷へ徑一尺深さ六寸位の飯櫃に、御飯を入れて背負ひ、三番目は笹葉付の竹二本、長六尺位を千鳥に兩端へ笹を出し棒となし、此の前荷は楕圓形一尺五寸に、七寸位、深さ四寸位の手桶の中へ筒を入れ、又長一尺五寸太さ三寸位の注連を釣り、上より稻穂を五寸許りを下げ、注連へは幣紙と藁が挟まれ、二尾の鯛が兩肉を採つて只頭と鬚骨に尾の付いたのが釣り下げられてゐる。何の爲か意味はわからぬといふ事である。後荷は普通の風呂敷にて酒樽を結び包んで釣り下げられてゐる。此の男の大根の男根の尖には笹の葉



山神と婚した橋本左内（五十四頁参照）



尾張・テンテコ祭——豆人氏寫——(五十六頁參照)



上圖腰上の大根を擴大せるもの

が挿してある。此の三人の次が赤色の頬冠り文をして(着衣は普通)、長さ六尺位の笹の葉の付いた竹箒を
 捧持する者三人が續き、其の後是一般の人である。

此の列が鳥居先へ来ると神官が修祓の式を行ひ、次でテンテン、テンテコテンと太鼓の拍子に合わせて三
 人の男は巧に腰を前後に振るので、大根は上下へ動き實に奇妙な格好でやつて来る。例の一行は拜殿に上
 り左右に着座し、神官が神前で禮拜をなし一同も禮拜を終ると、唄子三人箒持三人は拜殿より降り、箒持
 は藁灰の後に佇立し、唄子三人は夫々の持物を持ち、太鼓の拍子に合わせて腰振面白く右より藁灰と石燈籠
 の間へ進み、鳥居の右柱の外から左廻りにて中央へ入り、此の間始終踊り腰で三回半目に、急に拜殿に馳
 け込むと同時に箒持は灰を箒にて撒きちらすので、境内は灰だらけとなり、見物人は左右へ逃げ出す。之
 れは田へ肥料を施す意で、此の灰が掛ると禍があると云ひ、又逆に厄が免ると云ふ二説がある。

此の式が終ると一同は拜殿へ復座し、大根の男根は前の柱に上中下三段に結付け、神官は再び神前で祝
 詞を奏す。此の時區長を始め一同は一本の赤色扇子を擴げ左廻りに「千秋萬歳」を唱へて三度宛廻り、交
 々終て神官も元の座へ復し、是より徑三尺位ある大太鼓に拍子を合せ、田植歌を唱ふのであるが、其の歌
 は少しも解らない。昔は十二句あつたが、今は四句を三度繰返して十二度とし、此の間に門松の松葉を十
 二度拜殿へ投込む。これは早苗打の義である。是で祭は終り神饌を撤し村中の者は先の飯、鱈を頂けば夏
 病をせぬとて競ひ頂く。又此の大根は乾して置き、子供のオコリの病に效驗があるとして三本の大根は貰
 手が頗る多い。(田植唄は略す 以上。)

伊勢山田の高日山常明寺では一月八日と、十二月十日との二回に祭事を行ひ、こゝは外宮末社といふの

餅撒き

で禰宜一人、神官役人祭事に勤行し、祭事畢て寺堂から男女陰形の餅を撒き與へる。俗に無孕の婦人その陰形を拾ひ得れば、その形に應じて男子又は女子を産むと信ぜられてゐる。

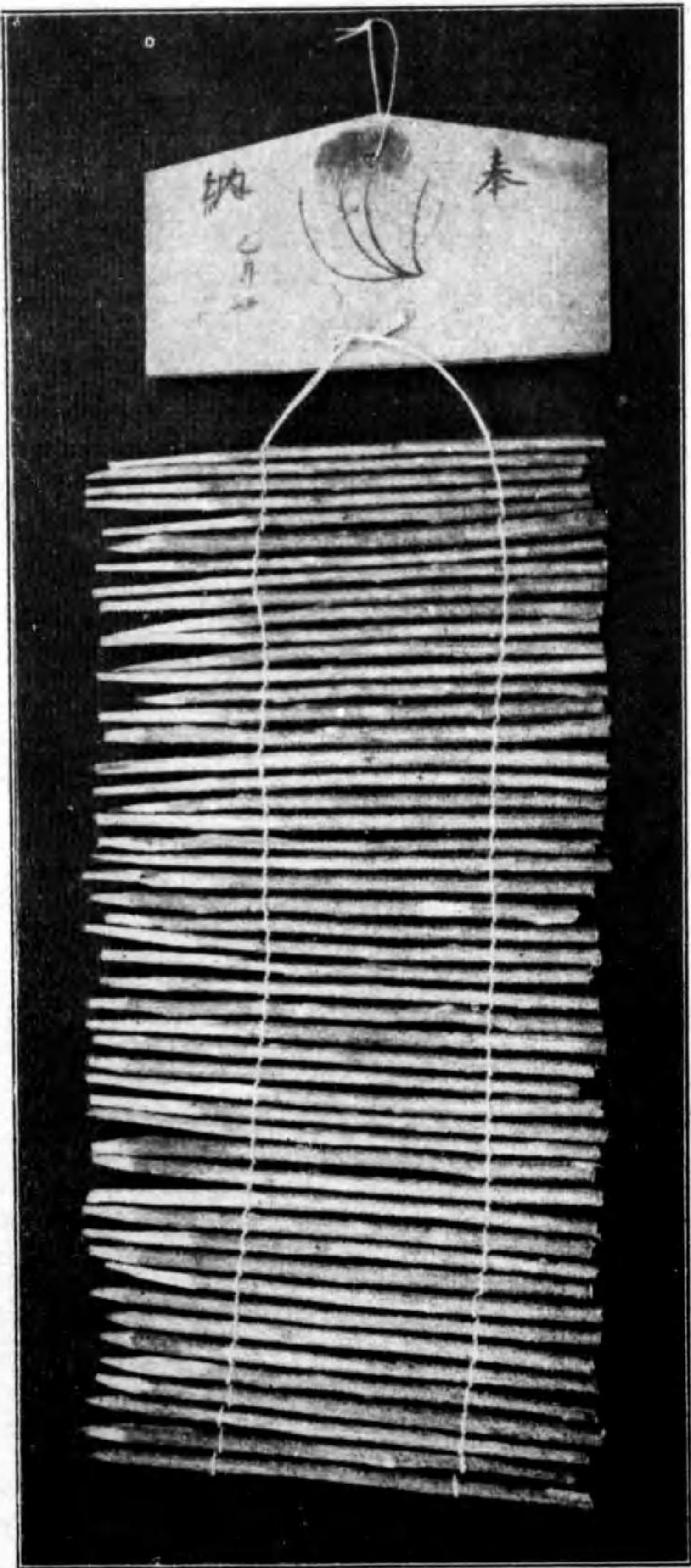
砂山岳紅氏の本年七月の報告によれば、磐越西線會津若松から五驛程新潟へ寄つた野澤驛——福島縣河沼郡野澤町といふ、戸數二百五十戸許りの町から約一里北に當つて、俗に「山の神」といふ社がある。冬はとも雪で行かれないが、大祭は秋の様であつたと思ふ。祭神は大山祇神の娘木花咲耶姫であるが、お札は大山祇神としてある。新潟の近くへ出る阿賀川の上流只見川を下る筏師や山師が非常に信仰してゐる。この祭典の爲に野澤の町の宿屋は一年の生活費をとるといふ位で、主として新潟北蒲原の人が多く、新潟邊から遙々オコゼの干したのを背の處へ糸を通して一匹宛持参し、その奉納は神前に簀のやうに結び付けられてゐる。この夜、蒲原あたりから一夜泊りで來る男女は老若を問はず、面識の有無もなしに、何處の宿屋も満員で廊下にまで寝る盛況で、夜半の性的方面の騒ぎは、當夜に限つて治外法權とされてゐる丈に、全くの歡樂境を現出してゐたが、それは大正十年頃の實見であつた。

性の開放

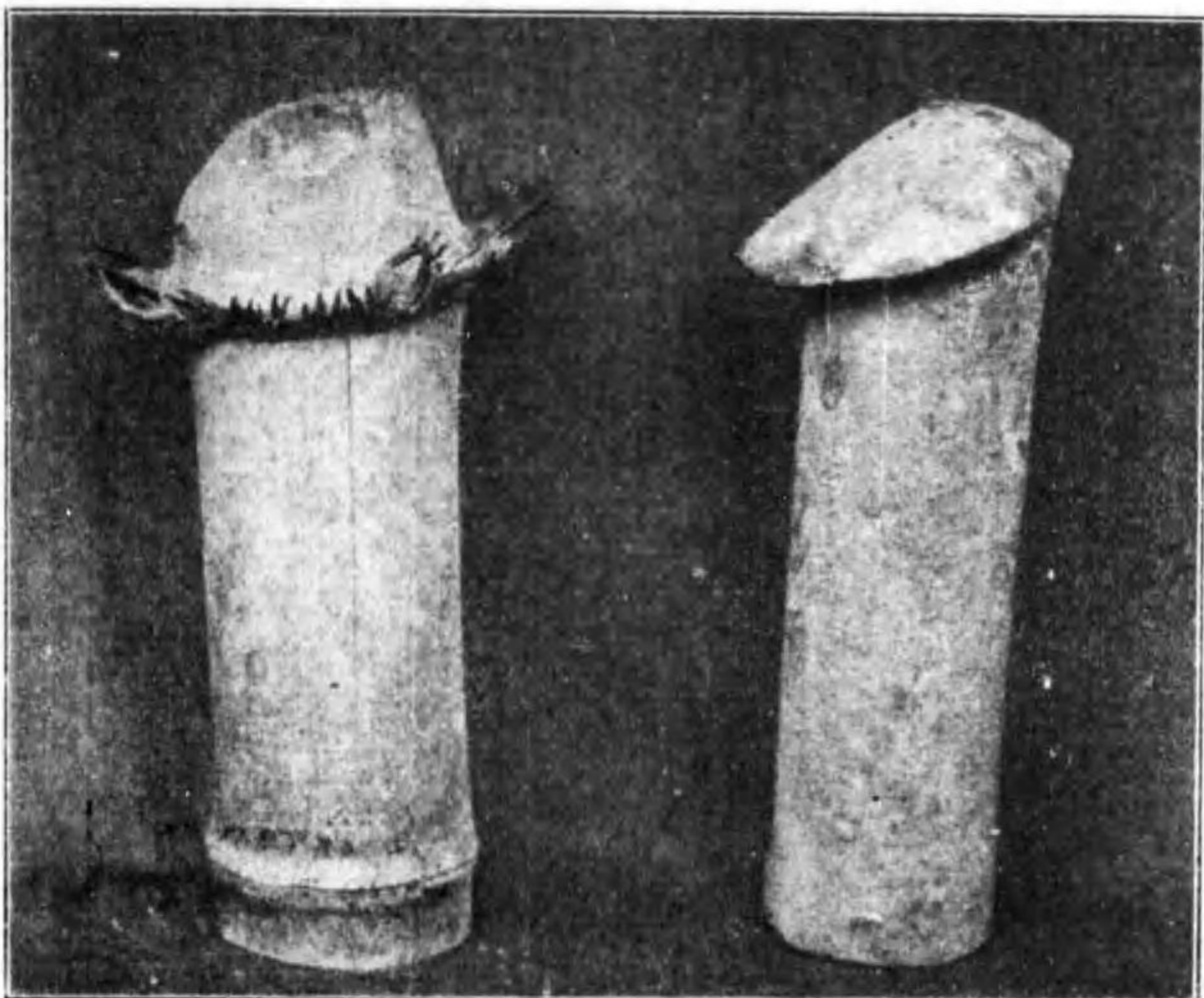
第十三節 奉納物

御本體が性器そのものゝ形であるが故に、祈願若しくはお禮の奉納物として、神體にちかい性器に擬したものを納むる慣習になつたものは多いが、中には神體そのものは兎に角、奉納物のみ性器を作るものと、表微的のもので納むる物等の區別がある。

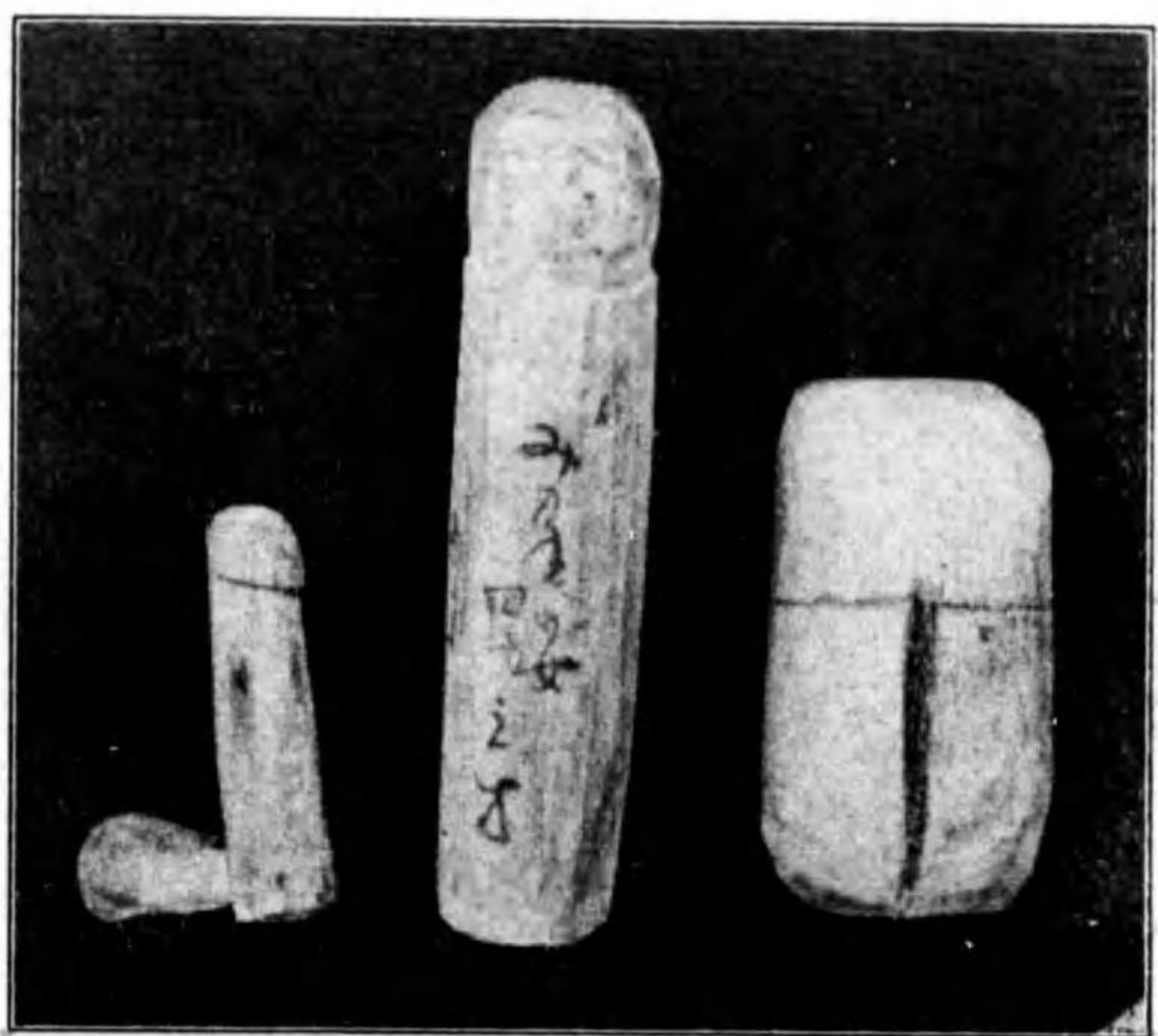
又同じ性器を奉納するとしても、地方々々によつて二三の特長を發揮したもので納むる例もある。一般



信濃上田在男石祠の奉納物——自寫——(五十九頁参照)



右 オホ野神社の奉納物（鉄）
左 福島地方の道祖神奉納物（竹の根）



阿波おほ野神社の奉納物、桐製三種
（二圖共五十九頁参照）

奉納物には貧富の別あり

麻績をみと調む

火吹竹

には石又は桐によつて陽形を造り納むるものが大半で、石と桐とは奉納者の生活程度が基準になつてゐるものらしく、下總の太田權現、備中の倉敷及び武蔵川崎の金山神社、常陸竹原の道鏡社、相摸田浦の吾妻神社等、殆ど全国的に行はれてゐる。東北殊に卷城神社は南部鐵を以て造り、福島地方では竹の根をそのまま陰毛として見なして造られ、一般的に道祖神に納めてゐる。信州では雜木を四五寸に斷ち、先のみ木肌を無造作に削つて一見陽形に見分け難いまでに表象的になつたもの（男石祠）あるし、麻績驛から一里半程道入つた番場峠の祭事には通草あけくさと松茸まつたけを供へる（木村毅氏談）と云ひ、三河の磯神へは瓦の産地丈に瓦製の罌丸付のものを納め、瀬戸焼や備前焼の（既述）作品もあるといひ、下野野木村の正月の行事には大根を以て陽形を造り鎮守に納むる風があるが、進化したものとしては日向や大隅邊で、道祖神に雖か火吹竹を納め、浦和在の與野の水川神社では昔日は石、桐製の陽物を納めたといふが、現在では二つ重ねたおそなへ餅の形を奉納し、おまん覆おまんぼに房楊子ふらふし（千駄ヶ谷）、石神に杓子しやくし（一般的）、稻荷に丹塗の小鳥居こどり（伏見、穴守その他）を納めたり、紀伊の官幣中社伊太祁曾神社の管占行事は勿論平素の性的祈願に際しては、直径五寸許りの菅笠を納むる風があり、これは瘡を治めるに通じて信仰したもの（宮崎線外翁の説）が因をなしてゐるかも知れない。

以上のうち、桐製のもの各地とも復數にして奉納する所多く、隨て信仰の盛んな祠ではその處分に因る程溜る次第で、之れが爲めの納め小屋（繪馬堂の變態）を造つて置く所も（足利の水使神社、下總の小高、太田等）あり、時々警官の手を煩はして燒却する所もある。この奉納に就ても奉納者の性格を説明してゐるもので、反物の芯棒を二つに分けて、やつと形丈を造つて半紙に包み水引をかけたものや、藁でく

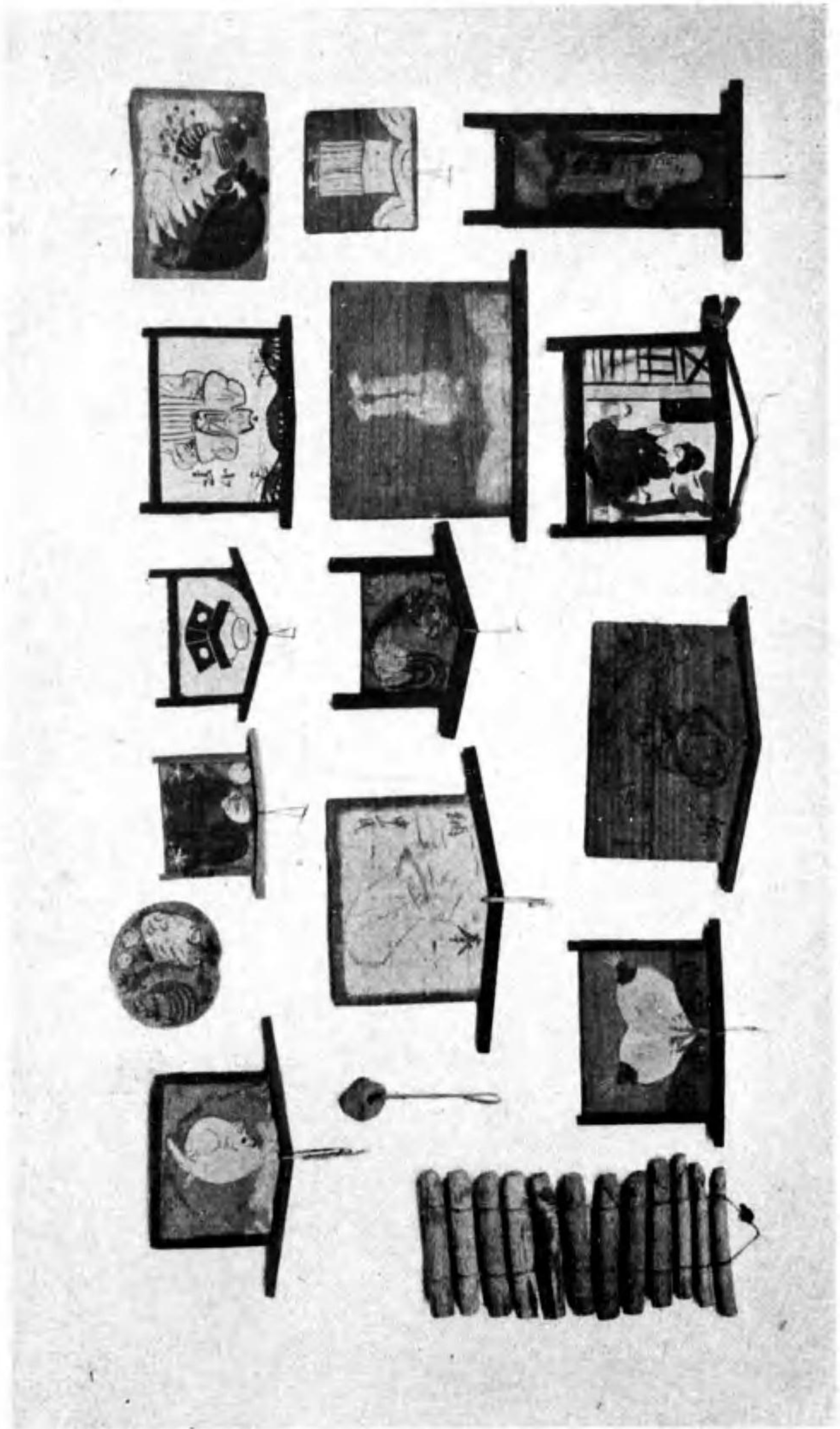
奉納者の心遣

くつたもの、自分の頭髮を巻添えたもの、明かに姓名を署名したもの、年齢のみもの、干支と男女別のみもの等あり、全く心から感謝のものと、神様に虚言しては申譯ないと形式丈に奉納するものとの區別もほど推察出来る。

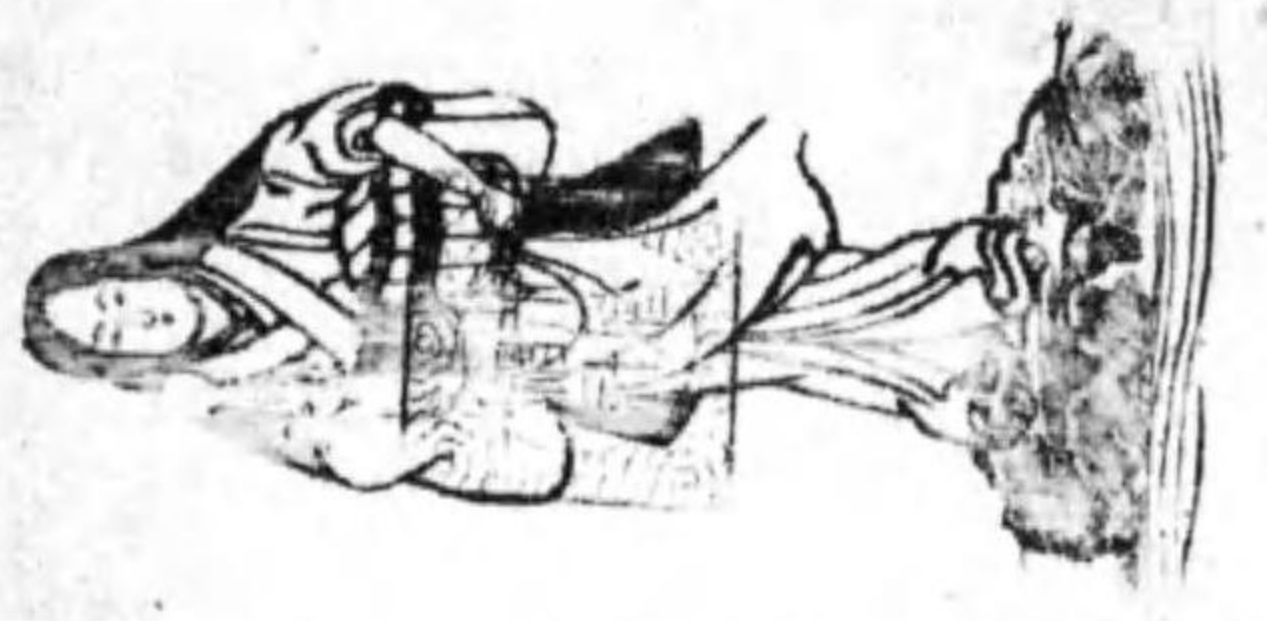
三つ木神社に、猿の像と繪馬の山積は既に説いた通りだが、この外に奉納繪馬で埋つてゐるものは、相摸厚木の吾妻神社の雞の繪馬、水使神社の腰から下を描いた(昔は女陰を描いたものもある)繪馬などは署名の方であらう。

なほ、自然石の穴の明いたもの、かはらけに糸を通して納むるもの、達磨を納むる等の慣例は各地に遺つてゐる。

奉納物として性に関する小繪馬——自寫——(六十頁参照)



鹿島要石



熊野神社



熊野神社大前御祈禱之板
 伊勢郡根柵村大田鎮

性に關する御影札(右より 鹿島要石。下野水使神社。武藏女郎佛。下總太三權現。六十一頁參照)

第五章 現在に遺る信仰と世俗行事

以上は主として性器に對する崇拜から信仰、祈願から報謝に就ての大要を調べたものであるが、茲には更にそれ等が態を變へ形を改めて、現代の吾々が、意識無意識の間に行ひつゝあるものと、現在の社寺より發行する御影、札のうちの、以上の崇拜に起源又は關聯するものかと思はるゝものを少し拾つて見やう。

先づ御札や護符に就て見るに、西の市の縁起物とされてゐる松茸、八頭芋、お福の假面並に掻き込む熊手に大とりの神札を挿んで戻る信仰は云はずがな。春日手水舎大黒社の男女二柱の大黒によつて表象されてゐる、女の碇盤を頂くのも面白く、足利の水使女神の杓子を捧げたる、紀伊加太の女夫離の御守の腰より下の病に效ある、加波山の天狗の御影に於ける、尾張田縣神社の方形の札を、わざ／＼二つの三角形◇に折つて兩性を表徴した如き、又田縣は田方即ち男の文字から轉じた結果かと思はるゝは、鹿島の要石が、陽石にちかい例など研究に價するものが多い。

お札のうちで赤裸に性器を表はしてゐるものに、舊くは足利の鍮阿寺の陽石の札、十三年毎に發行する周防川崎觀音の御影、三ツ木の猿の陰毛の跡の残れるお札、武藏地福寺の石神を樹間に挟んだ札、尾張熱田の妙安寺の金勢道祖大明神と記したリングガの小札等は主なるものである。

次は正月の行事で、悉く道祖神に關係する行事と云つても然るべきもの。注連を張つて邪鬼惡魔を防ぐの遺風、鏡餅、粥杖、うそ替、繭玉、どんど焼き、蘇民祭、水祝等は地方々々によつて何れも露骨に兩性器を模造して祀り懸ける遺風行事のみならず、初賣りには指頭大の陽物を、藝者等には商品に添えて出す

護符

正月の行事

初賣り

ことは、現在でも淺草觀音參道の〇〇〇店では實行してゐる。又節分の豆撒きにも男の「福は内」を唱へて歩く後から、播子木棒を捧げた女が「御最も〜」と受けて唱へる類の行事は、箱根の湯河原の宿でも實見したが、金澤地方その他にも、より露骨に振舞はれてゐる所がある。

その他、進物に於ける「のし」、水引の紅白及び赤を右とする由來、大工が上棟式に重んずる儀式、各地に於ける魔除けの法と性器、晴雨に關する祈禱と性器、農作豊年祈念と性器との關係行事、害蟲除けに男形を建てる「古語拾遺」の傳説が、東京府下府中の大國魂神社で祭事として現に行はるゝの類は未だ澤山に遺つてゐる。

第六章 性崇拜及び信仰を離れた遺風

こんな題目の下に參考までに少し拾つて見やう。

二本の杓子

相摸地方では、一つの飯櫃に杓子を二本入れることを忌む。夫婦喧嘩が絶えぬとかいふ。杓子を一つの陽形から来た貞操思想に基くものであらう。

笑繪の効用

京阪地方へ行くと殷賑な商賈の門口等に、如何にも清酒に且つ盆景的に石や岩が据えてある。あれは魔除けの塞の神の故事に由來するものが趣味化されたものではなからうか。笑繪を秘蔵することは衣類財寶が殖えるといふので、古來男女共に簞笥や紙入れに收めて所有する風は今に變らない。

ゆもじと火防

女のゆもじは火防になると傳へられ、去る十二年の大震災にも、東神奈川驛構内の東北に高く翻つてゐたのを九月二日の朝に見たが、そのゆもじの邊から北は焼け残されてゐたのを微笑したこともあつた。

青年會のマーク

日本民族の家紋に就ては専門の研究者もあることであるが、宗教方面の萬字、十字が性器に關係あることは上述の通りとして、女子基督青年會のマーク▽の中央に横に一字を加へたなどは、如何にも女子のマークとして偶然ながらの自然的の形をなしてゐる。この外、上り下りの省線車掌の發車信號の口笛の區別、樂器三味線の竿の頭に於ける天子の陰陽相對並びに竿を組み外した際、はめ込む駒をまをとこと稱するなども滑稽である。この種のものを探つたら實際に際限がない。

日本の玩具に性的化の多き理由

猶日本の古來の玩具は、外國の多くが兒童の保育用に創案されてゐるのに比し、日本のは全く信仰上か

ら来て、神社佛閣から授與したのが大部分で、随つてその起源に就ては性の崇拜又は表徴から来たかと思はれるものも少くない。左に畏友本山桂川君の説を借用して置く。但し中に就ては多少再考を要するものもある。

(前略) 茲に於て私は此の研究の主題たる *Pallicorn* の對象としての玩具及縁起物に就て、其の若干を詮索して見た。先づ第一に「蘇民將來」を探つて私の研究組上に上げる。

(其一) 蘇民將來

羽前置賜郡南原村大字笹野の蘇民將來と、信濃小縣郡神川村大字國分の國分寺八日堂の蘇民將來と、名古屋市中區天王崎町洲崎神社の蘇民將來に就て述べやう。

羽前の笹野は米澤市の南方一里の所にある。古來「笹野人形」若くは「笹野彫」を以て有名である。一名「笹野の削り掛け人形」と稱して居る。之は冬期の農閑期に於て、手先の器用な農民達が黃楊類の柔い材料の上に、一挺の小刀を以て彫刻した極めてプリミティブな作品で、色彩なども天保前後迄は草の實又は楓の液汁を絞つて染めて居た。其の作品には有名な「お鷹ポツポ」や「大黒天」を初め、鶴、龜、兎の餅搗、農人形、菊の花などの數種があり、蘇民將來も亦其の一つである。これ等の物は毎年舊曆十二月十七日の千手觀音堂に於ける年越祭の縁起物として賣出され、商家及び花柳界の人々が喜び購うて神棚に供へ、又或物は兒童の玩具として愛用される。蘇民將來の大きさは高さ五六寸のものから、小さは五六分位のものである。圖の如く八角に削り、墨、紅、蘇枋の三色を以て極めて單純なる着色が施され、各々角と角との間の表面には墨で「蘇民將來子孫人也」若くは「蘇民將來之子孫也」といふ文字を一字宛割つて

書いてある。下部は臺のやうな形に三段に段をつけて刻まれ、其の頭部は中高くして圖のAに示すが如き手法が加へてある。之れが例の *Pallicorn* シンボルでなくして何であらう。殊にそれが花柳界の崇拜物であるに至つて、最も有力なる實證を提供して居るではないか。

信州國分寺のそれは毎年正月八日國分寺八日堂藥師の大縁日の際に、同寺から參詣人に頒分されるもので、それも大小の數種があり、小は笹野のそれと大同小異である。只頭部が圖のBの如く作られ、下部の彩色を朱と墨との點を以て施す。材料は主に今柳を用ひ、大は高さ七八寸、圖の如く各面交互に朱と墨の二色を以て描かれて居る。文字は一面に各二字宛、一面は墨、其の次の面は朱といふ順序で「蘇民將來子孫人也大福長者」と十二字が分書されてある。頭部、腰部及び下部の模様は何を表象するものであるかは此處で説明の限りでない。願くば諸君の研究に俟つ。同寺に於ては村内の舊家に命じて毎年一定の數を限つて製作せしめ、祈禱を修して後、賽者に頒つのであるが、彼等は、之を頂いて神棚又は室内適當の場所に安置し、小なるは之を懷中に藏め、又は糸を付けて幼兒の衣服の腰或は背或は帶等に吊し、疫病除のお守とする。同寺から此蘇民將來と共に頒たれる「蘇民將來符由來記」を見ると次の如く書かれてゐる。

蘇民將來符由來記

蘇民將來の符は吾が國分寺の藥師堂より疫除開運出世の護符として信徒に頒つものにして、柳材を六角塔形に刻み蘇民將來子孫也大福長者の十二字を書し、小は高さ三分より大は七寸に及ぶ。當時は天平年間に入皇四十五代聖武天皇の勅を奉じ、行基大僧正の創建せられたる金光明天王護國之寺の遺跡にして、天正慶長の兵燹に諸堂概ね焼失したるも、本尊藥師如來及び十二神將の像は其の厄を免かれ、外に三重

の古塔一基は特別保護建造物として現存し、其の他の地名廢殘の礎石及び屢々發見せらるゝ古瓦燼餘の
 屋材等に依り屢々古へを徵すべし。當寺より此の符を出したる最初の時代は詳ならざれ共、蓋し數百年
 來行はれたる所にして、今に至るまで平日と雖も遠近より之れを請ひ求むるもの少からず、殊に毎年正
 月八日の藥師大緣日に方りては、參詣の客屬集群至して争うて之を求め携へ歸りて室内に安置し、或は
 懐に藏め又は腰に帯びて疫癘を瘳はんことを期せり。此符の由來は古く備後風土記に出でたる神話傳説
 に基くものか、其の説に依れば素盞鳴尊備後國兩浦を過りて、蘇民將來といへるものゝ家に宿したまひ
 し時、蘇民將來は厚く尊を崇敬款待したりければ、尊は今後疫癘行はれむ時、汝が子孫なりと稱するも
 のには其の厄を免れしめむと約したまへりとなり。即ち此符は素尊の神話に基き、疫除開運出世の護符
 として崇重せらるゝの來歴を有し、當寺より出す所のもの能く舊時の形式を失はず、之に對する祈禱製
 作頒與の慣行に至るまで能く古代の遺風を存して、未だ曾て廢絶したることなきは蓋し異とするに足ら
 む歟。

長野縣小縣郡神川村大字國分

天臺宗淨瑠璃山國分寺八日堂

華頂峰良普薩述

此の國分寺の蘇民將來に就ては蜀山人全集中の「一話一言」にも「信濃國國分寺にて正月八日より候よ
 し、彼の地にてはシュミンチウライとやら唱へ候とて、文化七年の春土井秋邦より見せたり、印植などの
 遺製にや」と出て居るが、流石は蜀山人である。「印植などの遺製にや」といふ僅かな文字が蘇民將來の根

本由來を道破せんとして居る。これは後に「卯植」「卯杖」に就ての私の研究に於て肯定されるところで、
 其の間の關係と脈絡とを説けば、又此の國分寺蘇民將來が祖先 *Patrician* の對象であつた事が闡明される
 のである。

名古屋の洲崎神社の蘇民將來は、毎年節分に頒布される。其の由來記によると「蘇民將來の神符は古き
 書によれば、素盞鳴尊備後國兩浦の浦にいたりまして蘇民將來といへる者の家に宿り給ひし時、其の主人厚
 く尊を崇敬つかへまつりしかば、尊は蘇民將來が子孫と名乗る者共に疫癘また諸の枉事を除き、幸福を多
 からしめん事を誓ひ賜ひしと云ふ古事により、疫癘開運出世の護符とし是を出すになむ」とあつて、全く
 信州國分寺の由來記を襲踏して居るが、護符其の物に至りては全然形を異にし、高さ二寸五分巾一寸厚
 さ三分五厘の杉板を圖の如く刻み例の文字を現はす。さうして頭部及び腰部表面に朱を以て描かれたるデ
 ザインは、最も吾人の意を得たるものである。裏面にも亦頭部の三點に同様の朱點を置き、且つ其の下部
 には「疫除開運出世護符」として「洲崎の神靈」といふのが坐つてゐる。之を奉書の紙に包み赤紙の狭い
 帯で締めてある。此の包紙さへも私には一種の聯想を喚起せしむる材料となる。

蘇民將來の祭で最も有名なのは、陸中江刺郡黒石村に於ける藥師如來の大祭であらう。同村黒石寺は天
 平元年行基菩薩の那建に係る古刹で本尊藥師如來を祀り、毎年舊曆正月七日の夜を以て盛大なる祭典が執
 行される。此の黒石村の蘇民祭に就ては加藤咄堂氏の「日本風俗志」第三編第三章にも記載してあるが、
 私は尙正確を期する爲め先年「日本及日本人」の増刊として發行された「郷土光華號」掲出「蘇民祭の奇
 習」と題する遠藤子修氏の報告を其の儘掲げることにする。曰く、

……其式典と光景と、共に珍奇とするに足る。今其の概況を述べんに、期に先ちて四方の信徒一週日の潔齋をなし、祭日に至り衆相集まり、饗宴を用ひて十二支の形を模造して之を佛前に供へ、又穀木を削りて六方角と爲したる物を寸餘に鋸截し、每方「蘇民將來子孫門戸也」の九字を書して之を巨囊に盛る。囊は必ず一夕間に紡織せる麻布を油煮して之を製す。日既に西に暮れば、男女老少東西より來り賽する者、寺域に充滿し、徹夜雪中に席し、炭火を熾んにして寒を防ぎ、特に祈願ある者は共に一團となり、單に襯衣と脚衣とのみを著けて、堂前溪水に浴す。溪水は氷結して鏡の如きを、衆力もて之を破碎して飛浴す、其の勇氣實に驚くに堪へたり。浴し畢つて如來を拜し、拜し畢つて復浴す。此の如くすること數回、頃瀉くして鐘聲數聲鏗鏘然として起れば、壯丁の棍棒及び萬燈を携ふる者數百人、松炬を執る者を擁して數町の間、叱咤群を排して堂に繰り込む。遠く之を望めば長蛇の火光を放つが如く近く望めば阿修羅の如くにて、彼等が群衆を掃ふの狀、實に勇壯を極め、如何なる者をも近接せしめざるの勢あり。漸次堂内に入り、箱爐を三所に設けて炬を焚く。衆其の餘燼を以て互に相ひ撞撃す。之れを祭燈木登といふ。別當登之れに次ぐ。住持の僧、壯丁の護る所となりて堂に詣づ、其式前述の如し。最後に鬼子登あり、七八歳の童兒二人、頑強なる壯者に負はれ、一人は青色の鬼面を背にし、右手に木斧を持ち左手に松炬を把り、一人は赤色の鬼面を背にし、右手に木槌を携へ、左手に葦炬を握り、共に祭燈の周邊を三巡す。此の時に至りて參拜者此の式を見んと腕を扼し肩を怒らして、堂外より潮の如く押し寄せ來る。茲に於てか内外の争鬪と爲る。住持は壇上に立ちて白槩を東西南北に撒布す、群衆先を争ひて之を受けんとすれば、住持護衛の壯者又群衆を掃蕩し、住持の執法を容易ならしめんと努め、其

の光景眞に壯快を極む。白槩を呼んで曼荼羅米といふ。相ひ傳ふ之を口にする者は能く災疾を穢ふと。式訖る比ひ漏漸く移り、夜將に五更ならむとす。時は壇信中の一人、布囊を抱きて躍て群中に入り、高く蘇民と呼ぶこと三度。此れより先き該布囊を取つて第一功を誇らんと、堂の周圍天井等に裸體となりて時の到るを待ち居る者多し。此の聲を聴くや、一時に猛進して囊を攫み、之を取らんとして相争ひ、紛拏叫號、狂するが如く、歎するが如く、仆れては起き、起きては又仆れ、腕痿え身破るといへども、敢て退かず、囊の己の手に入るを待ちて後止む。其の壯觀、蓋し備前西太寺の會陽、下總の成田山の節分會に減ぜず。按ずるに蘇民將來は、安部晴明の篇篋内傳載する所の午頭天王の故事に出づ。佛家藥師如來を以て天王の本地佛となす、故に斯の祭あり。或は言ふ、賽客囊を争ふは天王巨鬼を誅するの日、天兵其の首級を争ふの狀に擬すと。當地に斯の祭を行ふの年代極めて古るく、創始の日の稽ふべからざるを遺憾とす。云々。

これが我等が遠き祖先の、最も高潮せる生態生活上の争鬪を髣髴たらしむる遺風である。前に述べた信州國分寺の蘇民祭にも同じ遺風があり、彼の備前上道郡西太寺村なる西太寺の會陽も亦此の所謂蘇民祭である。即ち私の研究上の言葉を以て言ひ換ふれば、之れ又我等が遠き祖先の最も高潮せる生態上に現はれたる鬪争の遺風であるのである。其處に於ては會陽結願の舊曆正月十四日の夜、大なる混亂と争鬪との間に投下されたる午王符―所謂神木―を争ひ奪ふ儀式がある。スター博士の言を借りて言へば「會陽といふのは簡単に定義すると寺僧が寶木と稱する直徑二寸長さ七寸ばかりの木の切れを投げる、之を得るは即ち福を得るなりで、若いものが横鼻禪一つで争ひとなる儀式である」。博士は之に附言して曰く、「私は参考

の爲め木の質をきいて見たが、秘密といふことになつて居るといつて聞くことを得なかつた。秘密は此の際一寸變だと私は首をひねつた。なぜなれば寶木は毎年一度づゝは必ず誰れかの手におつる。手におちたものが何の木か分らないでゐる理窟はないからである」と。此處に注意すべきは之等の神符を授くる神佛が總て藥師如來、又は午頭天王である事である。信州國分寺のそれも、陸中黒石のそれも共に藥師如來を本尊とし、佛前西太寺の會陽は又其堂側にある午王大権現を祭る所の儀式である。而して藥師如來といふも實は表面の事丈で、其の奥は必ず午頭天王があり又あつたのである。

安倍晴明の陰陽道に従へば午頭天王は素盞鳴尊であり、蘇民將來は手名植足名槌の翁媪であるとされて居るが、要するにそれは皆我が國に於ける彼一流の附會であつて、本末顛倒も甚だしい。蘇民將來の傳説は獨り我が國のみならず、支那の佛教及陰陽道にも之れあり、其の源を印度の宗教に發し、其の印度の宗教が歸するところ、彼等祖先の Phallicism に泉み出て居る事に就ては、尙詳細なる研究と論證とを必要とするけれども、今は只今日我々の手に傳つて居るところの縁起物の一「蘇民將來」が、煎じ詰むれば皆此の Phallicism の對象であつたといふ事丈を述ぶるとよめ、更に私は第二の研究資料として龜戸神社の卵杖と卵槌を取り出す。

(其二) 卵杖及卵槌

圖の四は東京龜戸神社の卵杖である。此の卵杖は毎年正月初卯の日に同神社より卵槌と共に參詣者に頒布する縁起物で、其の由來記を見ると次の如くである。

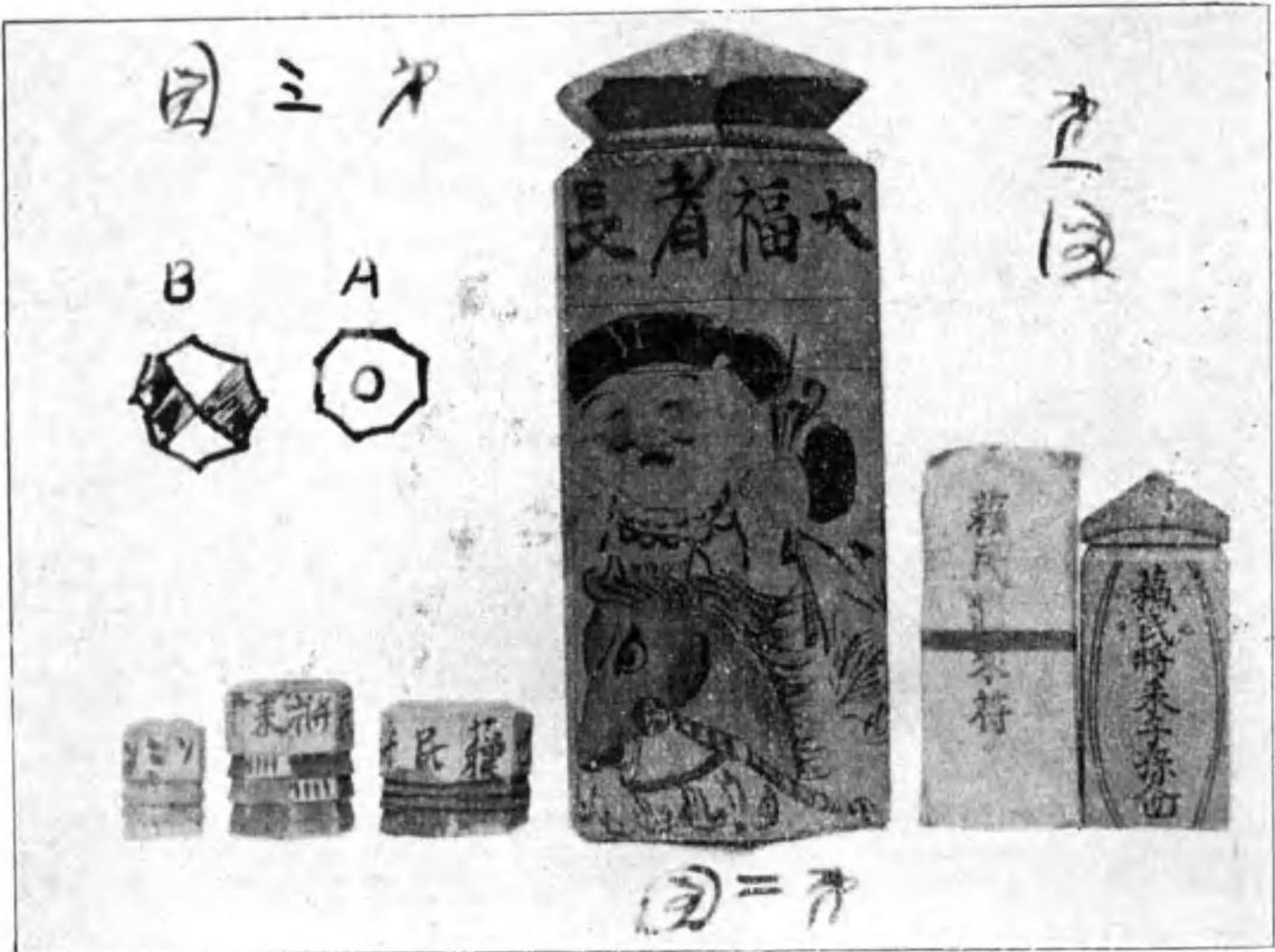
卵杖剛杖穀杖卵槌由來



第四圖 卵杖 (七十頁參照)



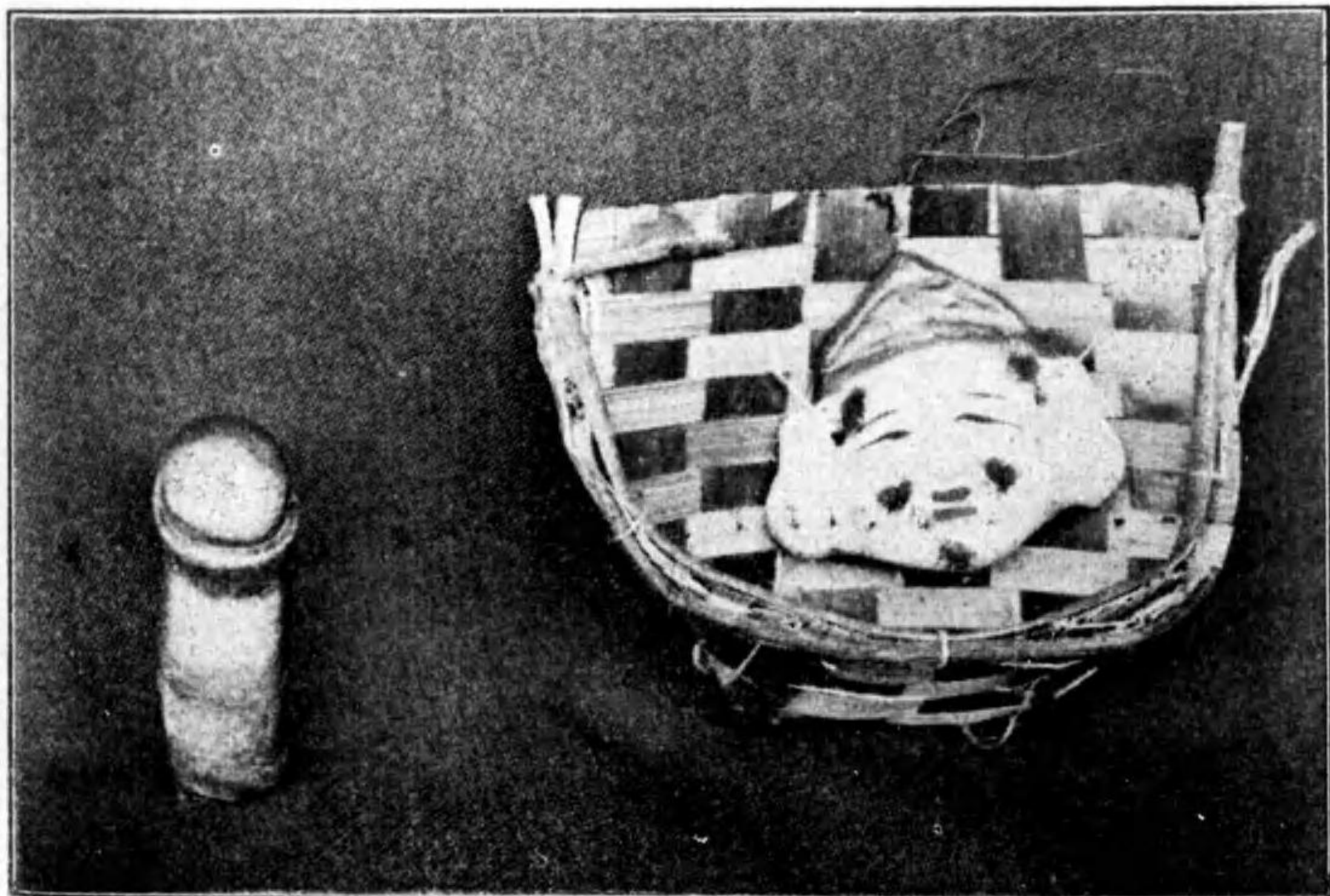
第五圖 こけし道子 (七十五頁參照)



第一圖は名古屋、第二圖は信濃國分寺、第三圖は羽田野の蘇民將來 (六十四頁參照)



第六圖 木の葉戯 (七十三頁参照)



第七圖 大阪十日戎の縁起物 (七十六頁参照)

抑も免徒惠、得返知の起元は漢朝の故事にして、皇國にては大化朱鳥の御宇より始めてものに所見、毎年正月卯日に公儀より諸臣方に賜れる由は類聚國史、延喜式等にくはし、亦公事根元、加茂年中行事源氏の抄、枕草紙、春曙抄拵に見え、熱田の神祭に卯つえ舞ありて、上古は専ら貴賤これをもてはやし、そのとしの生氣にかざりもふけ、あるは枕上等に置きてあさゆう見てしあればおのづからもろくの災害を除き、悪癘をはらひきよめ、久しひにあやし喜、佐賀あること、南、被可度祝。

杖といふ事は曩に道祖神に關する傳説(中略)にも現はれて居る通り、祖先の生慾生活を表象するに甚だ重要な物質となつて居る。此の杖は又「木の枝」であつても好い。前に述べた陸中黒石の蘇民祭にもそれは木斧となり、松炬となり、木槌となつて表はれて居る。備前西太寺の會陽に於ける神木も亦それである。第一蘇民將來を手名槌、足名槌の翁媪とすることから杖や槌に因縁をつけて居るわけである、蜀山人が蘇民將來と卯槌との關係を併せ考へようとした事は、此の點に於て私の賞讃に値する。私の研究によれば、卯槌は畢竟卯杖の動作を一層表象化したものに外ならない。殊に卯杖が如何なる性質のものであるかといふ事は、『簾中舊記』の左の一節が最も吾人の意を強める。曰く「御つゑと申す事は十五日のあしたとくさぎてうおもてにて御覽じ候のち、いつもの御所にて上様はしめ參らせ候て、御女房方の御かたのうへを、三づゝそと御打ち候その御杖に御あたり候が御めんほくに候云々」洵に明快にして、然かも圓滑なる説明ではあるまいか、『播磨名所巡覽圖繪』を見ると、飾磨地方の道辻の祠では、宮守が竹の杖を以て杖をなし、其の杖を以て妻妾を選ばず腰を打つて安産の呪すとある。亦同じの行き方である。古來柳杖と粥杖との異同に就ては種々の説があるが、私を以て見れば何れも同じものであるといふことに歸着する。『日本歳

時記」正月十五日の條に云ふ。「今日粥杖とて松枝柴などにて女の腰をうてば、子をうむまじないとて今もすることなり……北國には松の枝を五色にいろどりてそれにて女を打つ所あり、西國には棒にて女をうつ所あり云々」と、打撲と性慾の關係に就いても私見があるが此處には割愛する。

龜戸神社の卯杖卯槌は之を以て子なき婦人の腰を叩く時、其處に其の婦人に對する妊孕の暗示を與へ得ると云はれて居る。之れに關する説明は「年中風俗考」の直載なるに如くものはない。曰く「卯槌、一に大の子といふ、大の子いふ義也、陰相を作りて童のもてあそびとし、女を祝して大のおのこを持ちたまへと云ふ義也」とある。表面大きな子供を持てよ——とように云はれて居るが、其の實此のおのこといふ言葉はもつと深刻な他の意味に解釋せられ得る餘地が十分に殘してあるようだ。それが又祖先の Phallicism の對象の一つである事は更に縷説を必要としない。龜戸の卯槌は木製長さ四寸三分、五分五厘宛の面をもつた六方形で、對角の直徑一寸一分、木質は檜である。六面の相對した二面は之を綠青で染めて、竹に凝らした節が書いてあり、他の二面づゝには松と竹とが月並に畫かれて居る。方四寸二分の奉書白紙と四寸の紅唐紙とを重ね、紅を上にして頭部を包み之れを六つの面に應じて熨斗の如く折り落し、更に其の上を五色の糸で結んである。卯杖卯槌に就ては最早それ以上の説明を略すが、實物を御覽でなければ熟々此圖を凝視して自得せられたい。

以下成るべく理論をさけて本題の研究資料を提供しやう。

(其三) 龜作馬

龜作馬は常陸那珂郡村松山の虚空藏菩薩に奉納する板馬である。之れは毎年舊曆正月十五日と同三月十

三日の緣日に其の境内に於て繫がれるもので、松材を以て極めて粗雑なる手法と神秘的な紋様とが施してある。これは普通今日の繪馬の最も古い形式のものとされて居るが、思ふに此の奇異なる紋様の一部は廣く Phallus と Genitals を描き出したものではあるまいか。近來此の模様極めて曖昧模糊となつてしまつたものもないではないけれども、古く廻れば廻るほど此の部分は明かに此の作物の中心であり焦點である事を證して居る。これと丁度同じ形式のものが今一つ奈良の手向山八幡にある。馬代又は板立馬と稱して此の處では墨丹綠、青黃白等の複雑な描法によつて神馬の形能に化されてしまつては居るが、特に其の紋様を説明して七曜の形象に則つたものと勿體を付ける。それだけ其の紋様が元々馬其の物でなかつた事を證明してくれて居るのである。彼の福島縣(磐城)田村郡大字高柴村で製作する三春子育木馬の如きは多分はかう云ふ所に系統を持つて居るかも知れない。

(其四) 大隅鯛車

大隅鯛車は始良郡國分村の八幡宮の祭禮に繫ぐ、俗に鯛車と稱する玩具である。前の常陸の龜作馬と行き方を同じうした然かももつと原始的な、而して甚だ露骨なものである。板をもつて形能を作り、之れに四輪を附し鯛車と稱しては居るものゝ之れが鯛であるといふ事は兒童等さへも首肯し難い異形のものである。胴を境として左右に之を分ち見る時に於ては、頭部が Phallus であり Genitals であるべき事は一見誰しもが認識し得る所であらう。

(其五) 木ノ葉猿

圖六は肥後玉名郡木ノ葉村に於て製作する木ノ葉猿の一種である。何等の型を用ひず只人の指を以て土

を捏ね、之を素焼にして胡粉と丹と群青とを無雜作に着色した、極めて原始的なものである。現今製作するものは馬に乗つた(或は犬に乗つたのかも知れない)雄猿と、子を抱いた雌猿とであるが元來は此の子持猿を本源とする。同地方では俗に「子育猿」と稱へ子なき婦人が求めて之を神棚に祭り、朝夕祈願する時は壯健なる子供を授かると云ひ傳へられて居る。それ丈でも既にPhallicismの對象であることが首肯される筈であるが、尙其の動かぬ證據を擧ぐれば、雌猿の抱いて居る子供なるものが頗る怪しく、現に以前は之を立派なPhallusに作つて居たのである。其の一種は野上白川氏譯ビエール・ロタイの「おきくさん」の表紙の背に白川氏自身のデザインとして描寫されて居る。

此の外古製として私の所有して居るものには、太い立木を背にして之を後手に背負ふやうな形をしたものがある。然し此の立木が頗る怪しく、頭部は扁平であるが單狀に形作られて居る。肥前北高來郡古賀村に於て製作されたる古賀人形の中にも小さな子持猿といふのがある。普通疱瘡の禁厭として行はれて居るけれども、それとて木ノ葉猿の子持猿と同巧異曲なるものである事は勿論である。十方庵の「遊歴雜記」には武州足立郡三木村の山王にはある時に中央に立膝したる女猿があり「都鄙よりさゞぐる繪馬は皆春畫の如うなる繪を書し奉納せり」とある。猿を以てPhallusを表象する事も單り九州ばかりではないことがわかる。尙猿に関する玩具の研究は他日別に之れを記述する機会があるであらう。

(其六) 熊本の女達磨

圖十二は金澤市にて製される女達磨の背部を示したものである。不倒翁を模したと云はるゝ達磨の或物が又Phallicismの對象の一つであつた事は之れを見ても分明である。熊本では此の女達磨の事を「おきな」

と稱し、表面は普通の女達磨に相違はない。然し其の背部の白地には墨黒々と落書きの如く描かれたる紋様は之れ又Phallusを表現して居る事は争はれない所である。されば達磨は玩具としての動作によつても連想される如く、祖先の崇拜物若くは玩具として極めて興味ある種類の物であつたに相違ない。従つて土佐高知の女達磨、陸中一ノ關の女達磨、岩代會津の姫達磨等各地に存在する是等のものは皆同一系統の線上に置かるべきものと思ふ。

(其七) 芥子遺子

圖五は岩代信夫郡飯坂地方にある小芥子遺子である。これと同種のもは陸中西磐井郡一ノ關地方にも存在するが、何れも挽物細工の圓い棒の頭に見女の首を填め込んだ形になつて居る。之れ又例によつて例の通りである。山形の小芥子遺子は今日精巧な陶器製となつて居る。其の外陸奥羽前の各地方には又之れと同様なエチコボウコと稱するものが散在する。熊本縣日奈久にあるおきん女と稱する木製の人形も亦同系に屬せしむべきものであらう。

伯耆東伯郡倉吉町地方に存するおぼこ人形は、全體を張抜きとしてあるが、之れも亦芥子遺子の一種である。さうして之等は又伊勢や高松地方にも存在してゐる。説いて此處まで來ると今日盛大に行はるゝ雛祭の雛の往古の形態であつたと云ふ彼の「天兒」や「御伽遺子」や「はりこ」或は「はいこんぼう」なども皆之れと同一系統線上に立たされる事になり、雖其のものが又元來祖先のPhallicismの對象から傳統變遷し來つたものであるといふ、私獨特の痛快な結論に到着するのであるが、雛の研究に就ては何れ改めて卑見を述べることゝし、茲にかなり煩はしかつた本篇の執筆を一先づ切上げる事としよう

Phallicism の対象としての玩具及縁起物は尙以上の外、或種の首振人形、狐、犬、猫、馬等によつて表
象された多くのものがあるけれども、其の總てを一々此處に列舉發表する事は暫く見合せた。(以上)

尙、参考までに挿繪に就て説明すれば、圖八は、つい近年まで伊勢の二見で賣られた縁起物で、輕石で
松茸式の形に、はりこのお福を附着させたお土産物である。圖七は大阪の十日戎に賣られる福笑で、傍ら
のは金まらである。圖九は山形産の桃太郎、圖十は琉球の獅子頭で寶珠を戴くものと、一本の角形の突起
したものを戴くものとあり、明かに兩性を區別してゐる。圖十一は信州松本の木獨樂で、彼地ではチンポ
コイヤと稱して居り氷の上で廻す。圖十二は金澤の女達磨である。以下略す。

第十圖 琉球の獅子頭



第九圖 山形の桃太郎

第十二圖 金澤の女達磨
第九、十、十一、十二圖七十六頁參照)



第十一圖 松本の木獨樂

第八圖 伊勢二見のお福 (七十六頁參照)





上圖は正月の玉遊び「奥奉公出世双六」で、應賀の作、國貞の畫である。明治初年の發行に於けるもの。下圖は上圖の中央を擴大せるものである。



第七章 將來の研究を要する問題

未解決の研究

説き終つて、この研究に就て將來の研究を要すべき問題の多々あるうち、同志の力にまつべき研究には、道祖神の内の祠のなき路傍の立石の、最も古きもの存在と年代が第一で、多くは徳川期以降のものであるのが研究上興味ある問題である。次では天神と花柳病との關係、柱と性の關係、華表と女陰との關係、鏡餅や水引の關係、お札に表はれてゐる女性器の起源、さては既出のお聖、田方、等々研究の結果は案外興味ある發見があるかと思ふ、最後に自分は岩手地方に多く祭祀さる胸形なる神名が、馬の産地なるが爲の名稱でないことを述べて見たい。要するにこの名稱は神名又は社格決定の際に附會したもので、元來は樹木に現はれた股の崇拜に起源したもので、このまた即ち木の又神から來たつたものと信ずる。これに就ては現在の駒形社の多くは御神體が駒そのものに多くは關係なき點、性器崇拜により多くの信仰がほの見えて居る點に於て、或は木の股の轉訛なるべきを思ふ。

パツクレーの懸案

パツクレー氏は更に元三大師の踊りの他にも存するや否、蛇が水火の守護者として崇拜せらるゝ理由、鰻を贈答に用ふる理由、神道に於ける紅白二色を用ふる起源等を擧げてゐたが、それ等に就ては自分等もなほ研究中に屬するもの、追つては神道に於ける巴の左巻きと右巻きの何れを新古とすべきかなども、研究の結果に於ては他の研究に影響すべき資料ともならんかとも思はれる。

巴の巻き方

禁風I
35

このところにはつかうしよの
けんいんなきはにせはんです
もしけんいんなきものがあり
ましたらおしらせください



昭和二十一年一月七日印刷納本
昭和二十一年一月五日發行
著者 齋藤昌三
發行兼印刷人 上森健一郎
東京市牛込區赤城元町三十四番地
發行所 文藝資料研究會

變態崇拜史 終

終